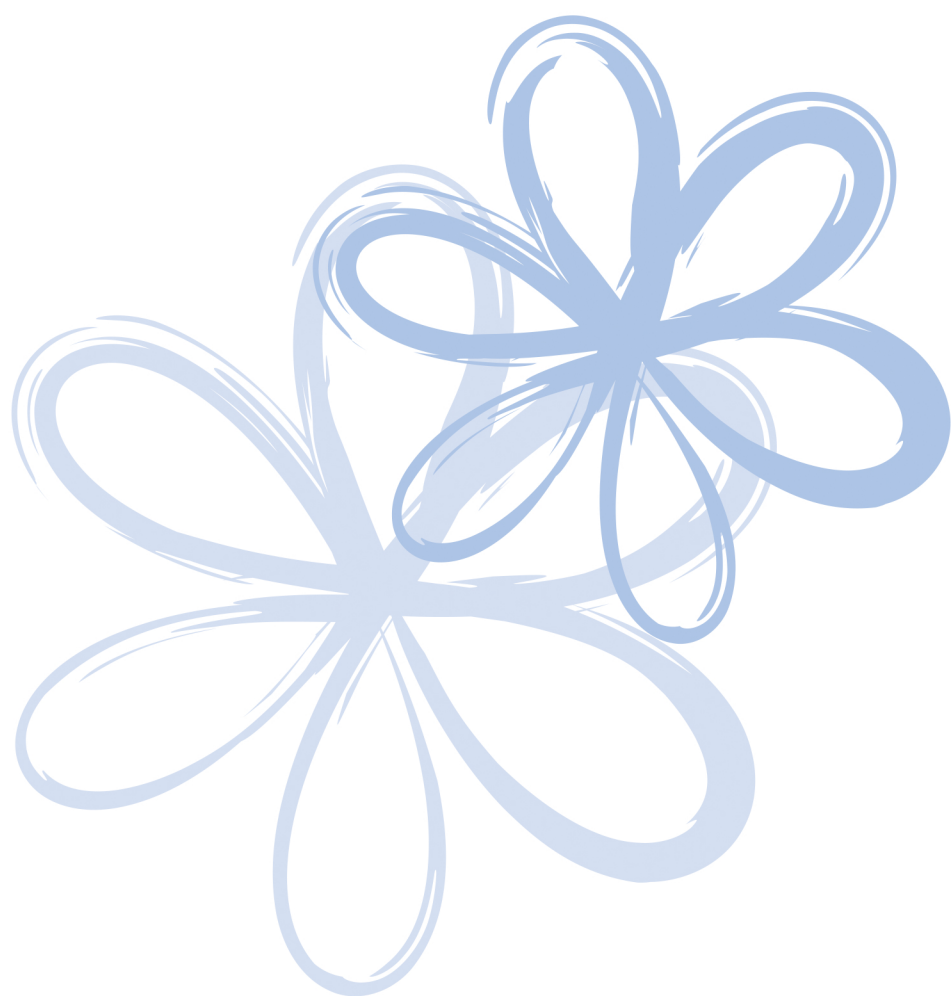


教育開発センタージャーナル

創刊号
2010.3



神戸学院大学教育開発センター

「教育開発センタージャーナル」創刊号発行に寄せて

神戸学院大学学長 岡 田 芳 男

「教育開発センタージャーナル」創刊号が発行されますことを、皆様と共に慶びたいと思います。

現在日本は少子高齢化、グローバル化の中にあり、大学への進学率が50%を超える情勢です。第二次世界大戦の後、日本の教育制度が改革され、大学も新しく生まれ変わりました。しかし大学の制度は変わったものの教育制度改革の精神が理解されないまま今日に至っていると言っても過言ではありません。

大学のユニバーサル化に伴い大学の質も変わってきております。このような状況下で、学士課程教育の強化を図り、世界に通用するものとするために教育改革を継続する必要があります。

神戸学院大学には長年培ってきた教育実績がありますが、今後さらに、その教育力のレベルアップを図り、変化しつつある大学に相応しい教育活動を展開していくことが求められています。入学から卒業まで、あらゆる段階での教育方法を研究し実施していかなければなりません。

幸い各学部、共通教育機構、学際教育機構等において、初年次教育から段階を追った教育方法の開発に真剣に取り組んでおります。研究開発された新しい教育方法に関する論文やそれらの実施例を掲載し、学内はもとより全国に発信して下さい。将来、このジャーナルが日本の教育界に於ける中心的教育ジャーナルに発展していくことを祈念してお祝いの言葉といたします。

● 目 次 ●

「比較文化方法論実習Ⅰ・『茶と書における日中文化比較』実践報告」	中山 文, 青山由起子, 諸泉 聡子	1
2009 年度中国語初級教育における実践報告	中山 文, 山本 透江, 李 玲	17
2009 年度中国語中級教育における実践報告	中山 文, 池田磨左文, 傍島 史奈 于 耀明, 馬 麗娟	29
2009 年度中国語上級教育における実践報告	中山 文, 于 耀明, 山本 透江, 上田なおみ 池田磨左文, 谷口 高志	43
論理的思考の構築を目指すテーマ解析展開型学習	宮崎 杏奈, 浅田 麻琴, 日吉 陽子, 神谷 浩平 日置 和人, 北條 恵子, 岡田 芳男, 川崎 紘一 北川徳治郎, 佐々木秀明, 谷 昇平, 津田 裕子 国嶋 崇隆, 横井 利夫	57
受動型学習から能動型学習への切り替えを目指す チューター型演習の導入とその展開	浅田 麻琴, 宮崎 杏奈, 日吉 陽子, 神谷 浩平 日置 和人, 北條 恵子, 岡田 芳男, 川崎 紘一 北川徳治郎, 佐々木秀明, 谷 昇平, 津田 裕子 国嶋 崇隆, 横井 利夫	65
薬学部初年次教育の一環としての演習実習Ⅰ	内海 美保, 前田 光子, 山岡由美子	73
教育開発センターの活動報告		83

「比較文化方法論実習Ⅰ・ 『茶と書における日中文化比較』実践報告」

中山 文^{*}，青山由起子^{**}，諸泉 聡子^{***}

(2010 年 1 月 7 日受理)

はじめに

中山 文

2006 年に行われた人文学部の学科編成に伴い、筆者は歴史文化コースの配属になった。本コースは他大学の歴史学科のように歴史の専門家が集まる場所ではない。「歴史は過去の暗記ではない」をモットーに、歴史を時間の縦軸と空間の横軸でとらえた授業を行う。スタッフは歴史学の専門家 3 名と比較文化の視点から歴史を考えようという外国文学・文化の専門家 3 名で構成されている。日本・中国・ヨーロッパの歴史をフィールドとし、過去の営みから生活・習慣・考え方・経済などを総合的に学修し、現代社会を深く分析し、確かな方向性を持って未来を拓く力を育むことを目標としている。

本コース開設時、この目標達成のために実習科目を設定することになった。そこでは座学を専門とする専任スタッフには教えることのできない実践のプロを招くことにした。文化を体感する喜びを学生に教えてもらいたいと考えたのである。例えば茶道、料理、歌、絵画など、自分が過去の伝統とつながることを知り、そのことで今後の人生をより広く深く楽しむことができる。そんなきっかけとなる授業をしてほしかった。

だが、それらは市中の「カルチャーセンター」や「〇〇教室」の授業ではない。大学教育足りうる文化的教養に裏付けされている必要がある。どこにそのような授業を担当できる先生がいるのだろうか？ 我々は非常勤講師探しに奔走した。

筆者が担当したのは比較文化方法論実習Ⅰという 2 回生後期用の授業である。日中比較をテーマに考えて、「茶」と「書」が思い浮かんだ。結局中国文学の大家で本学の同僚でもあった一海知義先生に相談し、適任の方をご紹介いただいた。諸泉先生は煎茶「日本礼道小笠原流煎茶」の副家元で、中国文学の修士号を取得されている。青山先生は「明治維新における公文書書体の転換とそのメカニズムー視覚メディアとしての公文書書体ー」で博士号を取得されている。授業自体が初めての試みなので、こちらの趣旨をお話しし、授業運営はすべてお 2 人にお任せした。

以下はそのお 2 人の 3 年間の奮闘の記録である。

* 神戸学院大学人文学部教授 ** 神戸学院大学人文学部非常勤講師

*** 華道専正池坊、日本礼道小笠原流煎茶副家元

I. 実習の形態

青山由起子・諸泉聡子

本実習「比較文化方法論実習Ⅰ」は「茶と書」という副タイトルを持つ。「茶」の実習担当者（諸泉）と「書」の担当者（青山）の2人が協力して実習を進める。担当者ごとに約20名の学生が所属するので、①と②の2グループが存在し、合計約40名である。ここに毎年留学生の体験参加が2~5名ほど加わる。

本実習3年目の現在、授業回数は半期全14回であるが、初めの2回と終わりの2回に、①と②のグループが合同で実習を行った。残りの10回は①と②は別々になり、「茶」と「書」の実習を各5回ずつ行った。グループ①は「書」（青山）→「茶」（諸泉）と進み、グループ②は「茶」（諸泉）→「書」（青山）と進む。

全14回の実習内容は以下の通りである。「茶」と「書」の各実習は各担当ごとに後述するので、ここでは合同実習のみ内容を記す。

第1回目：授業形態や準備物などのガイダンスを行い、各担当が全員に教育資料のためのアンケートをとる。

第2回目：「茶」と「書」の実習を受けるにあたっての基礎知識を、担当ごとに概説する。（パワーポイント使用、各30分）

第3~12回目：グループ別に「茶」と「書」の実習

第13回目・第14回目：まとめの茶会を楽しむ。茶席の準備や後始末を含め、2グループが茶会の主・客を交替しながら「茶と書」の茶会を企画・体験する。

II. 「茶」の実習から

諸泉 聡子

1. 「茶」実習授業の目的

日本には、茶の湯文化、煎茶文化がある。茶道といえば、茶の湯というのが一般常識である。実際にオリエンテーションで実施したアンケートで、煎茶文化を知っていた学生はわずか数名であった。

煎茶とは、茶葉を淹茶方式で喫する茶で、文人茶とも呼ばれる。江戸後期に始まった。当時、日本の知識階級の人々は、中国の主として明時代の文人たちの文化に憧れた。特に、喫茶文化は日本でも、比較的实践可能な分野であったため、人々はこの新しい喫茶方法に惹かれた。中国の茶葉を手に入れ、中国の茶道具で喫するのは最高の贅沢であった。そうして仲間で中国の書画や音楽を愛でながら、楽しい時間を過ごすのは、当時でいえば文化の最先端を味わうことであった。『雨月物語』で有名な国学者上田秋成も、「あしかひのこと葉」に中国の茶と出会った感動を随筆に残しているし、煎茶書『清風瑣言』を上梓するまでに煎茶に傾倒した。

煎茶は茶の湯に比すれば、現在でも中国風のしつらえを残している。文人茶というくらいだから、中国文人の象徴である文房四宝を飾ることもある。現在でも、茶道具で最高に

品格があるとされるのは、古く中国から渡ってきたものである。このように、煎茶は、中国茶文化の影響が顕著でありながら、日本独特の茶文化へ発達している。

「茶」の授業では、煎茶の実習を通して、日中両国の茶文化に対する理解を深めるとともに、日本独特の茶文化の良さを理解・体得することを目的に進めた。

以下はシラバスに挙げた実習5回分のテーマと内容である。④は主に和菓子の季節感や見立てについて、⑤は日本の生け花の歴史文化に触れるなど、内容に少々の変更を加えた。



学生茶会のしつらえ

①＜喫茶のながれ＞

簡単な中国における茶文化の変遷をたどり、日本にどのような影響を与えたか考察する。実際に茶葉を観察し、茶を淹れ味や香りの違いを楽しみ日・中の喫茶文化について考える。

②＜文人趣味の喫茶 中国＞

中国の明時代には書画骨董を愛で、茶を喫し花を愛する人々がいた。文人と呼ばれるその人物達によって喫茶趣味は多彩な意味を帯び、独自の文化が育くまれた。その世界の住人になったつもりで香り高い中国茶を優雅に淹れ、喫する。

③＜文人趣味の喫茶 日本＞

日本、江戸後期。中国の文人趣味に憧れる人々は、中国明代の喫茶法「煎茶」に魅了された。日本において「煎茶」がどのように実践されたのかを探り自分で体験する。実際に煎茶を美味しく優雅に淹れ、喫して日本における煎茶の変容を探る。

④＜銘と謎語画題について＞

茶会では菓子は菓銘、茶は茶銘と本来の商品以外の名称がつけられる。これは日本独特のもの。そして床にいけられた花にはそれぞれの趣向で意味づけがなされる。松と薔薇ならば「不老長春」など。これは中国から伝わったもの。これらが渾然一体となったのが、日本の茶席である。菓子の選び方、銘のつけ方、いただき方を学び、床の花についての知識を養う。中国茶を優雅に淹れ喫し、茶会に向けて練習を行う。

⑤＜花のある風景＞

茶の世界では茶席には花が欠かせない。掛幅(軸)と花で茶席のテーマを表すことが多い。煎茶席の花は、江戸時代中国より伝来した『瓶史』という書籍の影響を受けている。花はその背景にある山の風景を感じたり心を遊ばせる装置といえる。自分で花をいけて、茶を喫する。茶会に向けて練習も行う。

2. 授業の形態

① 予備知識の習得

実習を始める前に、茶文化についての簡単な説明を15分～20分程度、レジュメを配布

した上で、スライドを交えて説明した。知識を得てから実習を行えば、より実習の意味について考察が深まると考えたからである。茶文化については、日中両国の茶文化の歴史を簡単に説明した。茶の説明のみならず、茶文化にまつわる、いけ花（茶花）・和菓子といったいわゆる「和」の文化の理解も深めてもらいたいと考え、全般的に説明をした。



茶道具一組

② 体験学習－実習

すべての学生が、煎茶を体験できるよう、2人一組で茶を淹れられるようにした。日本礼道小笠原流煎茶の方式に則り、亭主（茶を淹れる人）、客（茶をいただく人）を交代で体験し、学習する。

形式は立礼。教室備え付けの机と椅子を利用。茶は最初の2回が台湾の中国茶。3回は宇治田原産の日本茶（玉露）、菓子は、毎回和菓子店に依頼して持参した。

茶道具は、20名の場合、10組の煎茶道具を用意した。内容は、以下の通り。

急須10個、茶碗3個×10組、茶托3個×10組、瓶掛10個、瓶敷10枚、湯沸10個、点盆（角盆）10枚、茶布敷10枚、茶合10、茶入10個、湯冷10個、建水10個、茶巾10枚、盆金10枚、巾筒10個、菓子器10個、菓子箸10膳、菓子20個、黒文字（菓子切り）20本、布巾10枚。

③ 授業の進行

第1回目、3回目を例に授業の進行を紹介する。

第1回目、授業約2時間前から、道具の設置準備。授業開始後、中国における茶の歴史を、レジュメを配布した上で、スライドを交え、説明する。その後、湯を湯沸に注ぐなど、準備を学生の手で完成させてから、実際に茶を淹れる練習を開始。2人一組になってもらう。主/客は対面するように椅子を置く。まずは、亭主役の学生の挨拶から始める。主客ともに挨拶を交わすことから始める。姿勢・お辞儀の仕方や、「本日はお招きいただきまして有り難うございます」等、挨拶の言葉を必ず言ってもらう。挨拶の際の姿勢、お辞儀の仕方、アイコンタクト、挨拶の内容、お辞儀をするタイミングを説明し、全員で挨拶を終えて、着席。挨拶も点前も、全員同時進行で、同じ動作をしてもらう。

最初の第1回は、模範点前を生徒の前で行う。動作の順序や説明を口頭でしながら、模範点前の動作を追う学生の動きを確認する。

煎茶にも点前があり、定められた一連の動作で茶を淹れる。茶碗をあたため、茶葉を急須に入れ、お湯を注ぐという単純作業も、合理的に定められた点前にしたがつてすすめていけば、優雅な仕草となる。また単に見た目に美しいだけではなく、茶を美味しく淹れるための、法則が盛り込まれている。

第1回目は、中国茶を使用しての点前である。中国茶は熱湯で淹れて、香りをだす。蘭の花のように華やかな香りのする台湾産の茶を使用した。

ざこちなく、動作を追う学生を確認しながら、間違えやすい箇所については、個別に指

導を行う。

茶にはお菓子＝和菓子がつきものだが、それを懐紙に取るだけでも、作法がある。お菓子の取り方においては箸の扱い方を中心に、指導を行った。

煎茶は、一煎目と二煎目とのお菓子をいただく。

点前が終了すれば、終わりのご挨拶をして、後片付けにはいる。後片付けは、箱の紐の結び方、道具のしまい方、等を指導しながら、おこなった。

日本独特の「道具を桐箱に収める」という発想。収め方にもルールが存在する。紙に包み、布に包んで、収めるとき、器の方向にも気をつけなければならない。特に、箱の紐の結び方は、興味を持って多くの学生が習得してくれた。

第1回目ということもあり、学生は緊張した面持ちで、一生懸命にお茶を淹れる。実際に初回の感想には、「緊張した」という感想が目立ち、「お茶を淹れるのに、こんなにドキドキするとは思いませんでした」等、初めて触れる茶の作法に新鮮な気持ちを感じたことが分かる。余裕のある学生は、味にも言及し、「茶の香りがいい」「何番目に淹れたかによっても味の違いがありました」「きちんとした点前ですと気持ちも良いです」等、興味を持って、取り組んでくれたようである。

第3回目からは、日本茶の代表、玉露を使用しての点前である。点前の前に、日本における茶文化の簡略史をレジュメを配布し、スライドを交えて説明する。いつ、中国文人趣味の影響を受けた煎茶文化が日本へ入ってきたのか、誰に好まれたのか、日本茶が開発されたか等の説明をする。

玉露は湯冷ましにいれることにより、お湯の温度を低めにして、ゆっくりと旨みをだす。日本のお茶らしい美しい翠色、味、器との調和が見られる。中国茶との違いを感じて欲しいと思った。

1回目と同様、玉露点前は初めてなので、前で模範点前をする。道具は、湯沸をかける瓶掛けを、ポットウオーマーに変える。湯を適温に冷ます「湯冷まし」という道具が新たに登場する。

基本的な動きは、中国茶を淹れるときと何ら変わらないので、学生も余裕をもって、点前をしているようであった。点前の概要が徐々に理解されてくると、より美しく点前ができるよう、こまかく丁寧に挙措を指導する。学生の間を見回りながら、個々に指導を行っていく。そ



指導風景（箱に収める）



展覧席（第一回学生茶会より）

れだけではなく、お辞儀なども根本的に、姿勢から徹底的に指導をする。

学生の感想には、点前についての言及が減り、お茶やお菓子そのものについての言及が多く見られた。おそらく点前を大体把握したので、個々に味わうゆとりができたのであろう。こちらとしては、日本茶の良さを理解してもらいたかったが、多くの学生が中国茶の方を好んだのには驚いた。玉露がとても美味しかった、というのは少数派であった。とはいえ、その少数派の中には、玉露のおいしさを的確に表現している生徒もあり、とても嬉しく感じた。

3. 指導の留意点

指導において、①知識の習得②挙措の体得③道具の扱い この3点を毎回意識した。

知識の習得については、少しでも興味を持ってもらえるように、プリントだけではなくビジュアルから訴えたほうがよいのでは、とスライドを用意した。しかし、あれもこれもと内容を欲張りすぎて、焦点がはっきりしない授業があった事は反省すべき点である。

また、煎茶文化のみに拘泥せず、日本文化全般において中国文化の影響を受けていることが多いので、いわゆる「和」文化と認知されている文化も中国文化が源流であることを、理解することを目的として、内容を構成した。

挙措の体得については、背筋を伸ばして姿勢を正すことを、しつこいくらいに何度も指導を行った。姿勢がきれいであれば、点前が少々間違ったとしても、目立たない。点前は、ラジオ体操のように、その都度、動作を言葉で説明しながら行った。授業の回数を重ねるにつれて、言葉を待たずに点前をすすめる学生も多く見られた。

道具の扱いについては、1つ1つの道具を丁寧に扱うこと、道具の説明や由来、なぜこの様に扱うのかという理由も説明した。理由を説明すれば、学生は理解し、丁寧に扱うことができるようになった。道具を大切に扱うことと、道具（器）に対する興味を育むことを目的とした。



留学生も意欲的

4. 教育効果

この実習授業を通して、どのような教育効果が見られたかを、学生の感想を中心に、見ていきたい。

茶への興味・・・「私は、中国茶のほうが苦みが少なくて好き」「私は日本茶の方が渋みのほかに、旨み・甘みのバランスが良いなと思った。」「今日のお茶の2杯目がすごくおいしくて、“おいしいお茶”を飲むためには時間が必要なんだと思いました。」「初めて玉露を飲んでとても美味しいとおもいました。また自分で淹れたのでよけいに美味しいと思いました。」

和菓子への興味・・・「季節で和菓子の形などが変わっていて、日本人の季節を感じる

心は昔からすごかったんだと思います」

道具の扱い、箱の紐の結び方・・・「お茶もむずかしいけど、紐の結び方のほうが難しかった」

点前の意義・・・「一つ一つの動作に意志を通すことによって、とても優雅で綺麗な動作になることがわかった」

器への興味・・・「割らないようにするために大変緊張しましたが、柄が綺麗だなと思って見ていました」「こんなに

器に菓子が映えるとは。この取り合わせは、すごくカッコいい。こんな器、僕も欲しい。初めて、器というものに興味が出た。自分でも買おうと思う」

日本（茶）文化への理解・・・「何気なくのんでいるお茶や、お菓子にも歴史や物語があることが分かってよかった」「お茶はただのどをうるおすだけの飲料だけでしか考えてなかったが、この実習で、人とコミュニケーションをとる方法であり、日本文化の再認識でもあったと感じた」

茶を淹れて楽しむ意義・・・「いままで飲んだことがないような不思議なお茶でした。華やかな香りがして、すごく落ち着いた気持ちになりました。お茶を飲んでそんな気持ちになったのは初めてだったので驚きました。」「美味しい茶を淹れて、喜んでもらったらとても嬉しかった」

上記のように、学生たちは実習授業を通して多くのことを感じている。この新鮮な感想によって、指導する側ではあるが、教えてもらうことも多くあったと実感し、教育効果が十分に現れているように思う。

5. 茶と書である意義

① 教育効果発表の場―茶会

「茶」と「書」からみる比較文化方法論実習の最終の授業は、学生たちによる茶会である。授業最後の2回を、①グループは亭主側、②グループは客側というように分かれて、相手をもてなす。

初年度は、中国の文房四宝等（書青山担当）及び中国渡りものを中心とした煎茶具のしつらえを見てもらう展覧席、揮ごう席、煎茶席を開催した。

亭主側の男子学生はスーツ姿、女子も清々しい姿で臨んだ。

客側の生徒たちは展覧席を見学し、それぞれに盧全「茶歌」の一節を揮ごうし、その後、茶席に移り、茶をいただくという形になった。亭主側の学生たち



紐の結び方



亭主側の男子学生

は、客側の学生たちが着席してから、茶席に入り、茶を淹れる。客側に中山教授を始めとする先生方やいつもと違う学生たちが入るため、亭主側は非常に緊張したようだが、いつもと違う良い雰囲気、良い経験になったとの感想が多く見られた。一番嬉しく思った感想は、「相手をおもって、一生懸命お茶を淹れて、おいしい、と言ってもらえてとても嬉しかった」という茶の本質のひとつを実感してもらえたことである。

② 「茶」と「書」である意義—茶会を通して実感したこと

煎茶をするものとしては、初めて行うのに、これ以上の茶会は望めぬほど、充実した茶会となった。なぜならば、煎茶は前にも述べたように、中国文人趣味の喫茶文化に憧れて始まったものである。理想は、中国の書画を始めとし古物を愛でながら、興が乗れば漢詩を詠んだり、揮ごうしたり、その揮ごうした作品を眺めてお茶を楽しみ、交友をあたためる、という姿である。この場では客側の学生たちにより「茶歌」が揮ごうされ、その後に茶席に移り、茶をいただくという、今日では、ほぼ理想とも言える形になった。

その素晴らしい茶会を神戸学院大学で経験することができた担当者は幸せであり、学生にとっても貴重な経験となっているのではないだろうか。それは「茶」と「書」という二つの分野からのアプローチがあったからこそ、行うことができたのだと思う。

6. 「茶」の実習のまとめにかえて

「家でも緑茶を飲む機会がふえました」「自分の経験として役立てていきたいと思っています」「現代日本できちんとした茶器と用具を使って、きちんとした作法で淹れる、というのはある意味新鮮で趣深くておもしろいものだった。また、やってみたいなと思った」「この授業を受けたことで、ゆったりとした時間を味わうこと、お茶を味わうこと、また一つ一つの動作を意識し美しくすることを学べたと思います。」という学生の感想をみるだけでも、実習の効果は十分にあると感じている。

日本の茶に対する興味から、茶に関わる文化、そして源流の中国文化へとその興味が広がり、日本文化への再認識へとつながればと思っている。

結局は、能動的な「気づき」「発見」から物事への興味は加速すると思う。

この実習が、学生たちの日中茶文化に対する「気づき」「発見」の一助となれば、幸せに思う。

Ⅲ 「書」の実習から

青山由起子

1. 実習テーマを選択するにあたって

先述のごとく、本実習は、20人ずつの2グループに分かれて進められる。「茶」と「書」に分かれて受ける実習は、各々5回ずつにすぎない。

シラバスを策定する際に悩んだのは、たった5回だけの「書」の実習の中に、実習名の「比較文化方法論」という視点をどのように組み込むのかということであった。文化を比較す

るというだけなら、日本と中国の書の歴史や文化における異同を、実習によって体感させればよいであろう。ではその「方法論」はと問われれば、今も確たる答えを見出し得ない。

もとより、「書」の文化を比較するのに、何々方法という方法論があるわけではないし、また、何々方法論を学ばせることが、本実習の主目的でもない。そのように理解し、ともかくは「書」の領域において、日中の文化を比較することのできる視点のいくつかを示すことで、その責を負うことにしたのである。

実習第1回目の合同ガイダンスでは、「書」と「茶」それぞれにいくつかの項目でアンケートを行う。これを3年間繰り返したが、その結果は常に、シラバス作成時点においてすでに予想していた通りであった。書道を習っているごく一部の学生を除いて、ほとんどは自分の字を下手だと思っており、日中書道史についての基礎知識はなく、また、小学校や中学校以来習字をする機会もなかったけれどなにか懐かしく、日本文化として学び直したい、という状況であった。つまるところ、本実習に対する大半の学生の認識は、「比較文化方法論」への期待というよりは「書の実習」というイメージであり、アンケートには「字が上手になりたい」という希望や「字が下手でもいいですか?」という愛おしい質問も毎回見られた。

実習にあたっては、そのような学生が臆することなく、かつ新鮮な気持ちで実習に取り組めるように配慮しなければならない。その上で、「このような視点に立つとこのような面白い文化の異同が見える」という素材を提示し、「なるほどと体感」させること、さらに欲張るなら、字の上手下手にかかわらぬ「墨書の楽しさ」を知ってもらいたい、この3点を教材選択の基本方針に据えた。したがって、選択した5つのテーマは、書道史や書道練習上の手順などの規制から完全に放たれている。以下は、3年間シラバスに挙げた「書」の5回分のテーマと内容説明文である。

①<筆の持ち方あれこれ>

中国と日本では、筆の持ち方や練習法に違いがある。それらの古今のエピソードを学びながら、中国の筆の持ち方や練習法を体験し、日・中の相違がもたらす書への影響をさぐる。

②<漢字から「いろは」へ>

文字を持たなかった日本の書の歴史は、中国の漢字を受容することに始まる。やがて日本人は、そこから仮名文字を創り出していく。その形成の課程を、毛筆で書いてたどってみよう。漢字から仮名への異同を、造形と筆触でとらえたい。

③<連綿で書くマイ百人一首>

前回の発展として、日本独特の仮名美である「連綿(つづけ字)」と「散らし書き」を試みる。仮名の創出には、万葉集をはじめ和歌が深く関与しているが、ここでは「百人一首」を素材に作品を作る。

④<和様と唐様のサイン>

江戸時代には、「御家流」とよばれる「和様」の書体と、「唐様」とよばれる中国風の書体が存在した。自分のサインをこの2つの書体で書き分け、書体が発す



マイ百人一首（作品例）

る感性的な情報の違いに着目したい。

⑤＜茶席の書＞

茶席での「書」の役割は、決して小さくない。床飾りの一幅の墨跡で茶会のテーマを表すことができる。また、書画の鑑賞や揮ごうは、茶会に一層の文人趣味をかもし出す。茶会実習にむけて、鑑賞や揮ごうを体験しながら、「茶会の書」における日中文化の統合を考える。



唐様（左）と和様（右）（実習ノートより）

2. 「書」の実習例

毎回の実習に共通するのは、まずその時間のテーマを理解するための基礎知識を学び、その後実際に墨書するという流れである。テーマの理解のためには、実習ノートと呼ぶ解説プリントを用意した。時にはこのプリントに設けた作業欄に墨書させることもある。

以下に実習の例を概説するが、後の項で述べる2年目からの書道具の導入によって、実習の形態は順次熟成したと思われるので、ここでは3年目の実習の「書」①と②の2回の実習を中心に報告する。

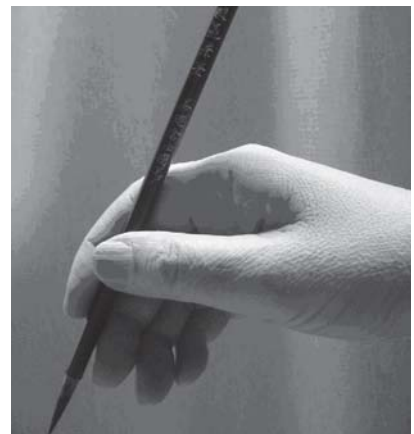
①＜筆の持ち方あれこれ＞

(イ) 実習の開始は、書道具の荷解きから始める。紙や布で包まれた人数分の硯、文鎮、水滴（これは2人に1個）と墨、下敷きを、学生自身に梱包を解いてもらって種類分けする。どんな道具が出てくるかわからない。包みを解く時の期待感は、書道具への興味を喚起し、観賞への入口となる。硯の大きさや重さ、石の色、模様、彫刻、また文鎮の動物の形などに小さな歓声があがる。そして各自が好みの硯・文鎮・水滴を選んで、初回に使用する書道具を机上に整える。

「茶」の初日の教室では、彼らは数々の道具が10組も並び、それが圧倒的な美しさで揃えられている光景に出会う。「書」の初日に各自に荷を解かせるのは、それとは対象的な道具との出会いを演出する意図をもつ。煎茶の道具に比して、書の道具は数が少なくてもすむので、このようなことが可能となる。ただし、後半に受け持つ「茶」→「書」のグループは包みを解く楽しみがないので、くじ引きなど何らかの道具選択の楽しみを設ける。

(ロ) 各自の机上に書道具が並べられると、机上の道具のいくつかを紹介し、人の道具も観賞させて、「文房四宝」の文化に言及する。

(ハ) その後、初めて各自持参の新品の小筆を書く姿勢で持たせ、まずはその筆を持つ自分の手の姿を、実習ノートにペンでデッサンさせる。続いて、日中の教科書などを参考に中国の伝統的な執筆法と日本のそれを比較し、日中間の異同を確認させる。また、自分の執筆法の種類を認



日本の執筆法例

識させ、筆を持つという簡単な行為にも、日中の歴史や文化が潜んでいることに気付かせる。

- (二) 実際に執筆法を変えて（中国の撥燈法と自分の持ちかた）自分の名前を楷書体で墨書し、その書きぶりの相違を実感させる。

手首を立てて筆軸を垂直にし、双鉤法（人差し指と中指の2本がけ）で持つ中国の執筆法は、単鉤法（人差し指1本がけ）で筆軸を寝かせるタイプの彼らにはかなり困難であったが、新しいことを試すという新鮮さを感じるようである。



中国の執筆法例

なお、墨書の前には、墨の磨り方と新しい小筆のおろし方（筆先の糊のほぐし方）を説明する必要がある。墨液の経験しかないものもいる。また小筆購入の説明の折に、そのまま持ってくることを指示しないと、穂の全部の糊をほぐして持ってくる必要があるので要注意である。

- (ホ) 最後に、道具の後始末の仕方を指導し、次回からは授業開始までに、各自好みの道具を机上に準備しておくよう指示する。

初回は指導内容が多いので時間が不足気味である。

② <漢字から「いろは」へ>

- (イ) 中国における漢字の創造から日本の漢字受容までの歴史は、第2回目の合同授業ですでに説明が済んでいる。ここでは、漢字の音（オン）を用いた日本語表記が、楷書・行書の万葉仮名から草書体の草仮名へ、さらに女手へと変化し、その字形を淘汰しながら字数を減少させ、やがて明治33年に48文字が選択され、それ以外の字は変体仮名として現存するに至った歴史を、実習ノートを用いて説明する。

- (ロ) 墨を磨って書く準備をする。変体仮名一覧表を見ながら、実習ノートの作業欄の表に「つき」「はる」などの単語を、現代平仮名の字母の漢字を用いた「万葉仮名（楷書・行書）」「草仮名（草書）」「平仮名（現在の平仮名）」の3種類で、また字母ではない漢字を用いた「変体仮名（草書）」で墨書させる。

- (ハ) 万葉仮名から平仮名へ、書くことを通して得た造形の違いや筆触についての感想を、実習ノートに墨書する。

- (ニ) テーマ外の練習として、行書体での署名の練習をする。担当者が各自の名前を行書体で墨書したカードを手本として渡す。

- (ホ) 道具を片づける。

- (ヘ) 次回に書く百人一首の絵札を各自1首選ぶ。

かぜ	うみ	はる	つき		3. 漢字（万葉仮名・草書）から平仮名への変遷
加世	宇美	波留	川幾	万葉仮名（男子）	現代平仮名の字母を使って書く
加さ	宇美	波留	つぎ	草仮名（草の手）	
かせ	うみ	はる	つき	平仮名（女手）	現代平仮名の字母ではない変体仮名で書く
う勢	ま見	をふ	はま	変体仮名	

漢字から仮名へ（実習ノートより）

〔ハ〕の実習ノートの感想から]

- ・万葉仮名と平仮名だけで見ると違うように見えるけど、草仮名が間に入るとどう変わっていったのか、よくわかるなと思いました。
- ・3種類の仮名を書いていくうちに、だんだん平仮名に近づいていくのを実感しました。
- ・見るだけでなく、実際書くことでより理解できたと思います。
- ・いつも書いている平仮名が、意外な漢字からできていておもしろかったです。
- ・昔は字の数が多くて覚えるのが大変だったろうと思いました。
- ・万葉仮名は、ただ漢字の当て字という感じだが、草仮名に変化して今の平仮名っぽくなるものや、まだ遠い感じのものもあり、非常におもしろく思った。変体仮名は難しかった。
- ・少しずつ造形が柔らかくなっているの、書いていてとても風流な気持ちになった。

漢字から平仮名へのテーマは、中国の文化を日本風に変容させていく過程を示すことのできる貴重な題材である。学生は（ロ）にある作業表を墨書で埋めることによって、中国の漢字が日本の平仮名になる変容の過程を、フィルムの早回しのごとく視覚的に捉え直すことができたようだ。

なお、最後の2回の合同実習は主客に分かれてのまとめの茶会である。「書」の実習としては、客側となる際に受付で挨拶し、それまで練習してきた行書体の署名を芳名録に墨書する。人前で筆を使って名前を書く緊張を味わうことになる。毎回誰かが「手が震えた」と言うので、「構わない。生きている証拠だ」と答える。また、本来なら席中であろうが、時間の配分上、茶席に入る前に席上揮ごうを行う。あらかじめ⑤の実習において、漢詩（「茶歌」 蘆全）の一節を色紙に墨書しておき、茶会当日は、展覧されている茶器を墨絵にし、雅印を押して作品を完成させる。煎茶席における文人の楽しみの体験である。中国風の趣のこの作品は、和様の百人一首の作品ともに茶会で展覧する。

3. 「古い書道具」の教育的効果について

5回の実習のテーマと題材は3年の間変えることはなかった。ただ大きく変化させたのは、「古い書道具」を導入したことである。その導入の経緯と、それによってもたらされた教育的効果についてここに記す。

1年目の実習では、「書」で使用する道具は筆ペン1本であった。たった5回の実習のために、もう手元には無いであろう小学生の習字道具を準備しなおさせるのはしのびなかったし、あえて準備させる教育的効果も感じられなかった。

筆ペンであれば、今後も利用可能である。ただ、なるべく本物の毛筆に近い毛先の回転や弾力を体感させるために、1本1本の毛が束になっているタイプを推薦した。学生に尋ねると、自分用の筆ペンを持っているのは、1人か2人である。筆ペンで書くこと自体が学生にとっては非日常的なのだから、書き味の工夫された今日の筆ペンなら、十分に筆の感覚を体感できるはずである。実際、ボールペンやマジックとの相違を自然に感じ取り、

筆で書くのは楽しいとの感想が聞かれた。

筆ペンは毛に安定した腰（弾力）がつけてあるので、少し慣れれば初心者でも筆先で細かい字を書ける。これを利用して、百人一首の札と同じ大きさの無地カードに、好きな一首を連綿で書き、絵も描いてマイ絵札の一枚を作らせることができた。

また、筆ペンは管理もしやすく、道具の準備にも片づけにも時間をとらない。筆ペンだけでも実習内容の消化は可能であった。書道具類の説明は①の実習でプリント写真によって示し、またまとめの茶会において展示物として観賞させた。本物の硯で毛筆を使用させたのは、芳名録などへの署名の練習と茶会本番の際に、こちらで書道用具を用意した時のみである。

しかし、2年目においては、各自に筆ペンと小筆を一本、毎回持参させた。そして担当者が所蔵する書道具を23組貸与することにした。導入の理由は、観賞に耐えうる書道具類が持つ教育的効果の可能性を確かめたかったからである。

書道具導入のきっかけは茶道具にある。「茶」では、「書」における筆ペンのように、道具を省いてペットボトルで済ませるわけにはいかない。「茶」を点てるいくつもの道具なくしては成り立たない。当然のこととしてその道具類を黙々と準備する共同担当者の姿に触発された形である。「茶」と「書」という二分野が共同する実習形態であったからこそ、その均衡をはかるべく書道具の導入に踏み切れたことを記しておきたい。

よく知られているように、「書」の文化には「文房四宝」という楽しみがある。硯・墨・筆・紙を四宝といい、それ以外にも文鎮や水滴や雅印など、机に乗る様々な文房具を愛玩する文化である。このことは実習の中で説明はしていたが、やはり実際にある程度観賞に耐えうる古い書道具に触れ、それを使用させるに勝るものはないのではないかと。

幸いにして、担当者は古物を含む様々な石質や形の硯を人数分準備することができた。硯の他に数種類の小さな文鎮と水滴を加え、これを授業期間、実習の教室に保管させてもらった。学生には実習毎に自分の好きな取り合わせで使用してもらったのである。

ただし、2年目の実習においても、基本的には1年目同様に筆ペンを使用し、百人一首の作品も前年と同様に筆ペンを使用させた。硯で墨を磨って書くのは、授業の終わりに自分の名前を行書で練習する時と、茶会で作品を揮ごうする時だけであった。

3年目の実習では、書道具の使用を主体とした。筆ペンは準備させず、毛筆の小筆だけを使用し、書く作業は感想の記述でも、硯で墨を磨らせ、毛筆で書かせた。学生は始業前にその日に使いたい硯、文鎮、水滴を選び、これは同一品の下敷きと墨を机上に準備するのである。そして授業の終わりには各自で筆と硯を清めて片づける。なるべくいろんな硯や文鎮を使いなさいと指示したので、毎日が書道具との一期一会であった。

百人一首の作品については、小筆では極細字が難しいので、無地カードではなく短冊を横向きにして用い、仮名の短い連綿と散らし書きを体験させた。

今回「書」を先に実習した学生20人に、5回目を終えるにあたり「古い硯や文鎮を使って実習をしたことを、どんなふう思ったか正直に教えてほしい」と無記名で感想を書いてもらった。たくさんの感想を書いてもらえるよう、筆記用具はシャーペンである。そのいくつかを以下に記す。

- ・ 昔の硯や文鎮を使わせてもらったが、当時の雰囲気を感じることができて、すごく良い環境で書道の授業を受けることができた。
- ・ 古くから使われている道具を使うことで、緊張感が生まれ、気持ちの切り替えができた。「形から入る」というのも大切であり、学ぶ雰囲気としても充分だった。シャーペンの使いやすさを痛感した。



茶会での揮毫

- ・ 中国で使われていたものと同じ道具を使うというのは初めての経験でとても新鮮でした。
- ・ 書道を習っているのですが、いつも使っている硯とは全然違っていて、とても新鮮な気持ちで筆を持つことができました。
- ・ 昔の道具を見るのは結構おもしろかった。
- ・ 道具は毎回選ぶ楽しさがあり、その道具の使いやすさ、デザインなど、よく確かめることができて、楽しかったです。墨を磨るということもしたことがなくて、磨って使うということに対して、濃すぎたり薄すぎたり、自分で調節することができてよかったと思います。
- ・ 中国の古来の硯や文鎮を使用して書いたので、小学校の時にセットの硯と墨を使って書くのとは違い、気持ちが引き締まるような感じがした。道具はみな趣があり、使用できる機会が全くないので貴重な体験だった。
- ・ 墨汁ではなくて墨を磨って書いたので、改めて何か新鮮な感じがした。また、小学校で使っていたような道具ではなく、中国の昔ながらの道具を使うことによって、より一層書道をやっているという気持ちになれて良かったと思います。筆で書くというのも、渴筆など筆ペンでは味わえない風情があって良かったし、楽しかったです。
- ・ 毎回違う道具を選び、様々な種類のものを使うのはとても楽しかったです。日常でなかなか触れることのないものに触れるというのは、ある種の感動を覚えました。

この他にも、すべての学生が中国の古い書道具を使った体験を肯定的にとらえる感想を述べている。字を書くというだけではない「書」の楽しさを、彼らは各自の思いで感じ取ってくれたようだ。道具は時に担当者を超える教育的効果をもたらす。それは確かに道具と人との関係である。これらの感想は、古い書道具に触れることによって古美術の魅力を感じ



茶会での展覧

取り、彼らが「文房四宝」の世界を垣間見た証である。

4. 「書」の実習のまとめにかえて

3年間の実習で、5回ごとの「書」のテーマを6回繰り返したことになる。担当者としては、繰り返すほどに欲が出て時間が足りなくなる。だが、どれだけ学生の希望に添えただろうか。

初回のアンケートで何人かが書いた「字が上手になりたい」の希望を5回の実習で叶えることはできなかった。だが、これからの人生の様々な機会に、筆があれば臆せず筆で行書の署名をしてもらいたい。今はまだ手本を見ながらのぎこちないサインも、「人書俱に老ゆ」の言葉を信ずるならば、やがて様になっていくだろうと期待する。

学生の願いを叶えたこともある。1年目の学生アンケートに「着物で授業をしてほしい」とあったのを受け、担当者2人は茶会に着物で指導し、3年間これを続けた。

茶会は両実習のまとめであるが、これをハレの場として設定し、少しばかりおしゃれをして全員がその演出に加わった。外部から数人のお客様も参加していただいた。学生は、心持ち緊張する。その非日常の緊張の中で、署名し、揮ごうし、床の書を拝見する。自分の作品がハレの場の展覧に並ぶ。茶会は、「書」の実習のまとめとしても、有意義な設定であったと思う。

5回のテーマ選定時に悩んだ「比較文化方法論」にどれだけ迫れたかは、反省の他ない。速足の説明では理解が困難だったことだろう。だが、次のような学生の感想になぐさめられる思いだ。学生は書く。「書道の面白さというのは、理屈で感じるものではなく、何となく体で感じとるものだ」と今回の授業を通して思った。一文字いちもじ書いていくにつれ、まわりの音が聞こえなくなり、気付いたら数分たっているという体験をした。この高揚感というのは、理性では感じられるものではないと感じた次第です」

「比較文化方法論」とは、究極のところ、その後に続く語「実習」にこそ重要な起点があるということなのだろう。



左から青山、諸泉、中山

(文中の写真の撮影および編集は人文学部4年生
山口芳恵さんによる)

結び

中山 文

なんと贅沢な時間なんだろう。

初めてお茶会に出席した筆者は、その高雅な雰囲気息を飲んだ。いつもの教室の変貌ぶりに驚き、神妙な面持ちでお茶を淹れ、筆を持つ学生の凛々しさに目を細め、先生方のあでやかな和服姿に見惚れた。

特に、教室に運び込まれたお茶の道具の多さには圧倒された。すべて諸泉家の私物である。先生は毎週4時45分からの授業に午後早くから準備を始め、授業後も8時過ぎまで1人で片付けられるという。青山先生が持ち込まれる古い「文房四宝」の数々は、学生たちに「文雅」という言葉の意味を、形をもって教えてくれた。

書道も茶道も知らない不作法者は、文化の豊かさとは物質の豊さに裏付けられるものだという事に気づけなかった。それなのに厚かましくも、「うちの学生に、本物の書とお茶文化の喜びを教えてください」とお願いしたのである。この多彩なお道具こそが、茶文化・書文化の豊さを証明していたのだということを、本報告は再確認させてくれた。

無知な筆者のおかげで、学生たちはずいぶん得をした。この授業の受講生はほかのどんなカルチャースクールでも触れることのできない本物の品々を眼にし、手に触れ、味わった。彼らにとってどれほど貴重な経験であったことか。この贅沢な授業は大学生活の思い出としてずっと記憶に残るだろう。これからの人生を心豊かに生きていく、ひとつのきっかけとなったに違いない。

お2人の3年間のご教授に、心よりお礼を申し上げます。

2009 年度中国語初級教育における実践報告

中山 文^{*}，山本 透江^{**}，李 玲^{**}

(2010 年 1 月 12 日受理)

はじめに

中山 文

2008 年度は 2006 年から始まった共通教育機構による共通教育科目が立ち上がって 3 年目にあたり、完成年度の年である。外国語分野で立てた全ての講義科目が立ち上がった。中国語に関しては、以下のクラスである。

初級用（第 1、2 セメスター）として、初級中国語 Iab・IIab、入門会話 I・II

中級用（第 3、4 セメスター）として、中級中国語 Iab・IIab、基礎会話 I・II

上級用（第 5、6 セメスター）として、実用中国語 I・II、中国語リーディング I・II、中国語会話 I・II

I は前期、II は後期科目を指す。初級中国語と中級中国語はそれぞれ 1 週間に a と b、2 コマの授業をペアで申し込む。ただ、成績は a と b が別々に提出される。それ以外の授業は週に 1 コマである。3 年前に希望を持って立ち上げたクラスの運営は、はたしてうまく機能しているのか。今年はその検証が必要な年だといえるだろう。

また今年 は 専門科目の持ちコマの関係上、唯一の専任教員である筆者が中国語を 1 コマも担当できない初めての年だった。上記の授業に旧カリキュラムや再履修クラスを含めると、現在中国語関係は全部で 130 コマの講義が設定されている。この 130 コマ全てが 30 名の非常勤講師に委ねられた。そしてこの状況は、来年度も変化する見通しが無い。

人文学部が L 字型教育を受け持っていた教養総合コース以来、中国語では全学統一テキスト、統一試験、統一成績基準を守ってきた。担当教員による不公平が生じないように配慮しつつ、中国語教育の一定レベルを維持するには、このシステムが必要だと考えたからである。専任教員としての仕事は、現場の不満や不具合をすばやく解消し、非常勤講師に気持ちよく授業をしてもらうことだと認識している。そのために、中国語教育の現場から離れることに、筆者自身が大きな不安を感じていた。

2008 年秋に今年度の初級、中級クラスのまとめ役を決定した。それぞれの担当者には、こちらの状況を正直に話し、他の先生方と筆者とのパイプ役になっていただくようお願いした。何の報酬もなく、責任の重いこの役割を、皆さん快く引き受けて下さり、とてもありがたかった。

* 神戸学院大学人文学部教授

** 神戸学院大学人文学部非常勤講師

ここに担当者による、各担当科目の実践報告を残したい。

I . 「初級中国語『みんなの中国語 第一步』浸透度 － 2009 年度前期末試験結果分析－

山本 透江

1. はじめに

2007 年度前期に始まり、本学での『みんなの中国語 第一步』の使用は 3 年目となる。本稿では、過去 2 年間のデータに基づき、今年度前期試験の成績や解答状況との比較を中心に分析する。

この 3 年間のデータを以下に挙げておく：

2009 年度	受験人数 1101	満点 60	最高点 59	最低点 16	平均 42.4	標準偏差 6.18	分散 38.2
2008 年度	受験人数 1215	満点 60	最高点 60	最低点 14	平均 45.3	標準偏差 7.66	分散 58.6
2007 年度	受験人数 1366	満点 60	最高点 58	最低点 17	平均 41.3	標準偏差 7.59	分散 58.6

2009 年度の平均点は 42.4 点、9 割以上の得点者は 16 人 (0.01%)、8 割以上では 207 人 (18.8%) と前年度 (9 割以上：9.79%；8 割以上：37.5%) 結果を大きく割りこんだ。また標準偏差は 2008 年比 1.48 ポイント低下、つまり解答率の偏りが各所に見られた。平均点はさほど変化していない。

2. 試験結果分析

2007 年度以来、点数が固定 (60 点満点) されており、出題形式の異同による調整が試みられている。今回は 2007 年度 9 種 50 問→2008 年度 7 種 40 問→2009 年度 8 種 45 問とした。以下は 2009 年度の出題形式と、その正答率である。

2009 年度	正答率
I .[01]-[05] (各 1 点× 5 問) 簡体字正誤問題	67.0%
II .[06]-[10] (各 1 点× 5 問) 中国語文の日本語訳	72.8%
III .[11]-[15] (各 2 点× 5 問) 日本語文の中国語訳	61.2%
IV .[16]-[25] (各 2 点× 10 問) 中国語文の語順整序	80.1%
V .[26]-[30] (各 1 点× 5 問) 中国語文の空欄補充	77.1%
VI .[31]-[35] (各 1 点× 5 問) 語句の中国語訳	69.1%
VII .[36]-[40] (各 1 点× 5 問) 一音節語の聞き取り (ヒアリング)	48.1%
VIII .[41]-[45] (各 1 点× 5 問) 中国語による質疑応答 (ヒアリング)	39.8%

2009 年度と 2008 年度 同一（類似）問題種との比較

	2009 年度	2008 年度	2009 年度対比
簡体字正誤問題	67.0%	81.2%	82.5%
中国語文の日本語訳	72.8%	57.1%	127.5%
中国語文の語順整序	88.1%	79.1%	101.3%
中国語文の空欄補充	77.1%	79.8%	96.6%

①簡体字正誤問題

正答率は 2007 年度 38.2%→2008 年度 81.2%→2009 年度 67.0%。当項目での誤答第 2 位が平均 29.3%（最高は [04] 請、42.5%）と、簡体字認識の曖昧さが目立つ。今回も「しょくへん」「かねへん」「ごんべん」「しんによう」「さんずい」および間違えやすい部首を問うた。また昨年度と同出問 [01] 経については、2008 年度 65.6%→2009 年度 71.8%と、一応の成果が見られる。巻末の「なぞり書き」や、練習問題等の提出物を担当者が細かくチェックする必要がある。

②中国語文の日本語訳

正答率は 72.8%。この教科書はすべての例文に日本語訳がつけてある。全年度対比 15.7 ポイントの上昇ではあるが、理解度を過信できない数字となった。文末でも挙げてあるが：

[07] 我們一起去喝茶 ba。

正解は「一緒にお茶しませんか。」なのだが、「わたしたちと一緒ににお茶しませんか」を 91.1%が選択してしまっている。

③日本語文の中国語訳

全体の正答率は 61.2%。2. 同様、日本語訳に頼るあまり、個別の単語・語句解釈がおろそかになっているように見える。また語順の把握も非常に曖昧である：

[11] 「彼はある会社に勤めています。」

正解は「他在一個公司工作。」(37.0%) なのだが、「他在工作一個公司。」(39.3%) が上回っている。また：

[14] 「あなたと彼とでは、どちらが年上ですか。」

正解は「Ni 和他、誰大？」(24.0%) だが、「Ni gen 他、多大？」(48.1%) と判断ミスが大きい。

④中国語文の語順整序

正答率は 88.1%。配点が高いこともあり、全体の平均点を押し上げたものと予想される。各設問別正答率も 71.0～98.9%と高かった。昨年度と違い、日本語訳に沿う形での並べ替えであったことも一因であろう。

⑤中国語文の空欄補充

正答率は 77.1%。助動詞、前置詞、疑問詞、副詞、動詞の正確な意味と前後関係を理解していれば、日本語訳に沿い正解を選べていた。

⑥語句の中国語訳

正答率は 69.1%。親族呼称、二種類ある「2」の扱い、「～する」の間違い易さを再認識した。また：

[34] 自動車

正解は「汽車」(33.8%) だが、「自転車」(56.9%) が上回った。

⑦一音節語の聞き取り（ヒアリング）

2008 年度に外された設問を敢えて採用した。選択肢のつづりはすべて、存在するもののみ挙げたので、大きな迷いはなかったように見える。ただ、正答率が [36] he（第一声）31.9%→[37] jian（第四声）56.8%→[38] si（第四声）36.8%→[39] ting（第一声）45.9%→[40] xue（第二声）69.2%とぶれながらも上昇したのは、聞き取りの際選択肢番号（一～四）の読み上げと選択肢とを混同し、混乱を招いたとあとで受講者から聞いていることから、それぞれの音節の難易度は反映していないようである。

⑧中国語による質問への返答

第一～三課発音篇「しゃべっちゃイナ」からの出題。過去二年にはない試みで、正答率も 39.8%と下回った。各課の「step 2」対話文と聞き取りでは「応答」を重視しているが、生かされていない感がある。適切な返答を選ばせる能力を問う場面をもっと設けるべきかと思う。

3. おわりに

当機構での運用開始から 3 年目を迎え、これまでの成果が中国語教育にも具体的に出始めている。「中級」相当の受講者は格段にピンインを読みこなせているし、3 年次受講者の中国への関心はより高まっている。多くの問題点を把握した上で『第一步』『第二步』をより有用に使い、続けて学習していくための基礎体力作りと動機づけを促せるよう、各担当者の工夫を期待している。

資料 1

I. [1]～[5]の日本語の漢字を、中国語の簡体字にあらためるとき、最も適切なのは①～④のうちどれか、選択せよ。 [1×5=5点]

[1] 経 ① 经 ② 經 ③ 经 ④ 經

[2] 包 ① 乞 ② 包 ③ 乞 ④ 仓

[3] 館 ① 馆 ② 館 ③ 馆 ④ 馆

[4] 請 ① 请 ② 請 ③ 请 ④ 清

[5] 還 ① 还 ② 还 ③ 还 ④ 还

II. [6]～[10]の中国語の文の、最も適した日本語訳を選択せよ。 [1×5=5点]

[6] 我家离学校很近。

- ① あなたの家は学校から遠い。
- ② 学校はあなたの家に近い。
- ③ わたしの家は学校から近い。
- ④ わたしの家は学校から遠い。

[7] 我们一起去喝茶吧。

- ① わたしたちと一緒に喝茶しませんか。
- ② 一緒にお茶しませんか。
- ③ 一緒にお茶できませんね。
- ④ わたしたちと一緒にご飯を食べませんか。

[8] 他们都是中国老师。

- ① かれらは皆中国人教師です。
- ② かれらは皆中国語の教師です。
- ③ ほかは全部、中国人です。
- ④ ほかは全部、中国語の教師です。

[9] 他的电脑跟你的不一样。

- ① あなたのテレビはあなたのとは違う。
- ② ほかのコンピューターはあなたのとは違う。
- ③ あなたのケータイはあなたのとは違う。
- ④ かれのコンピューターはあなたのとは違う。

[10] 我下星期四去北京。

- ① わたしは来週の水曜日、ペキンに行く。
- ② わたしは来週の木曜日、ペキンへ行く。
- ③ わたしは今週金曜日、ペキンへ行く。
- ④ わたしは先週木曜日、ペキンに行った。

III. [11]～[15]の文をを中国語に訳したとき、最も適切なのはどれかを選択せよ。 [2×5=10点]

[11] 彼はある会社に勤めています。

- ① 他是工作一个公司。
- ② 他在工作一个公司。
- ③ 他在一个公司工作。
- ④ 他有一个公司工作。

[12] わたしは2日間行きます。

- ① 我来二天。
- ② 我去两天。
- ③ 私去两天。
- ④ 私去二天。

[13] ここの春は快適です。

- ① 这儿的春天很舒服。
- ② 那儿的春天舒服。
- ③ 这是春天很舒服。
- ④ 那个春天很舒服。

[14] あなたと彼とでは、どちらが年上ですか。

- ① 你的他，多大？
- ② 你和他，哪大？
- ③ 你跟他，多大？
- ④ 你和他，谁大？

[15] わたしは中国に留学に行きたくはありません。

- ① 我不可以去中国留学。
- ② 我不想去中国留学。
- ③ 我要去中国不留学。
- ④ 我不要去中国留学。

IV. [16]～[25]を、日本語の意味にそって並べかえたとき、[*]の位置に来る語句を選択せよ。

[16] ここで泳いでもかまいませんか。 [2×10=20点]

[] [*] [] [] ?

- ① 游泳 ② 可以 ③ 吗 ④ 这儿

[17] わたしは中国の音楽を聴きます。

[*] [] [] []

- ① 我 ② 听 ③ 中国 ④ 音乐

[18] わたしの辞書はあなたのと違う。

我的词典 [] [] [] [*]。

- ① 不 ② 跟 ③ 你的 ④ 一样

[19] わたしは毎日3、4時間テレビをみる。

我 [] [*] [] []。

- ① 电视 ② 看 ③ 三 四个小时 ④ 每天

[20] わたしの父は毎日、仕事が忙しい。

資料 2

我爸爸每天 [*] [] [] [] []。

- ①都 ②很 ③工作 ④忙

[21]かのじょは地下鉄で帰宅する。

她 [*] [] [] [] []。

- ①坐 ②家 ③地铁 ④回

[22]わたしは中国語が少し話せる。

我 [] [] [] [] [*] []。

- ①说 ②汉语 ③会 ④一点儿

[23]かれはよく母親に手紙を書く。

他 [*] [] [] [] [] 信。

- ①写 ②给 ③常 ④妈妈

[24]この字はどう読むのですか。

[] [] [*] [] [] ?

- ①念 ②字 ③怎么 ④这个

[25]かれはウーロン茶が好きだ。

[] [*] [] [] [] []。

- ①喜欢 ②乌龙茶 ③他 ④喝

V. [26]～[30]について、適切な意味になるよう語句を選択せよ。[1×5=5点]

[26]鈴木さんは中国の歴史を勉強したい。

鈴木[]学习中国历史。

- ①也 ②都 ③会 ④要

[27]わたしは昨日手紙を一通書いた。

我昨天写[]一封信。

- ①你 ②个 ③也 ④了

[28]大阪から東京まで2時間かかる。

从大阪[]东京要两个小时。

- ①到 ②离 ③和 ④跟

[29]中国語は英語ほどは難しくない。

汉语没有英语[]难。

- ①怎么 ②比 ③那么 ④什么

[30]あなたの鉛筆は机の上にある。

你的铅笔[]桌子上。

- ①在 ②是 ③的 ④有

VI. [31]～[35]の語句を中国語に訳したとき、最も適切なのはどれか、選択せよ。[1×5=5点]

[31]冬休み

- ①寒假 ②休息
③冬天 ④暑假

[32]わたしの兄

- ①我老爷 ②他爷爷

③你爸爸

④我哥哥

[33]2時間半

- ①两个半小时 ②二个半小时
③二个时间半 ④两个时间半

[34]自動車

- ①火车 ②汽车
③自行车 ④摩托车

[35]アルバイトをする

- ①为什么 ②做什么
③工作 ④打工

(※以下 [36] ～ [45] はリスニングで、2回ずつ放送されます。)

VII. [36]～[40]について、それぞれ4つの発音を聞き、その中から印刷されているピンイン表記に一致するものを1つ選択せよ。[1×5=5点]

[36] hē ① ② ③ ④

[37] jiàn ① ② ③ ④

[38] sì ① ② ③ ④

[39] tīng ① ② ③ ④

[40] xué ① ② ③ ④

VIII. [41]～[45]の質問に対して、最もふさわしい返答を、以下の選択肢より1つ選択せよ。[1×5=5点]

[41]①是的。 ②我要两个。

- ③没有。 ④我是买。

[42]①他吃面包。 ②是吗？

- ③他是我爸爸。 ④他不是。

[43]①我不喜欢。 ②四块五。

- ③太贵了。 ④谢谢。

[44]①我是学生。 ②你。

- ③好。 ④他姓王。

[45]①加油。 ②不行。

- ③再见。 ④不知道。

補足：

・ 正答率順位

[17] 98.9% (語順整序) 「わたしは中国の音楽を聴きます。」

[16] 97.8% (語順整序) 「ここで泳いでもかまいませんか。」

[12] 97.5% (中国語文訳) 「わたしは二日間行きます。」 → 「我去兩天。」

[18] 97.3% (語順整序) 「わたしの辞書はあなたのとは違う。」

[06] 97.2% (日本語文訳) 「我家離学校 hen 近。」 → 「わたしの家は学校から近い。」

・ 正答率が著しく低かった設問を以下に挙げておく。

	正答率	誤答率 (第二位)
[07]	② 7.6%	① 91.1%
[11]	③ 37.0%	② 39.3%
[14]	④ 24.0%	③ 48.1%
[30]	① 34.2%	④ 64.4%
[34]	② 33.8%	③ 56.9%
[36]	④ 31.9%	② 35.3%
[43]	② 14.5%	① 39.1%
[45]	④ 20.9%	② 36.9%

Ⅱ . 「2009 年度『中国語入門会話』クラスの現状と課題」

李 玲

1. はじめに

2009 年度「中国語入門会話」クラスは、8 の受講クラスからなり、履修登録者数は 190 名で、担当教員は 5 名である。

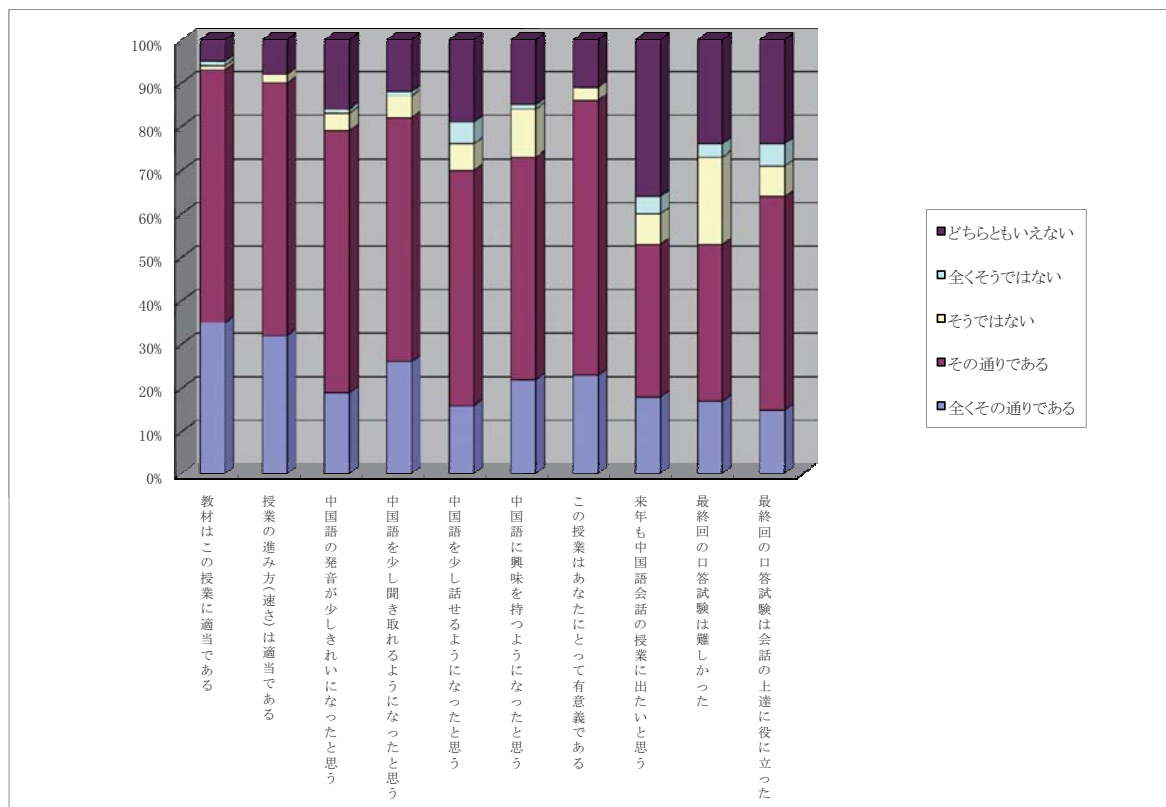
2009 年度「中国語入門会話」クラスの現状を明らかにするために、前年度と同様に担当教員と受講者を対象にそれぞれアンケートを実施した。履修登録者の 190 名の内、今回アンケートに答えた受講者は 113 名であった。担当教員 5 名全員もアンケートに答えた。文末に付記された図表は受講者を対象とするアンケートの結果である。以下は受講者を対象とするアンケートの結果と担当教員を対象とするアンケートの結果を合わせて分析することによって、2009 年度「中国語入門会話」クラスの運営実態を振り返り、そして、本科目の 2010 年度の運営を展望したいと思う。

2. 結果と分析

設問 1、2 は使用教材と授業進度の適当度についてのものである (文末図表を参照されたい)。両設問に対する受講者の回答からみれば、どちらについても評価がかなり高いということが分かる。「現在使用している教材は『中国語入門会話』クラスに適當であるか」との設問に対して、「適當である」と答えた担当教員は 3 名であり、「どちらともいえない」

と答えた担当教員 2 名で、内 1 名は「来年度ほかの教材を使用してみては」と提案した。また、「授業の進度は適当であるか」との設問に対して、「適当」と答えた担当教員は 3 名であり、「もう少し速くしてもよい」と答えた教員は 1 名で、回答しなかった教員は 1 名であった。受講者と担当教員の回答を総じて見れば、使用教材も授業の進度もいずれの面

設問 \ 評価	全くその通りである	その通りである	そうではない	全くそうではない	どちらともいえない
1. 教材はこの授業に適当である	35%	58%	1%	1%	5%
2. 授業の進み方（速さ）は適当である	32%	58%	2%	0%	8%
3. この授業に出ることによって、中国語の発音が少しきれいになったと思う。	19%	60%	4%	1%	16%
4. この授業に出ることによって、中国語を少し聞き取れるようになったと思う。	26%	56%	5%	1%	12%
5. この授業に出ることによって、中国語を少し話せるようになったと思う。	16%	54%	6%	5%	19%
6. この授業に出ることによって、中国語に興味を持つようになったと思う。	22%	51%	11%	1%	15%
7. この授業はあなたにとって有意義である。	23%	63%	3%	0%	11%
8. 来年も中国語会話の授業に出たいと思う。	18%	35%	7%	4%	36%
9. 最終回の口答試験は難しかった。	17%	36%	20%	3%	24%
10. 最終回の口答試験は会話の上達に少々役に立った。	15%	49%	7%	5%	24%



2009 年 11 月実施（回答者：113 名）

（アンケート実施の際、「中国語入門会話」クラス担当教員の張建明先生、馬麗娟先生、陳鳳先生と張軼欧先生からの御協力を頂き、ここで深く感謝いたします。）

においても現行のもので評価が高いため、2010 年度「中国語入門会話」クラスは現在の教材を使用し、また 2009 年度と同じ進度で授業を進めることが妥当ではないかと思う。

設問 3、4、5 は「中国語入門会話」を受講することによって受講者のリスニング力と会話力が確実に高まるようになったかどうかという授業の直接効果が問われる設問である。統計から見れば、3 つの面においていずれも評価されていることが分かる。設問 3 の「この授業に出ることによって、中国語の発音が少しきれいになったと思う」と設問 4 の「この授業に出ることによって、中国語を少し聞き取れるようになったと思う」に対して、「全くその通りである」、「その通りである」と回答した受講者の合計数が全回答者に占める比率は 80% 前後である。この数値は、昨年度に実施した同内容の設問に対する受講者の回答と全く同じ水準である。この数値は、「1 年次の『中国語入門会話』の授業を 2 年次の『中国語基礎会話』と 3 年次の『中国語会話』の入門段階として、中国語の正しい発音の習得と一定のリスニング力の向上」という 2009 年度当初設定していた授業目標がほぼ達成されていることを示唆している。

設問 5 の「この授業に出ることによって、中国語を少し話せるようになったと思う」に対して、「全くその通りである」、「その通りである」と回答した受講者の合計数が全回答者に占める比率は 70% であり、設問 3 と設問 4 のそれよりやや低い水準にある。しかし、「中国語入門会話」クラスは、受講者が正しい発音をしっかりと習得できるようにするために、前期の約半分の時間を中国語の「ピンイン」の学習に費やし、前期の後半に入ってからようやく簡単な会話を学習する段階に入る。その意味では、70% という数値は決して低いとはいえない。また昨年度、同設問に肯定的に解答した受講者の合計数が全回答者に占める比率は 63% であったため、今年度は前年度より 7% 高くなったことから、2009 年度「中国語入門会話」クラスの授業は受講者の会話能力の向上の面で一定の効果があるといえよう。

重要なことは、1 年次の「中国語入門会話」と 2 年次の「中国語基礎会話」、3 年次の「中国語会話」を 1 つの学習過程とし、そのプロセスで受講者が中国語の会話力を漸次向上させることである。したがって、1 年次の「中国語入門会話」の授業においては、受講者が正しく発音でき、しかもそのリスニング力を一定のレベルまで引き上げることが最も重要である。それは受講者の会話力向上の土台作りなのである。

設問 6 と設問 7 は、「中国入門会話」クラスの授業を受講することによって、中国語そのものに興味を持つようになったかどうか、またこの授業が受講者にとって総合的に有意義であるかどうかという授業の潜在効果が問われる設問である。

設問 6 の「この授業に出ることによって中国語に興味を持つようになったか」と設問 7 の「この授業はあなたにとって有意義であるか」に対して、「全くその通りである」と「その通りである」と答えた回答者の合計数が全回答者に占める比率はそれぞれ 73%、86% である。両数値は 2008 年度のそれと同水準である。

設問 3、4、5、6、7 に対する受講者の回答から、「中国語入門会話」クラスの受講者は、この授業の直接効果と潜在効果のどちらも評価していることを読み取ることができる。

設問 8 の「来年度も中国語会話の授業に出たいと思うか」は、受講者自身がどれほど 1

年次の「中国語入門会話」と2年次の「中国語基礎会話」、3年次の「中国語会話」との連続性を意識しているかについての設問である。継続しようと考えている受講者が半数以上であり、36%の学生は「どちらともいえない」と回答した。この水準は2008年度のものと同じである。

継続しないとする受講者が挙げた理由の多くは「単位が足りているから」や、「授業の時間帯がよくないから」、「1単位だから」などである。ここから、半数以上の受講者は「中国語入門会話」と2年次の「中国語基礎会話」、3年次の「中国語会話」との連続性を意識しているか、若しくは「中国語入門会話」の直接効果・潜在効果を評価することから学習の継続を希望しているが、単位取得のため「中国語入門会話」の授業を選択した受講者も少なくないということが分かる。

「中国語入門会話」の授業に出ることによって少しでも話せるようになってほしいと考え、受講者に刺激を与えるために2009年度から試験の方法を変更した。前期と後期の最終回の授業日に教材で習得した内容を中心に口答試験を実施したのである。設問9と設問10はその実施実態と効果についての受講者と担当教員の回答である。

担当教員5人の内4人は教員がテキストの内容を中国語で質問し、学生に自分の実際の状況に従って答えてもらうという会話形式をとった。1人はテキストの内容を学生に暗唱させるという形式で口答試験を実施した。

前者の場合、教員はあらかじめ出題し、出題範囲の中から5問～10問を選んで学生と会話形式で口答試験を実施した。4人の教員の出題数はそれぞれ10問、15問、25問、25問～40問であった。口答試験の効果については、会話形式で実施した4人の教員は、「ほとんどの学生ができた」、「とてもいい刺激になった」、「今後も実施する予定」、「学生の会話力の向上に役に立った」や、「今後も是非継続してほしい」などとコメントした。

テキストの内容を学生に暗唱させるという形式で口答試験を実施した教員の場合、「会話形式ではなかったので、学生にあまり刺激になったとはいえない」とコメントした。一方、受講者側の反応を見ると、設問9の「最終回の口答試験は難しかった」について、「全くその通りである」と「その通りである」と答えた受講者の合計数が回答者に占める比率は53%であるのに対して、設問10の「最終回の口答試験は会話の上達に少々役に立った」について、「全くその通りである」と「その通りである」と答えた受講者の合計数が回答者に占める比率は64%である。つまり、約3分の2の受講者は口答試験の効果を評価していることである。

上記の担当教員と受講者のコメントを総合すると、2010年度も2009年度と同様に前期、後期それぞれの最終授業日に口答試験を実施することが望ましいのではないかと思う。ただし、試験は会話形式で、各クラスの出題範囲を統一するよう提案する。

3. まとめに代えて

以上のような「中国語入門会話」クラスの現状を踏まえて、2010年度の課題として下記のことを提案する。

1. 教材は2010年度と同様のものを使用する。

2. 授業の進度も2010年度と同様に設定する（前期は第4課までとする、後期は2週1課のペースで進む）。
3. 口答試験は前期、後期の最終回の授業日に会話形式で実施する。各クラスの出題範囲を統一するよう提案する。
4. 今回の受講者に対するアンケート調査から、長期欠席者（履修登録しているにもかかわらず、一度も授業に出席したことがない学生）が少なくないことが分かった。また、一部の学生は単位取得のために「中国語入門会話」の授業を選択したという事実はすでに述べている。これらの状況をある程度改善するために、新入生を対象とする中国語のオリエンテーションの際、神戸学院大学の中国語会話というカリキュラムの中における「中国語入門会話」の位置づけを強調し、そして、履修登録した以上なるべく出席するようと呼びかける必要があると思う。
5. 昨年度の報告にも書いたように、中国語の授業の長期的な課題の一つとしては、「授業を通して、いかにして受講者に中国語や中国に興味を持たせ、『中国語会話に興味を持つ→中国語に興味を持つ→中国に興味を持つ→中国語会話に興味を持つ……』という良好な循環を作ることができるのか」が挙げられる。2010年度の「中国語入門会話」クラスの担当教員に教材内容の学習の他、前期と後期1回ずつ各自で中国を紹介するための自由時間を与える。それは、一方では、受講者に中国に興味を持ってもらうためであり、他方では、各担当教員の個性が自由に発揮できる場を提供するためでもある。

おわりに

現在初級中国語は47クラス設定されている。各クラスではペアの先生方が毎回進度を報告しながら1冊のテキストをリレー方式で教える。山本先生にはその全クラスの問題点が集約され、質問されるわけで、本来ならば当然専任が果たすべき役割を引き受けていただいている。

入門会話も統一テキストで8クラス設定されている。どこのクラスに入ってもできるだけ不公平が生じないよう、成績基準の統一がされている。また先生方が意識を高く持ち、いろいろな試みを行っておられるのが、頼もしい。李玲先生が毎年きちんとアンケートをとり、翌年の授業に生かしているのも、この授業の人気の秘訣であろう。

責任感を持ってまとめ役を遂行する担当者に恵まれてこそ、複数クラスの運営がスムーズに行われることを再確認したことも、この報告の成果といえよう。

2009 年度中国語中級教育における実践報告

中山 文^{*}，池田磨左文^{**}，傍島 史奈^{**}

于 耀明^{**}，馬 麗娟^{**}

(2010 年 1 月 12 日受理)

はじめに

全学で約 1000 名いた初級中国語の履修生のうち、次年度中級を履修する者は約 200 名。その翌年、上級を履修する者は 1 桁にまで落ち込む——これが 15 年間の本学の状況である。共通教育機構による新カリキュラムの施行を機に、この状況を打破したい。それが共通教育における中国語科目設立当初の目標だった。「卒業必要単位に関わらず、中国語を勉強し続けたい」と希望する学生をどうすれば増やすことができるのか。新入生の学力低下、中国への倦厭感が広がる若者を前に、講師たちは皆どのような努力を重ねているのか。

ここで取り上げる授業は中級中国語 Ia, Ib、IIa, IIb と基礎会話 I・II である。前者は申し込みの段階で、検定クラスとノーマルクラスに分かれる。検定クラスは 2 クラス、ノーマルクラスは 5 クラス設定されており、1 クラスの定員はいずれも 25 名である。検定クラスでは春、秋 2 回の中国語検定の受検勉強を行い、その合否が成績に反映される。ノーマルクラスは文法主体の a と会話主体の b による週 2 回の組み合わせである。成績表には中級中国語 Ia, Ib、IIa, IIb としか記載されず、検定クラスかノーマルクラスかは判別できないようになっている。

ここに担当者による、各担当科目の実践報告を残したい。

I. 中級中国語（検定クラス）報告

池田磨左文

1. はじめに

神戸学院大学「中級中国語（検定クラス）」は、日本中国語検定協会の実施する中国語検定試験において一定の級を取得することを目標として設置されているものである。

その具体的な到達目標は、前期の I は準 4 級～4 級、後期の II は 4 級～3 級である。6 月実施の検定試験で 3 級を取得する学生や、11 月実施の検定試験で 2 級の取得を目指す学生がいないわけではないが、ごく少数であるのでここではそれを例外とし、もっぱら準 4 級～3 級に絞って考察を行なうこととする。

* 神戸学院大学人文学部教授

** 神戸学院大学人文学部非常勤講師

2. 中国語検定試験合格率の推移

——第 59 回（2006 年 6 月実施）～第 68 回（2009 年 6 月実施）

2006 年 6 月から 2009 年 6 月までに実施された中国語検定試験のうち、「中級中国語（検定クラス）」を受講した学生の合否状況を次に示す。

実 施 回			59	60	62	63	65	66	68
実 施 年			2006	2006	2007	2007	2008	2008	2009
実 施 月			6	11	6	11	6	11	6
準 4 級	本 学	受験者数	27		19		17		19
		合格者数	26		18		15		10
		合格率	96%		95%		88%		53%
	合格率の差		+22		+25		+24		-17
	合 格 率		74%		70%		64%		70%
	平 均 点		70		68		65		63
	合格基準点		60		60		60		55
4 級	本 学	受験者数	27	13	32	33	37	31	36
		合格者数	22	10	13	6	11	15	5
		合格率	81%	77%	41%	18%	30%	48%	14%
	合格率の差		+9	+14	-5	-21	-26	-17	-23
	合 格 率		72%	63%	46%	39%	56%	65%	37%
	リスニング	平 均 点	77	69	71	54	67	73	53
		合格基準点	60	60	60	60	60	60	55
	筆 記	平 均 点	70	70	59	65	65	68	55
		合格基準点	60	60	60	60	60	60	55
3 級	本 学	受験者数		14		16		14	
		合格者数		0		1		0	
		合格率		0%		6%		0%	
	合格率の差			-36		-26		-38	
	合 格 率			36%		32%		38%	
	リスニング	平 均 点		59		55		67	
		合格基準点		65		60		65	
	筆 記	平 均 点		69		61		58	
		合格基準点		65		62		60	

注：合格率・平均点・合格基準点は中国語検定試験協会の発表による。なお、合格率・平均点は小数点以下第一位を四捨五入してある。

中国語検定試験には、準 4 級と 4 級とには 60 点、3 級には 65 点という合格基準点が設けられているが、問題の難易度に「ぶれ」の生じるのが避けられないため、日本中国語検定協会は合格基準点を調整することによって合格率を一定の範囲に収めようとしている。おそらく得点の分布も勘案しているものと思われる。

「中級中国語（検定クラス）」が中国語検定試験において一定の級を取得することを目標として設置されているものである以上、授業担当者のノルマは自分の担当する学生の合格

率が全国平均を超えるようにすることである。担当する学生の合格率が全国平均を下回るようでは、授業担当者はその職責を全うしたとはいえない。

「中級中国語（検定クラス）」を受講する学生の合格率と全受験者の合格率との差を示したのが、表中の「合格率の差」欄である。準4級では2009年6月実施の第68回、4級では2007年6月実施の第62回以降、3級ではすべての回で「中級中国語（検定クラス）」を受講する学生の合格率が全国平均を下回っており、4級と3級とでは改善の兆しも見られない。学生に成果を上げさせようと教材や授業方法などにも毎年手を加えているが、効果が見えていない。

3. アンケート結果から見る、授業を改善するための手がかかり

「中級中国語（検定クラス）」の授業を改善する手がかかりを得るため、当該クラス2009年度前期最終授業日である7月25日、学生に対してアンケート調査を行なった。記名・無記名は任意とし、以下の4点について自由記述形式で答えてもらった。回答数は40、そのうち記名回答が34、無記名回答が6であった。なお、この時点で、第68回中国語検定試験の結果はすでに出ており、アンケートの記述も当然それを踏まえたものである。

1. 自分なりに努力・工夫をした点
2. 自分の努力・工夫が足りなかった点
3. 授業全般（教材・先生・進め方など）について改善を望む点
4. 初級（1年生）授業全般に対する意見

ここでは、記名回答のうち、次の3つのグループに属するものを紹介する。名前を仮にA～としておく。

(1) 期末試験の成績が4月30日に行なわれたクラス分け試験の成績より悪かったグループ

到達目標別クラスを編成するため4月30日にクラス分け試験を行なったが、学習結果の推移を見るため期末試験もそれと同一の問題にしてみた。ほとんどの学生は期末試験の成績の方が良かったものの、期末試験の成績がクラス分け試験の成績より悪くなっていた学生が6人いた。このグループは、その6人のうち記名でアンケートの回答が得られた5人である。なお、A・B・D・Eの4人はクラス分け試験・期末試験ともに成績が下位に位置しているが、Cはクラス分け試験は第6位、期末試験は第9位であった。

A: 1. 空白

2. 先生の講義はわかりやすかった。ただ自分が勉強しなかったことが原因と思う。勉強時間が足りないのが明らかった。

3. 空白

4. 一年の時の授業は、自分の姿勢にも問題あるけれど、点の書き方もそんなに言われた覚えはないと思う…。

B: 1. 教科書をみなおしたりした。

2. 勉強時間が圧倒的に足りなかった。他の教材でも勉強すればよかった。
3. 授業はやたら速くて、あまりついて行けなかった。もっとゆっくりしていねいにやっ

- てほしい。
4. あまり覚えてないけど、当時は理解できていた気がする。
- C: 1. 教科書に出てくる単語を覚え、検定試験の過去問を2回以上やった。
2. 漢字の書き取りで、しっかり覚えられていない字があった。
3. 空白
4. 基本例文の発音テストが毎回の授業であったので、正しい発音に近づくことができたと思う。
- D: 1. 授業は毎時間しっかり聞くようにしていた。
2. 授業以外の自習をほとんどしていなかった。毎週の課題もあまりしていなかった。
3. 少し授業の進め方が早かった。
4. 今回の試験でリスニングがあまりできなくて難しいと感じたので、1年の時にもっとリスニングをしておけば良かったと思いました。
- E: 1. 休みの日や学校帰りに友達と勉強会をひらいた。暗記カードで単語・文法を覚えた。
2. 自分の最初のレベルが低すぎて、勉強している“つもり”になっていた。復習の仕方があまかったので細かいところまで頭に入っていなかった。漢字や根本的な間違いが多かった。宿題もきちんと出来なかった。
3. 自分がついていく為には、必要な厳しさがあったので、ちょうど良かったと思う。
4. 厳しかったけれども、勉強になること・ためになることなど、いろんな話が聞けてよかった。少しついていけないくらいだったけれども、自分のレベルの低さに気付けたので、次回こそがんばろう！と思う。

(2) 6月28日に行なわれた第68回中国語検定試験で4級に合格したグループ

- F: 1. 何度も何度も、単語あるいは文章を読んでリズムを覚えた。学校で買った教材だけでなく、他の参考書も買って例文を頭に入れて行った。
2. リスニングを十分に練習していなかった。
3. 長文読解の部分は、実践的なものにした方がいいと思う。ただ訳を出すだけではどうにもならないと思う。たぶん問の傾向とかあるだろうし、その答えるポイント（どこを見たらいいかとか）もあると思う。
4. 毎回授業の最後にテストがあったが、教科書を見ていいということだったので、あまり意味がなかったように思う。
- G: 1. 筆記の授業ではそうでなかったが、リスニング授業では全体の出席率がとても悪かった。努力には入らないかもしれないが、やはり毎回授業を受けるべきだと思う。また、予習には辞書や1年次の教科書などを調べて、時間をかけた。
2. 自分の弱い所や判らなかった所を見直すことはしても、改めてまとめ、ノートに書くということをしなかった。やはり書いて覚えることが大事だと痛感した。
3. 空白
4. 初級と中級の難しさの違いが気になった。中級で急に難しくなったようだ。検定

クラスなので仕方がないのかもしれないが、初級でもう少ししっかり中国語を学んだ方が判りやすかったように思う。具体的に言うなら、単語量を増やしたり、文章を作らせたりすると、実力がつくのではないかと感じた。また、中国語の日常会話があまり無かったので、それも増やした方が良いと思う。

- H: 1. 時間をかけて復習をただけ。
2. 他の授業もあり、中国語に時間をかけられないことがあった。
3. 特になし。あるとすればリスニングをもっと重点的にしたい。(自分で勉強しにくい)
4. 特にない。成績が悪いのは私を含め生徒の努力不足
- I: 1. 授業で習った文をすべて暗記する。トイレにはる。書きまくる。
2. 文法をもっとていねいにやっておくべきだった。まちがしやすい所、混乱しやすい所。
3. テキストの値段が高い。もう少しスムーズに授業を進めてほしい。リスニングの練習をもっとやってほしい。実戦力をつけたい。
4. 1年生ではもっと漢字とかの練習などをするべき。細かいとめ、はね、ピンインや発音も。日本人の先生も中国人の先生も発音に甘くて、今になってとても苦労している。やはりはじめの基礎が大切です。

(3) 6月28日に行なわれた第68回中国語検定試験で3級に合格したグループ

Jは1年生のときに2008年11月実施の第66回中国語検定試験4級を受け、合格している。大学に入るまで中国語を学習した経験はなく、ほかの多くの学生と同じように4月から学習を始めた。週2回ある中国語授業のうち、1つが池田の担当する「中級中国語(検定クラス)」授業の直後であったためその教材に興味を持ち、残部を持ち帰って自習し、1年生での4級合格に至ったということである。Kは中国での生活経験がある学生である。

- J: 1. 単に問題を解くのではなく、解答を見て、正解の解説はもちろん、他の選択肢の解説も読み、問題の応用が出来るように対処する。
2. リスニング問題とピンインの問題
3. 文章の読解をやるだけでは、高校の時の英語と同じであり覚えられないと思います。
4. 特にありません。
- K: 1. 文法は去年ある程度やったので、3級のよく出る単語を多く覚えました。問題は並び替え、穴埋めなど、ただ番号を書くだけではなく、一文書きました。使った教科書の中の例文と単語は重要だと思ったので3回は書きました。
2. 中検の最後の問題に日文中訳があり、その対策はほとんどしなかった。せめて過去問の3回分くらいはやっておけば良かったと思いました。あと、単語のピンインと四声は覚えきれていなかったと感じます。
3. 教科書が高すぎると思います。あと、進め方としては、筆記対策はけっこうした

が、リスニング対策をほとんどしていなかったように思います。

4. 先生によって違っていたと思いますが、文法をばつと説明して、それでほとんど終わっていたので、生徒が理解していないままどんどん進んでいったように思います。

4. 4つの指摘

これらのアンケート結果から次の4点を指摘したい。

- (1) 授業に出席するだけで効果を得ることは不可能。「覚える」という作業を自分から積極的にやらなければ、検定試験での合格が難しいだけでなく、学力の伸長さえ期待できない。声を出して発音し、手を動かして書き、それを通して意識的に「覚える」という作業は、中国語学習において必要不可欠である。
- (2) どのグループに限らず、リスニング訓練の不足を指摘する学生が多い。2009 年度「中級中国語（検定クラス）」のリスニング試験対策授業はすべて中国人担当者によって行なわれているが、授業の一部を中国語で行なったり即席の応用練習を教室で行なったりすることにより「ナマ」の中国語に触れる機会を学生に提供することが十分にできていない可能性がある。もちろん、教材自体もさらに工夫をし、授業形態に関係なくリスニングの訓練が可能になるように改良していかなければならない。
- (3) 成績下位のグループには、1 年生の初級段階での知識が十分に身についておらず、そのため「中級中国語（検定クラス）」の授業内容を理解することが困難な学生が少なくない。これらの学生へは、教材の量を思い切って減らし、基本事項を理解させ、記憶させることに重きを置いた授業を行なうべきかもしれない。前期で4 級に合格させることはあきらめ、まず準4 級を確実に取得できるよう指導することも考えなければならぬ。
- (4) 1 年生の初級段階において、一部のクラスで授業が十分にていねいに行なわれていない可能性がある。発音や漢字、さらには標点符号まできちんと指導し、基礎をしっかりと身につけさせるよう、より一層心がけていかなければならない。

5. まとめ——2010 年度に向けて

2009 年度「中級中国語（検定クラス）」学生の中国語検定試験の結果は、私たち授業担当者にとって満足できるものではなかった。「中級中国語（検定クラス）」という、ある意味で学習を強いられる授業を自らの意志で選択した学生たちに、彼らの期待する結果を出させてやれなかったことを反省するとともに、いろいろな意味での指導不足を心から申し訳なく思う。

「中級中国語（検定クラス）」を受講する学生の多くは、いわゆる受験勉強というものをした経験が乏しいのかもしれない。そのため、学習方法がよく分からず、授業に出席するしか学習の手立てを持たない学生が少なくないのではないだろうか。このように学習すれば一定の成果を上げることが出来るのだというように学習方法を具体的に示唆しながら、学生自身が主体的に学習を進めるように仕向けることが、何よりも必要とされているよう

に思われる。

せっかく学んだ中国語である。何とかして身につけさせてやりたいと思う。

Ⅱ. 中級中国語（ノーマルクラス）報告

Ⅱ－1. 「ノーマルクラス a の針路

——新方式実施前に考えたことと実施後に感じたこと」

傍島 史奈

1. 新方式実施に先立ち

(1) 授業の内容

中級ノーマルクラスでは、2009 年度より、a は日本人が担当する読解・朗読の授業、b は中国人が担当する発音矯正・会話の授業とそれぞれの特徴を設定し、別々の授業をすることとなった。

まずは教科書選び。初級では個々に完結した短い一文を読んでいただけたので、急に難しい長文を読むのは適当ではないと考えた。そこで、『中国語への道【準中級編】—浅きより深きへ—』（内田慶市・奥村佳代子・張軼欧著 金星堂）を選んだ。理由は5つ①準中級というレベル設定。②余裕を持って授業できる分量である。③会話文とその背景を説明した100字前後の短文という構成で話題に入りやすく、さらに練習問題で反復学習できる。④今も変わらぬ朝食屋台風景から現代の若者や社会問題まで多岐にわたる最新の話題の中に、伝統的習慣と新しい中国の姿の両方が盛り込まれている。⑤「2008.8.8 北京オリンピック開幕の日に」というまえがきがあったこと。

①②③はノーマルクラスにとって重要なことである。私はノーマルを担当したそれまでの2年間、最初の授業で必ず「なぜ中国語を続けたいと思ったか」など授業に関する要望も含めてアンケートしてきた。うれしいことに、ほとんどが「1年生の時に習って楽しかったから」「1年でやめるのはもったいないから」という学習に前向きな学生である。しかし、検定クラスではなくノーマルを選んだという点について、「難しすぎてしんどくなるのはイヤ」というのが本音のようだ。教科書以外に「中国の映画を見たい、音楽を聴きたい」「中国の祝祭日の様子、文化・歴史に関することが知りたい」といった要望もあり、ノーマルクラスに対しては、語学学習と同時に文化的な要素をも期待しているといえる。また、単に「単位がほしいから」とする学生も少なくない。さらには、初級の単位を落とした学生が履修することもある。やる気も興味もレベルもすべてがまちまちであり、ノーマルクラスでは検定クラスのような確定的な目標・目的は設定できないのである。また、中級という名である以上、やはりレベルを上げた文章を読みたい。しかし、分量が多すぎるのであれば、これまで1年で1冊の教科書をリレーしてきたことを考えると、2冊に増える今年度からは、内容を消化しきれない学生がますます増える恐れがある。そうなれば、レベルはどうであれ、せっかく中国語を続けたいと考えた学生のやる気を削いでしまうことになりかねない。したがって、新たに出てくる文法事項はもちろん、既習の初級文法をも復習

と称して説明する時間が必要となる。さらに、授業内容に文化的要素も求められているとすれば、映画や音楽を鑑賞するなど中国に関する情報を提供する時間（これは各担当者の知識と経験に頼る）も必要となる。したがって、教科書の分量は欲張らないほうが良い。各学生のレベルにかなりの差があることを考慮しても、まずは“とっつきやすさ”が教科書に求められることになる。

④⑤は、中国は急激に変化しており、ほんの数年で時代遅れになるため、やはり新しさは重要な要素である。中国になにかしら興味を抱いて中級ノーマルを履修する学生にとって、最新の中国情報が満載の教科書は魅力であると考えた。もちろん、教える側にとってもそうであるはずだ。

(2) 近年の中国語教育における現実

いよいよ新年度、中国語を続ける理由は、積極的に学びたいと考えた学生の中に単位が欲しいだけとする学生も数人いるという、例年通りの結果となった。しかし、中国について自由に書いてもらったところ、「反日暴動（2002 年サッカーワールドカップ予選の重慶での暴動に始まる一連の抗日運動）」「食の安全」「人権問題」「偽造・模造品」に対する嫌悪を書いた学生が 20 名中 6 名もいた。中国語履修者が大幅に減るなど、ここ数年の中国に対する若者の厳しい目は聞いてはいたが、過去 2 年で無回答や「中国に興味はない」という回答はあったものの、このようなマイナス点をわざわざ書く学生は私のクラスにはいなかった。それが今年度は、無回答と「興味なし」をも含めると、実に半数以上の学生が中国に対して特に良いイメージがないという結果になった。これはたった 1 クラスの結果ではあるが、ノーマルクラス全体の問題として捉えるべきであろう。

それではなぜ中国語を続けるのか。やはり、就職する将来を見据えてのことである。サッカーの試合後の暴動にショックを受け中国に対してあまり良いイメージが湧かなくなった当時の小中学生は、ここ数年の一連の事件・報道によってそれが決定的なものとなったようである。今後もしばらくはこのような学生が出ることは簡単に予測される。しかし、世界的不況の現在もなお中国の経済は成長を続けており、好き嫌いに関わらず大学では中国語を学んだほうが良いと考える学生は、これ以上大きく数を減らすことはないだろう。とはいえ、なにごとにも興味を持って楽しく勉強できなければ続かないものである。2 年生以上が受講する中級ノーマルでは、どのクラスにも毎年、一度も出席しないまま終わる者が数名、途中から出席しなくなる者も数名おり、これらを合わせると 5 人前後から 8 人前後受講者が減ってしまうのが現状だ。始めから出席しない学生に対してはどうしようもないにしろ、途中でやめてしまう学生に関しては、なんとか引き留めるようこちらも努力しなければならない。中国に対してあまり良い印象を持たない学生が以前より増えた今、このことは特に重要な課題である。

2. 新方式での授業風景

今年度のノーマルクラスでは、b でナマの使える中国語を中国人の先生から直接学ぶことで、毎時間よい緊張感と充実感を味わうことができるはずだ。となれば、日本人班である a では何ができるのか、考えなければならない。a は日本人が中国語を教える授業であ

る。この強みは、我々自身が、学生と同じくこれまで中国語を学んできたという点にある。これによって、少し複雑な文章を読むにあたり、どのような日本語との違いでつまづくことがあるかなど、自身の経験を踏まえて学習方法を話すことができるはずだ。さらにこれにとどまらず、学生がどのようなところに興味を持ちそうか、あるいはどうすれば興味を持って勉強を続けることができるかを、これも中国語学習経験者として、各担当者が自らの経験と照らし合わせ、推測しながら授業を進めることができるはずである。我々のやるべきことは、学生に興味を持たせ、それをきっかけに3年目・4年目と中国語を続けたいと思うやる気を引き出すこと、あるいはやる気を育むことにあるのだ。

以上から、aでは、初級文法も黒板に書き、それを丁寧に解説して学生の苦手意識を取り除き、自信につなげようとしている。複雑化した文章についても、品詞を色分けする、単純化した文例を示すなどしてやはり丁寧な説明を心掛けている。また、日本とは異なる状況を目で確かめる機会も作る。たとえば、教科書でインターネットが話題になっている場合は中国のサイトの画像を見せ、病院が話題になっている場合は中国の病院を特集したテレビ番組の録画を見せるなど、各担当者がそれぞれに工夫している。それから、その話題に沿った中国での自身の体験談を語るなどして、少しでも学生に中国を身近に感じてもらうことも大切だ。こうして教科書の内容に入りやすい状態にして、2週間に1回は100字前後の文章を学生自身に自力で訳させるようにしたところ、前期に比べて後期は学生の理解が数段速くなり、授業の進行もスムーズになったと実感している。また、意味を捉えながら100字前後の文章を一人で朗読する練習を通じて、新たな文章を前にしても、中国語のリズムに応じて一つ一つの単語や文法に学生自身が自然に気を遣うようになったと感じられる。この点に関しては、bでしっかりと発音を行った成果との相乗効果といえるだろう。その他、中国語で書かれたクイズを解く、中国語で歌われている日本の流行歌をその歌詞を見ながら聴く、日本のアニメの中国名をクイズにするなどして、中国に親近感を持たせようとしている。

3. ノーマルクラス a の役割

新たな方式をとって1年目、留学を何年も前に終えた我々教える側が、教科書の最新の話題に戸惑うこともあった。すでに“浦島太郎状態”にあるといえる我々自身にも、今の中国の情報にもっと敏感に反応して、変化し続ける中国を受け取ろうとする柔軟な姿勢が必要なのである。ノーマルクラス a の最大の役割は、1年生で中国語を選択してなんとなく続けようと考えた学生に、今後もずっと続けたいと思えるような環境を与え、彼らを次の段階へと無理なく導いてやることである。これは、教える側が教科書の情報からどれだけ話題を膨らませることができるか、“異文化中国”の今昔をどれだけ親近感が湧くよう伝えることができるかにかかっていると、改めて感じている。

Ⅱ－２．「ノーマルクラス b の成果と問題点」

于 耀明

1. はじめに

この授業の概要をシラバスから引用する。

講義名 中級中国語 I b・Ⅱ b

テキスト 是永 駿監修 張 美霞・陳 薇著『加油！中国語』（郁文堂）

担当者 于耀明（講義代表）、劉曉嵐、佟岩、李玲、張軼欧、張蘭、金晶

講義の主題と目標 この講義は初級中国語が終了し、更に中国語の会話を身につけ、ステップアップしようとする 2 年生の諸君が対象である。テキストの各課の本文は、日本から中国へ留学した学生が現地で日常生活を送るさまざまな場面より構成されている。習う言葉の実用性が高く、センテンスも短く、すぐに覚えられ、すぐに話せるものばかりです。会話が中心の授業ですので、まずしっかり発音の練習をし、言葉を覚え、相手の質問に受け答え、自ら質問することができるように、確実に中国語でコミュニケーションできる力を伸ばしていく。

2. この授業の成果

1 年間を通して、各クラスの担当教員は学生の中国語でコミュニケーションできる力を伸ばすために、講義中最大限に発音練習と会話練習を繰り返して指導をした。結果として、学生からは「母国語を中国語とする教員からの直接の指導を受け」、「会話や発音の練習がきっちりして中国語の本当の発音を習得し」「十分に音読練習があつてよかった」「たくさん声に出して発音を練習するのはとてもよかった」「1 年生の時よりも声に出して読む回数が増えたので、前よりは発音もマシになった」とか、「発音や会話をよくするので眠くならずに集中できた」「発音の間違いをその場で先生が正してくれるので勉強になった」「授業のペースや内容が分かりやすく、少しずつ中国語が身につけている気がする」「この授業は私が今受けている授業の中で一番緊張感があつて集中できるので、力がついた」など、アンケートを通していろいろと評価している。

アンケートで、「授業中での音読・会話練習の量」について尋ねると、「十分だと思う」「もっと増やしてほしい」と 2 項目の回答率は約 92% で、「この授業を受けた満足度」では、「十分満足している」と「満足している」のプラス評価が 98% である。「現時点での自分の目標の達成度」についての回答は、「簡単な会話が話せるようになった」が約 9%、「まだ話せないが、話す努力をしたい」が 85%、「難しすぎるからあきらめたい」が 6% である。よって、この授業を通して、多くの学生は授業中で積極的に発音や会話のレッスンに取り込み、それぞれそれなりの学習効果が収めたと考えられる。

クラスあたりの人数が 20 人未満のため、授業中何度も当てられて、常に緊張感があり、集中してよい勉強ができたと思われる。また、「教科書以外に中国についての話をしてくれるのでよかった。もっと聞きたい」「中国の文化を知ることができ面白い。語学を含め、興味が出てくるようになった」「教科書にない補足説明や豆知識をいろいろ紹介してくれ

たので、知識が深まった」など、プラスアルファの効果も出たと考えられる。

3. この授業の問題点

この授業で長期欠席者の多いことが1番の問題だと考えている。履修登録者数が125名に対して、長期欠席者は約27%の33名にも上っている。これはこの授業特有の問題かどうかは特定できないが、登録した学生を一人一人指導し学業を伸ばしてあげたいので、教室に顔を出してほしい。

アンケートで「1回の授業に使った予習復習の時間」について尋ねると、「1時間以上」が2%未満、「30分程度」が40%、「ほとんどやっていない」が58%強で、約6割の学生が予習復習はほとんどやっていないことがわかる。この項目については、クラスによって結果が偏っている。たとえば、Aクラスで予習復習をしている学生の割合は70%に対して、Bクラスでは30%、Cクラスでは10%に過ぎない。これは単に学生の学習態度の差と言い切れる問題ではなく、担当者の指導にも問題があると考えられる。きちんと宿題を出し、そのチェックを行っているかどうかの問題ではないかと思われる。

テキスト『加油！中国語』の適正についてアンケートをしたところ、学生はほぼ全員が適正だと答えた。だが中には、「ab 別々の教科書を使うのではなく、ひとつに統一したほうがよい」とか、「文法中心、会話中心といったように分けたほうがよい」という意見も見られた。教員のアンケートにも「できれば、現行の『加油！中国語』（文法説明がかなりの紙面を占めている）を会話中心のテキストに換えたほうがよい」という意見があった。新年度のテキスト選定に考慮すべき建設的な意見だと思われる。

4. この授業の改善すべき点

この授業に対する学生の満足度は90%以上あった。だが、改善すべき点として、「読むスピードが速いのももう少しゆっくり」「（先生が）中国語を話す時、速すぎて聞き取れないことがあるのでゆっくり話してほしい」「授業のスピードが速すぎるので、もう少しゆとりをもたせてほしい」、逆に「授業の進む速度が遅い」など、少数ながら教師陣として一層の教育効果のためには耳を傾けるべき貴重な意見もあった。

教員側からは、授業設定の内容が多すぎて、それにテキストが会話専用のテキストではなく、文法解説の紙面も多くなっているために、会話練習の時間が十分に取れないことが問題で、改善すべきだと指摘されている。この指摘は新年度のシラバス作成に考慮すべきことだと思われる。

Ⅲ. 基礎会話クラス 「基礎会話クラスの現状と問題点」

馬 麗娟

「基礎会話クラス」は昨年度に設置されてから今年で2年目を迎えた。今年度も昨年度と同様に3クラスが開講され、40人程度の受講生があった。筆者のほか、張応華先生、張蘭先生がそれぞれのクラスを担当した。新しいテキストを採用したことを除くと、授業の進め方はほぼ昨年度と同じで、成績の評価基準は統一された。授業の具体的な方法は各先生に委ねた。

新テキストの採用にあたって、まずは実用性であること、そして中国語経験者に向くことを条件とした。しかし、実際に授業が開講したら予想外の状況が生じ、当初想定した進め方を変更せざるを得なかった。

予想外の状況とは、このようなものだ。筆者担当のクラスでは登録者数は13名だった。だがその中に中国語初級の履修者は8名しかいなかった。残り3名は一年生の時に中国語を受講したが単位を落としていた。他の2名は中国語以外の語学からの変更であり、中国語の履修歴が全くなかったのだ。本来ならば、これらの学生は「入門会話クラス」又は「初級中国語」の再履修クラスに入るべきであり、そのほうが彼らにとってより適当であるが、さまざまな理由から「基礎会話クラス」に入るようになった。

何人かの学生からの話によると、「入門会話クラス」に入る予定だったが、すでに満員で入れなかった。友人がこのクラスにいるので、自分もこのクラスに入りたい。授業時間が自分の都合に合っていた、などであった。前者については、筆者も「入門会話クラス」を担当しているので、ある程度理解できる。

「入門会話クラス」に対する学生の需要は非常に高く、筆者が担当している3つの入門クラスはいずれも登録者数は満杯であった。恐らく少々遅れたらもう履修登録ができないのではないかと推測する。しかし実際に授業が始まると、クラスにもよるが、最初から授業に出ない学生が大概いる。しかしこのような学生も履修登録を取り消さないで、クラスに空きが出ない。そのため本当に授業を受けたい学生が他のクラスに流れるしかないという現状である。このような現象はほかの先生が担当するクラスでも見受けられた。教師としては、どのような理由にせよ、せつかく基礎会話クラスに入ってきたのだから拒むことをせず、ほかの受講生と一緒に授業を受けさせた。

このために、受講生間に明らかにレベルの差が存在した。このままではテキストを中心に授業を進行するのは無理だろうと考え、授業の進め方を変更することにした。授業は主に中国語経験者を中心に進めつつ、未経験者にも考慮が必要である。できれば両者とも受け入れ易い進め方を取り入れたいと考え、以下のような授業方法を取った。

まず授業始めの30分は主に挨拶や決まり言葉を練習する。その後はテキストに入り、適宜中国文化についての紹介を加えて授業を進めた。また挨拶の言葉などについても、簡単な内容をマスターしてから少しずつレベルアップし、応用範囲を広げていくようにし、テキストの内容もできるだけ丁寧な説明を努めた。結果として授業進度は当初想定したより遅くなったが、内容は分かり易く、より確実に覚えることができ、そのために学習意欲も

良い状態で持続できたと考える。

以上のように「基礎会話クラス」に中国語の未経験者が混じる可能性は、今後も十分考えられる。そのためテキストを選ぶ際には、実用性があるだけでなくその難易度も考慮しなければならない。しかしクラスが少人数であるからこそ、このような状況があっても調整し易く細やかな対応もできたのだ。受講生は基本的に学ぶ意欲があり、非常に教え易い。これは授業がうまくいくための大きな要因である。このような学生がもう少し増えればと願いたい。

「基礎会話クラス」は開講して2年目だが受講者数はあまり大きな変化がなく、横這いである。特に「入門会話クラス」と比べるとかなりの差がある。もちろんその理由は一概には言えない。しかし、受講生増加のためには1年生の中国語受講生に対してもっと宣伝する必要があると考える。同時に、中国語を学ぶ楽しさをもっと実感できるチャンスも必要かもしれない。

1年生用の「入門会話クラス」を担当していて非常に気になるのは、1クラスの受講者数が多いことである。登録者25名では、全員が来なくても（実際に登録者全員が出席することはほとんどなかった）、「初級中国語」クラスの人数と同じである。そのため会話クラスでありながら、それほど充実した会話練習が行えないのだ。また、受講生の受講意欲もばらつきが大きい。受講者がより確実にそして楽しく学び、より長く続けるにはまずは「入門会話クラス」のクラス受講者数を減らすことあるいはクラス数を増やすことが望ましい。

終わりに

2009年12月、検定クラス受講生の受験結果に落ち込んでいたところ、嬉しいニュースが舞い込んだ。本学で使用している初級用テキスト「みんなの中国語 第一部」「同 第二部」だけを繰り返し勉強して、3か月間で検定試験準4級と4級に同時合格したという一般の方（50歳、男性）のお便りである。このテキストは、本来検定試験合格を念頭において作成したものだったので、作成者としては安堵した。

検定クラスの受講生の合格率が悪いのは、決して初級のテキストが悪く、基礎力が不足しているからではない。やはりやる気の問題なのだ。だが、実はそれがもっとも難しい。どうすれば彼らの向学心を維持させることができるのだろうか？

本報告からは、現場で奮闘する担当者の姿が浮かび上がった。検定クラスは受験結果が一目瞭然である。検定クラスは責任が重いからと、担当を洩る先生もいるなか、池田先生には科目創設以来ずっと担当をお願いしている。例年教材を補充し、到達度別クラスを編成しと工夫を重ねているのに、結果が出ない。担当者としての焦燥ぶりが報告から伝わり、こちらも申し訳ない気持ちになる。だがこのクラスは本学中級中国語教育の大きな特徴の1つであり、これまでの歴史もある。なんらかの形で継続したいと考えている。

ノーマルクラスでは他クラスとの運営のバランスをとろうとして、まとめ役に徹する傍島・于両先生の奮闘ぶりが、ありがたい。受験勉強ばかりの検定クラスが辛いのであれば、

ノーマルクラスをベースに、一部で検定試験対策を行うクラスの設定もあり得るのかもしれない。

また 2 年生用に設定された基礎会話に中国語の未経験者が入っていることは、馬先生の報告で教えられた。この状況を解消し、基礎会話クラス本来の人数を増加させるためには、入門会話クラスの増加が必要だという提案は拝聴に値する。また 1 クラス 25 名という入門会話クラスの定員数については、至急再考する必要があるだろう。

現場を離れると、やはり見えなくなるものが多い。そのことを常に心に留め、非常勤の先生方と連絡を密に取りながら、諦めることなく本学の中国語教育を考えて行きたい。

2009 年度中国語上級教育における実践報告

中山 文^{*}，于 耀明^{**}，山本 透江^{**}，上田なおみ^{**}

池田磨左文^{**}，谷口 高志^{**}

(2010 年 1 月 12 日受理)

はじめに

2006 年に共通教育機構で外国語科目設立から 3 年。今年、もっとも運営が懸念されていた上級クラスが立ち上がった。もともと 1000 人ほどいたはずの中国語の履修生のうち、2 年後も学修を続けている者がどれほどいるのだろうか。彼らは意欲を持って授業に向かってくれているのだろうか。ここで報告するのは実用中国語 I・II、中国語会話 I・II、中国語リーディング I・II である。それぞれ KAC と KPC で 1 コマずつ開かれている。

3 年前、筆者はこれらの授業についてシラバスで以下のように書いた。

第 5 セメスター (3 年次前期)・実用中国語 I、中国語会話 I、中国語リーディング I

実用中国語 I では、中国 (人) を相手にするビジネスマンにとって、不可欠な中国についての知識を学びます。中国 (人) と付き合う上で私たちの無知が引き起こす無用の衝突を避けるために、中国の社会、文化、歴史、習慣や中国人のものの考え方などを学びます。所詮言葉は道具であり、それを使うのは人間です。言葉だけが流暢でも、相手への尊敬のないところに望ましいコミュニケーションは生まれません。相手を正しく理解することが、あなたの語学力をさらに生かすためには必要なのです。この基礎の上に立って、中国語会話 I で話す・聞く能力をレベルアップさせ、中国語リーディング I で読む・書く能力を上げます。

第 5 セメスターの授業を終えるころには、普通の中国人が読んでいる新聞、雑誌、小説などを、辞書をひきさえすれば理解できるという読解力が身につきます。これらのプログラムを終えた夏休みに中国へ語学研修留学に行く学生は、例外なく帰国後飛躍的に力を伸ばし、中国への興味も強くなります。苦手だったリスニング力が進歩し、自信を持って中国語会話に挑むようになります。

中国語リーディング I の授業で身につけたボキャブラリーが、中国語会話 I で生きてきて、実用中国語 I で得た知識によってそれが中国人とのコミュニケーションにおいて有効に利用される。この 3 科目は有機的に結びつき、受講生の語学力を飛躍的にアップさせてくれます。この時期の終了時目標は中国語検定 3 級から 2 級レベルに設定しており、この授業には中国語を就職の武器として考える積極的な学生

* 神戸学院大学人文学部教授

** 神戸学院大学人文学部非常勤講師

が集まります。

ここで筆者が強調したかったのは、実用中国語という科目の位置づけである。この授業に対応する科目は独・仏・朝鮮語では最初から設定されていない。筆者はこの授業を単なる語学の授業ではなく、ナマの中国を知るきっかけとなる授業として設定したかったのだ。

この授業について、担当者には中国語でメールが打てるようにすること、中国語で書かれたネットサイトにアクセスし、検索ができる力をつけることだけをお願いし、それ以上のことは担当者に委ねた。週1度の授業で中国の現状をすべて知ることなどできない。疑問が湧いたら、そのつど自分で検索する。社会にでて中国（人）相手に働くときには、その力が最も役に立つ。中国語リーディングと中国語会話では語彙力と応用力を高める。この3つの授業により、総体的に中国語の実践力が高まる、というのが筆者が描いた理想像だった。

この目論見はどのような結果を収めたのだろうか。ここに担当者による、各担当科目の実践報告を残したい。

I. 実用中国語 I・II

I-1 「KAC における実用中国語の課題と反省」

池田磨左文

1. 「実用中国語」科目開設の目的

神戸学院大学「実用中国語」は、2009 年度、3 年生を対象として新たに開講された科目である。

神戸学院大学では、初級外国語科目として中国語を選択する学生は少なくない。2 年生以上で中国語科目を引き続き受講している学生は、初歩的かつ不完全であるにせよすでに一定の中国語を習得した、あるいは習得しつつある学生である。

ところで、私たちは学生に中国語を教える一方で、学生が中国語を生かして中国に関する情報を得たり、中国の状況を理解したり、中国のことについて積極的に発信したりすることのできるような方策を彼らに授けることができているだろうか。筆者は1 年生を対象とする「初級中国語」、および2 年生を対象とする「中級中国語（検定クラス）」の授業も担当しているが、自分の担当する授業に限って言えば、それに成功しているとは言い難い。多くの学生の中国に関する知識の少なさや関心のなさについてはしばしば伝聞するところであるし、また筆者自身の実感するところでもあるが、学生が中国語を活用できていないとするならば、私たち中国語を教える立場の人間もその職責を十分に果たしていると言うことができない。

「自分たち中国語教師の仕事は学生に中国語を教えることであって、学生に中国語を活用させることにまで責任を負わされてはかなわない」という声も聞こえてきそうである。しかし、そうだろうか。

神戸学院大学の中国語科目は専門科目ではなく、いわゆる教養科目として位置づけられているものである。神戸学院大学から学生や授業担当者に配布されている冊子に、次のような記載がある。

共通教育を学ぶねらいは、二つあります。ひとつは、急激に変化し対立と混迷を深める世界情勢の動きを広く大きな立場から読みとる力を身につけること、そして、もうひとつは、新しい基礎知識を積み上げて着実にワンランク上の自分を築くことです。このふたつは、いわば車の両輪のようなもので、いずれの学修が不十分でも、大学生として大きく伸びていくことは期待できません。（神戸学院大学・共通教育機構『共通教育はやわかり 2009』p.5）

同冊子によれば、中国語科目は1年次から3年次を通して「リテラシー科目群」に属する「外国語分野」の一つとして位置づけられており、「外国語分野」を含む「リテラシー科目群」の「到達目標」は「大学での学修に必要な基礎的な技能や教養の修得」・「社会人として必要な基礎的な思考力・実践力の修得」とある（同上、p.10）。中国語科目を含めた外国語科目が神戸学院大学においてこのように位置づけられている以上、神戸学院大学で中国語を教える私たちもそのことを十分に意識しながら教育を行なっていくべきである。

「実用中国語」はまさにそのことを念頭に置いて開設されたものと筆者は理解している。神戸学院大学で中国語科目を初級・中級と履修した程度では、学生がそれを活用して中国に関する情報を得たり、中国の状況を理解したり、中国のことについて積極的に発信したりすることは容易ではないだろう。しかし、その状況でも、私たちは学生が中国に関心を持ち、中国への理解を深めるように仕向けていかなければならない。その努力がなければ、神戸学院大学における中国語教育は意味を持ち得ない。

2. 教材とその使用方法

中級までの学習者を対象に週1コマの中国語授業を行なったところで、それだけによって実用に耐える中国語を学生に身につけさせることはきわめて困難であると考え、限られた条件の中で中国語の学力を無理に向上させようとするより、むしろ中国語を学習するための動機づけを中心に据えた授業を行なうことにした。そこで材料にしたのが中国で放送された連続テレビドラマである。これを鑑賞させることによって中国語学習への動機づけを行ない、さらには様々な問題に中国人がどのように対処しようとしているのかを知らせることができるのではないかと考えたのである。

『請讓我來幫助你』（何かお手伝いをさせてください）と題する連続ドラマが、2004年に中国中央電視台（テレビ局）で放送された。これは、中国共産党の青年組織である共産主義青年団と中央電視台（テレビ局）とが共同制作をし、共産主義青年団中央青年ボランティア行動指導センター・中国青年雜誌社・中国青少年オーディオビジュアル出版社が撮影を担当した、中国で初めてボランティアをテーマとした連続テレビドラマで、携帯電話

メール詐欺事件・毒入り調味料事件など中国の庶民が遭遇する問題をボランティアが周囲の人々を巻き込みながら解決していくという筋書きである。その VCD を教材に使用した。

ドラマ 1 篇の放送時間は約 45 分間、それぞれに 1 つのエピソードが描かれており、全 18 篇から成る。4 回の授業を 1 つの単位とし、3 回の授業で 3 篇を鑑賞したあと、1 回の授業の中でレポートを作成し提出することを求めた。レポートは授業の中で完成させることとし、宿題にはしなかった。前期の実用中国語 I で前半の 9 篇、後期の実用中国語 II で後半の 9 篇を見ることにした。以下、『シラバス』から授業計画を抜粋する。

実用中国語 I

講義番号	主題	内容
1 回目	導入	ドラマ内容の紹介とコンピュータで中国語を扱う方法の指導
2 回目	第 1 集	「胡同（フートン）」にボランティアステーションが来た
3 回目	第 2 集	ボランティアを募集する
4 回目	第 3 集	献血で人助けをする
5 回目	第 1 集から第 3 集までのまとめ	レポート作成・提出
6 回目	第 4 集	リストラされた課長、職探しをする
7 回目	第 5 集	携帯メール詐欺犯を捕らえる
8 回目	第 6 集	女性を狙う誘拐犯を捕らえる
9 回目	第 4 集から第 6 集までのまとめ	レポート作成・提出
10 回目	第 7 集	旅行者を「胡同（フートン）」に案内する
11 回目	第 8 集	「かんしゃく」持ちのおじいさん、ボランティアになる
12 回目	第 9 集	老先生、娘がボランティアとしてチベットに行くのをゆるす
13 回目	第 7 集から第 9 集までのまとめ	レポート作成・提出
14 回目	まとめ	Celeb に上げられたレポートを全員で検討する

実用中国語 II

講義番号	主題	内容
1 回目	導入	ドラマ内容の紹介とコンピュータで中国語を扱う方法の指導
2 回目	第 10 集	何世代にもわたる「かたき」同士、ついに仲直りをする
3 回目	第 11 集	「ニセ」ボランティア、人助けをする
4 回目	第 12 集	被災地に贈った救済物資に「ヘソク

		り」が入っていた
5 回目	第 10 集から第 12 集までのまとめ	レポート作成・提出
6 回目	第 13 集	都会生活に疲れた女性、山村の貧困地区に行きボランティア教師になる
7 回目	第 14 集	「毒入り調味料」、騒動を起こす
8 回目	第 15 集	姑は嫁を思い、嫁は姑を思う
9 回目	第 13 集から第 15 集までのまとめ	レポート作成・提出
10 回目	第 16 集	菜食主義の日本の子供に動物保護の本当の意味を悟らせる
11 回目	第 17 集	ボランティア精神、「カネの亡者」の心を動かす
12 回目	第 18 集	旅立ちと別れ
13 回目	第 16 集から第 18 集までのまとめ	レポート作成・提出
14 回目	まとめ	Celeb に上げられたレポートを全員で検討する

1 回 90 分の授業を、次のように構成した。

- (1) 『新華網』に載った 1 篇ごとの梗概に筆者がピンインをつけたものを印刷して配布し、これを筆者が解説した上で、全員で一通り発音する。
(梗概の出所 : http://news.xinhuanet.com/ent/2004-06/22/content_1539359.htm)
- (2) ドラマを鑑賞する。台詞については筆者が同時通訳や逐語訳を行なう。事件やその背景について筆者が適宜解説を加える。また、台詞中の語句や表現のうち、興味深いと思われるものを筆者がいくつか取り上げて説明を施す。
- (3) 各単位 4 回目の授業では、それまでに鑑賞した 3 篇から興味を覚えた事件やエピソードを学生が自ら選び、主に中国語で書かれたホームページをたどりながら自分の感想をまとめて、レポートとして提出する。

3. 課題と反省

テレビドラマを鑑賞することによって中国語を学習するための動機づけを行なうとともに、様々な問題に対して中国人がどのように考え、対処するかを知ってもらおうと思ったのだが、その目論見はもろくも崩れた。

受講者が少なかった。履修登録をした学生が、前期の「実用中国語Ⅰ」では 6 人、後期の「実用中国語Ⅱ」では 5 人しかいなかった。前期の授業では、かなり早い時期から受講者が 2 人になり、最後まで受講して期末試験を受けたのもこの 2 人だけであった。後期に至っては、授業に出席している学生は 1 人しかいない。結局レポートを全員で検討することもできなくなり、ただドラマを鑑賞するだけになってしまった。これでは学習効果を検証することも不可能である。

前期・後期を通して授業に出席し続けている学生は 1 人だけになってしまったが、幸いなことにその学生からは中国語の習熟度に一定の向上が見られる。毎回、ドラマを鑑賞す

る前にその梗概を読んでいるのであるが、全 18 篇の梗概は字数にして 4700 文字を超える。教材用に書かれたものではないこれだけの量の「ナマ」の中国語を読んだのは、この学生にとっておそらく初めてのことであろう。読み進むにつれて、音読が見違えるほど流暢になってきているのが認められた。

4. 結び

前期授業の 2 回目が終わったとき、ある学生が「くどい！」という一言を発しながら教室をあとにし、その学生はそれきり姿を見せなくなった。今となってはその言葉の意味を確かめる術もなく、推し量るしかないが、中国ドラマの台詞の情報量が日本のそれより遙かに多いことが、その学生に「くどい！」と言わせたのではないかと思われる。

筆者の同時通訳あるいは逐語訳がまずかったことも否定できないが、授業中の様子から判断すると、中国人同士の会話に含まれる情報量の多さそのものに拒絶反応を示したというのが本当のところであろう。中国人の発想そのものへの拒絶反応と言ってもよい。

教える側にしてみれば、そうであればなおさら引き続き授業に出席してドラマに向き合い、中国人の発想を正面から受け止めてほしかった。それが異文化を理解する第一歩なのだから。もしかしたら、中国や中国人・中国語とどのように関わるかという問題などではなく、自分とは異質なものを受け止める能力が低下している、あるいは異質なものを受け入れる容量が小さくなってきているのかもしれない。

学生にとって 2009 年度「実用中国語」の教材や授業方法は、日本人の口に合うようにアレンジされた中国料理しか食べたことのなかった学生にいきなり本場の中国料理を、しかもフルコースで食べさせようとするようなものだったのかもしれない。学生の拒絶反応を責めるわけにもいかない。拒絶反応が出ないように配慮すべきであった。その配慮が授業担当者の筆者に欠けていたというのが、一番の反省点である。

I - 2 「KPC における実用中国語の現状と課題」

谷口 高志

1. はじめに

KAC と同様、KPC でも今年度より「実用中国語」の授業が開講された。新たに始まる講義ということで、学生がどれほど集まるか不安であったが、果たして履修登録者は計 7 名に止まり、そのうち継続的に授業に出席し続けたのは 6 名であった。少人数で授業を行えるというのは利点も大きいですが、来年度はより多くの学生の参加を期待したい。

本講義の目的は、中国語の学習ではなく、今の中国の有り様を知ることである。現代中国に関する様々な話題を提供し、中国についてより深く考える契機となるよう授業を行った。2004 年、中国でゴールデンタイムに放送された連続ドラマ「請讓我来幫助 (ni)」を観賞し、その解説を通じて中国社会の現状を学んでいくことを授業の縦軸としたが、ドラマの主内容から脱線したこともしばしばあった。時には一人っ子政策や改革開放政策、天

安門事件（2009 年は事件発生後 20 年目という節目の年であった）といった政治的な問題を学生たちに考えてもらい、また時には、中国における「点菜」の仕方や、旅行計画の立て方といった実用的な課題に取り組んでもらった。硬軟の話題を取り混ぜることで、中国に対する関心が幅広いものとなるよう考えたためである。

2. 講義の特色と現状

この講義の大きな特色は、毎回、PC が完備された情報処理室で授業を行うという点にある。PC の使用は授業を進めていく上で、想像以上の利便性をもたらしてくれた。授業で取りあげた言葉をネット上で検索し、記事や画像、動画の閲覧を通して自力でその意味を調べる、という課題をしばしば与えたが、「百度辞典」や「維基辞典」などに記載されている文章を読めば比較的容易に言葉の大意を理解することができる。もし記事の文章をいまひとつ理解できなかったとしても、簡単な言葉であればそれに関する画像や動画を探し当てさえすれば、たちどころにその内容を把握できてしまうのである。

こちらがある言葉に解説を加える際にも、記事だけでなく、画像や動画を大いに活用した。例えば「集体相親」について説明したとき、体育館で男女の一群が逆方向に進んでいく現場の動画を見せたが、これは学生たちにとってかなり衝撃的だったようである。また、北京への旅行計画を立ててもらった時などは、先ず上海からの電車の「車次」や「票価」を調べ、その後に写真を閲覧しながらホテルや観光地を選ぶといったかたちで課題に取り組ませたが、このように、自分たちで探し得た情報を取捨選択しながら 1 つの計画を組み立てていくという学習の仕方も、PC があればこそ容易に可能となるのである。

勿論、ネットはその情報の信憑性、現実性など多くの問題をはらんでいる。だがそれらを差し引いたとしても、ネットの使用が今後中国を知るための重要な窓口の 1 つであり続けることは間違いない。ネットの有用で安全な使い方を伝えていくことが教員の側の責務となるだろう。

なお、初回の授業で、「雅虎（中国版 yahoo）」のメールアドレスを取得してもらい、それ以後は、授業で出した課題について学生たちが自ら調べたこと、考えたことを授業中にメールで送信してもらうというスタイルを取った。そのメールの内容と期末試験の結果を総合して、各学生の評価をつけることとした。

どのような期末試験を行うべきか、これも悩みどころであったが、結局、中国語のサイトを閲覧したり、メールを使ったりする上で知っておきたい単語の意味を答える問題と、社会的・政治的な話題について記述する問題を出題した。

試験の結果と、授業改善アンケートなどを見て感じたのは、殆どの学生が今の中国の社会的・政治的背景について深く知りたいという欲求を持っているということであった。学生たちはこれまで 2 年間（ないしは 1 年間）中国語を勉強し続けてきたものの、そもそも隣国の現状についてあまり多くの知識を持ち合わせておらず、特に中国の近現代史についての知識は皆無に等しかった（恐らく高校の世界史の授業などで学習する機会もなかったのだろう）。だがそれ故に、急速に経済発展を遂げ、存在感を増し続ける中国についてしっかりと学びなおしたいという欲求もまた強いようである。

改革開放政策や社会主義市場経済に関してごく簡単な解説をただけでも、彼らは新鮮な興味を抱いてこちらの話を聞いていたように感じられた。もっとも、政治的な問題を取り扱うことにはある種の難しさがつきまとい、例えば「天安門事件」という語がネットで検索できないことを確認してもらった時には、さすがに多くの学生が中国への嫌悪感・不信感を覚えたようだったが、そのような負の側面も含めて中国の今を分かりやすく、かつ丁寧に説いていく必要があるだろう。

3. 講義の課題

今後の課題は数多くあるが、とりわけこちらが困惑したのは、授業を進める上で学生の語学力の不足をどう補うか、という問題であった。ネットで記事を探し当てても、ある程度の中国語の知識がなければ、それを理解することは当然できない。中国語でメールの文章を打つという課題に取り組んでもらっても、自動翻訳サイトに頼るばかりではあまり意味が無い。

中国語を活用することと中国に対する理解を深めること、この両立は思いのほか難しい。改革開放について考えてもらった際には、「不管白猫黒猫～」といった比較的理解しやすく記憶に残りやすいであろう文句を先に紹介し、中国語を通して中国を学んでいけるよう心がけたが、そのような試みがどの程度成功したか甚だところもとない。

また PC の操作そのものに不慣れな学生が何名かいて、中国語の入力方法や「雅虎」メールのログインの仕方などをなかなかマスターしてくれず、課題の進捗具合にずれが生じることが度々あった。今年度は受講者が少人数だったので対応できたが、受講者の数が増えれば更なる混乱が予想される。今後は、操作方法のマニュアルを予め作っておき、紙媒体でそれを配布するなどして改善を図りたい。

最後に。一口に中国を知ると言ってもこれはなかなか容易なことではなく、授業時間内にできることも限られている。結局のところ、授業での学習を通して、中国のことを自発的に知ろうという意欲を持たせること、新聞や Web 上で中国に関する記事を見かければそれが何であれ先ず読んでみようというという好奇心を育ませることが、この授業が目指すべき到達点だと思われる。そのための試行錯誤を今後も積み重ねていかねばならない。

II. 中国語リーディング I・II

II-1. 「KAC における中国語リーディング I・II の授業運営報告」

山本 透江

2007 年度から 3 年目を迎える共通教育機構に、新たに開講された 3 科目のうち、当講義は「読解力の向上と中国へのさらなる理解」を主目的としており、KAC での受講者は 6 名、前期は進度・試験共に KPC と同じである。

授業進行はシラバスに従いながら、以下のようにした：

(1) 教科書『天津ダイアリー』内容に沿った講義・学習

「日本人留学生の日記文」「文法解説」「小会話」「練習問題」という構成で、文法解説を行ったのち、分量の多い「日記文」は事前に毎課ごと4名に割り振り、訳出させた。

(2) 時事・文化などについての補足解説

天津市・南開大学での留学生生活を題材にした教科書ということもあり、関連事柄や周辺地域での状況などを紹介した。

(3) DVD鑑賞（毎回20分程度）

国内の地域・民族・文化など多岐にわたる素材を扱った映像を鑑賞した。受講者は、日常生活に関わる題材に興味集中していたようであった。

2007-2008年度の成果で、発音や読解力は確実に向上している。ピンインは正確に読みこなせているし、まとまった文章や会話にあたっても、細かい語彙の知識や予習がなくとも、前後の文脈で何とか読みこなせるだけの地盤もでき始めている。予習の要求は「わからない単語があれば」のみ。前期に関しては、出席率も安定していた。

後期は、11-12月にかけて3年生向けの就職ガイダンス等行事が重なり（水曜4限）、授業が成立しない日が出てしまい、その多くを自習やレポート提出に代えざるを得ず、進度もシラバス通りに行うのは困難となった。よって副教材として『アクティブ中国』（朝日出版社）の「農民工（農村部から都市部への出稼ぎ労働者）」「白領階層（都市部の年収の比較的多いホワイトカラー）」をテーマとした文章を読み、中国の都市部の現状を解説した。

今後も受講者の要求に応えうる授業を提供し続けるのは、この3年次相当開講科目の課題ではなかろうか。

Ⅱ-2. 「KPCにおける中国語リーディングに関する授業報告」

上田なおみ

1. はじめに

3、4年生を対象とした中国語のリーディングの授業を受け持ち、そのリーディングの授業内容を考えて欲しいとの依頼があった際、神戸学院大学での中国語の授業の中でリーディングの授業をどの様に位置づけようかとされているのかと問い合わせた。すると、「最終目標は中国語を話すようになることであるが、その話すようになるためにはきちんとした文章を読まなければならない。きちんとした文章を読む、そのような授業にしたい。ただし、教材を選ぶ時は漢字のみではなく、ピンイン付きの教材でなければならない」との回答があった。私はその意見になんら反論する余地もないので、即作業に取り掛かった。

まず授業目的は、話すことが最終の目的なのであるからやはり文章は音読できなければならないまいと考え、文章を読解し、その文章を読み・声調共に間違えずに詰まる事なく音読することと決定した。次にテキストを選定した。その選定条件として、文学的・情緒的な文体で書かれたものではなく、文法的に説明が可能で明瞭な文章であり、内容は学生に身

近な題材を取り上げ、350 字程度で書かれているものとし、さらに対話の文章及び練習問題があり、1 年間で 1 冊終わるものとした。そして評価方法についてである。評価の割合は平常点 30%、テスト 70% とし、平常点は会話ではなくきちんとした文章を詰まる事なく読むことを目的としているので、発音テストと称し、半期に 2 回ずつ使用テキストの本文の中から各自で選択させ、朗読を実施し、ピンインの読みに間違いがあるか否か等で採点し、その点数を平常点とした。以下では、以上の条件の下で授業を進めた結果に対する所見を述べていく。

2. 授業の現状について

さて実際の授業の様子に関して述べていく。履修登録者は 5 名であるが、5 名のうちで出席者は 3 名で、その 3 名のうち 2 名は全出席と、熱心な学生に囲まれて授業を進めることとなった。授業は、テキストが 8 課で構成されていたので、2009 年度シラバスに紹介されている様に、3 週間かけて 1 課を進んだ。テキストの“復習”や“ポイント”の説明及び例文の日本語訳に関しては教える側が一方的に講義をするが、“本文”・“対話”・“練習問題”に関しては、次回の授業進行範囲を必ず予告し、予告した範囲を全て予習させた上で“次回”の授業時に指名し学生に担当させ、その箇所を中国語で読み日本語に訳すか、又は、問題に答えさせるという作業を繰り返した。学生が担当した箇所に関しては、文の構造の解読難により、訳に多少の間違いがあり訳せなかったとか、発音に慣れておらず読み方を間違える等と、初級事項の説明をすることもあったが、予告した範囲を授業時間内に終れないということにはなかった。

丁寧にテキストを進めても、時間に余裕が生じたので、話せるようになるためには聴く力も持たなければならないとの考えと、学生から要望もあり、余剰の時間で中国語検定試験対策と称し、リスニングを扱うことにした。このリスニングでは、使用テキストの半分量、180 字程度に相当する文章を扱った。その進行方法は、リスニングで扱う文章の CD を流す前に問題を配布し、その問題より文章の内容を予め推測させ、その後、“文章→問題”の順で CD を 2 回流した。CD を 3 回目流す際には、プリントしたリスニング対象の文章を学生に配布し、その文章を参考にしながら進めた後、解答した。リスニングに関しては、正解率は 60% 程度であったが、単語の定着率が良くなく“意味”よりも“音”で答えを聴き分けているという印象であった。

また定期テストに関しては、テキストのみからの出題であると言い切っていたのも影響したのか、90 点以上としっかり勉強したという印象を受けた。以上で前期を終了した。

次に後期の授業に関して述べていく。授業の進め方は、3 週間かけて 1 課を進み“復習”や“ポイント”の説明及び例文の日本語訳に関しては教える側が一方的に講義をし、“本文”・“対話”・“練習問題”に関しては、次回の授業進行範囲を必ず予告し、予告した範囲を全て予習させた上で“次回”の授業時に指名し学生に担当させ、その担当箇所を中国語で読み、日本語に訳すか、又は、問題に答えさせ、余剰の時間でリスニングを扱う等、前期と同様である。

しかし、学生の出来具合は前期と比べると、担当するテキストの日本語訳に関しては双

方とも修飾語の掛かる位置の取り違えが出る程度で、全く間違えるということはなく、リスニングに関しても180字程度の文章を終了した後、2言の会話に関するリスニングをすると8割以上の正解率と進歩が見られた。ただし、発音に関しては双方に少し違いが生じた。1人はピンインを見て読み方も声調も間違えることが少なくなり、詰まらずゆっくりと読めるようになり進歩が見られたが、もう1人はピンインの読み間違えや声調の取り違えが前期と変わらず、進歩が見られなかったのである。発音の出来具合に個人差が出るのは仕方のないことだと考えても、前期テストの結果からすると、前期に“読み・聴く”の繰り返しを双方とも同じように学習したのだから発音がある程度のレベルにまで達し、もう少し出来具合に差がなくてもよいと考え、各学生に今まで受講した中国語の授業について話を聞いた。

発音に進歩が見られた学生は、「かなり音読させられました」と答えたが、発音の苦手な学生は、「初級の時に“ピンインが読めなくなるのでピンインに振り仮名を打ってはいけません。私の真似をして下さい」と教えられ、音読することも少なく、今だピンインが読めない所が有り、発音することが至極嫌だ」と答えた。読めないのにどの様にして日本語訳をするのかと不思議に感じたので、再び発音の苦手な学生に質問すると、「日本語訳は漢字のみで訳している」という返答であった。発音の良くない箇所及びピンインの読めない箇所は日本語訳の出来具合も良くないので、「今からでも遅くないので、読めないピンインには振り仮名を打ち、その読めないピンインが読めるようになれば振り仮名を打たなければ良い」と指導した。発音の苦手な学生は努力していた。

3. まとめとして

中国語で話せるようになるために中国へ留学する人が多いが、留学に頼らないで話そうになるためには、多くの中国語の文章を読み、多くの中国語を聴き、口にするしか方法はないであろうし、さらに中国語の力を伸ばすには中国語を多く聴き、中国語の文章を多く読むことしか方法はないと常々考えている。

最近我が母校のいわゆる“OB会”に参加する機会があり、その際ある商社を定年退職され中国語が話せる方が、「中国語を上手くなろうとすると大学1年生の時に使用したテキストに戻っている」と話されていたが、リーディングの授業においても、初級時で学習している発音が出来ない箇所は日本語訳も出来ないのも、やはり初級の段階で発音をしっかり身につけておかなければ、後の進歩は難しいと考える。留学せずに中国語を話そうになるには多くの中国語を聴き、多くの中国語の文章を読むという相当な労力が必要であり、時には「中国には方言が多くあり、勉強しても仕方ない」という意見も耳にすることがあるが、話されている言葉の中で、どれが中国語の標準語（普通話）で、どれが中国語の標準語（普通話）でないのか聞き分けられる能力を持つことだけでも充分意義があると思う。リーディングの授業が、その能力を持つための役割を果たせ、異なる分野の方々にも納得される様な授業になることを期待する。

Ⅲ. 中国語会話Ⅰ・Ⅱ（KAC・KPC とも）

于 耀明

1. はじめに

この授業の概要をシラバスから引用する。

講義名 中国語会話Ⅰ・Ⅱ

テキスト 黄 漢青・杉野 元子著『大学生のための現代中国語 12 話・Ⅱ』（白帝社）

教員名 于 耀明

講義の主題と目標

この授業は中級中国語を終了し、更に中国語会話の力をステップアップしようとする 3 年生の諸君のために、用意した課目である。会話の授業に参加することで、これまで身につけた中国語をいっそう磨き、ネイティブの講師と会話をし、意見を述べ合って、確実に中国語のコミュニケーションの力を伸ばしていく。テキストの各課にはさまざまな人物が登場して、家庭、学校、職場などの場所での会話を展開している。会話の文には日常よく使う表現や語彙がたくさん盛り込まれている。単に語学の勉強をするだけではなく、会話を通して現代中国に暮らす人々の考え方や価値観、悩みや本音などを知り、現代中国の文化、社会についての関心と理解も深めていく

2. この授業の成果、問題等

アンケートで見たところ、この科目の受講者の受講動機と目標は非常にはっきりしていて、勉強の意欲も強いことが印象的である。1 年間の勉強を通して、受講者からは「実用的な会話の文句が学習できて良かった」「会話をしっかりやっている」「少人数なので効率良くできた」「中国語を生で聞く機会ができ非常に良かった」「楽しく勉強ができた」「中国についての話も聞けるので楽しむことができた」「会話の練習だけではなく文化についても知ることができた」と評価されている。学生の評価を力に変えて、次年度からでもいっそうの教育効果を求めるべきだと考えている。

この科目は本学の中国語教育としての上級科目なので、受講者の中国語会話の力をどうしても伸ばしてあげなければならないと思い、4 月から気合を入れてやり始めたのだが、選択科目の性質もあったと思うが、勉強が少しきついと感じて辞めた学生がいた。その学生の友達を通して教室に呼び戻す試みをしていたが、実りはなかった。悔やまれる出来事だった。次年度から会話科目の教育にもっと工夫をし、学生が途中であきらめずに勉強を続けていけることにも力を入れていくつもりである。

終わりに

2009 年度、ここで報告したすべてのクラスで履修生は 10 名以下だった。予想していたとはいえ、やはりさびしい結果である。来年度以後もこの状況が続くのだろうか。総合企画会議（2007 年 2 月 10 日開催）了承事項として、開講科目の見直しについては次のよう

に定められている。

・単独開講科目の見直し

単独クラスで開講されている科目において、履修登録確定による2年間の実績履修者数が、2年とも10名以下の場合は、科目特性を考慮の上、統廃合を行うべく教務・入学センター所長と学部長及び機構長で調整する。

この規定によると、2010年の結果次第では上級クラスについて再考が迫られる。

本報告で分かるように、今年は試行錯誤の年であった。そして、担当者はみな真剣にその任に当たってくれた。特に実用中国語では、語学力アップとは異なる意識が必要のため、担当者はさぞやご苦労だったろう。だがたとえ少数とはいえ、多くの学生が落伍するなかで、このクラスのおかげで中国への興味を持ち、語学力を伸ばす学生がいたことは救いである。

ここで述べた3つの授業は、2009年度は3回生のみ対象だが、2010年度は3、4回生の2学年分が対象となる。これだけ意識の高い講師陣に恵まれているのだ。先輩から後輩への口コミによって、履修生の増加が望めるのではないかと期待している。

「学如逆水行舟、不進則退」（学ぶことは逆流で船をこぐようなもの、進まなければ流されてしまう）の言葉どおり、語学力を維持するのはたやすいことではない。初級・中級で身につけた中国語の基礎力を無にしないよう、中国への興味と親近感を与えるきっかけの授業としてこの3科目の授業を維持していきたいと考えている。

論理的思考の構築を目指すテーマ解析展開型学習

宮崎 杏奈^{*}，浅田 麻琴^{*}，日吉 陽子^{*}，神谷 浩平^{*}
日置 和人^{*}，北條 恵子^{*}，岡田 芳男^{*}，川崎 紘一^{*}
北川徳治郎^{*}，佐々木秀明^{*}，谷 昇平^{*}，津田 裕子^{*}
国嶋 崇隆^{**}，横井 利夫^{*}

(2009 年 12 月 24 日受理)

1. はじめに

近年の医療法の改正および医薬分業の進展に伴って、2006 年、医療人としての薬剤師教育を主目的とした薬学教育 6 年制が発足した。新たに開始された薬学教育の本旨は、臨床能力に長けた薬剤師の養成であり、これまでの「物質」対象ではなく「ヒト」対象の薬物治療に重点を置いたものである。すなわち、図 1 に示すように、専門的な薬学知識の修得だけでなく、思考力、問題解決能力やコミュニケーション能力を身につけた人材の育成が要求され、医療人として高い倫理観をあわせもつことが必要となったのである。現在、チーム医療や訪問医療など薬剤師の果たすべき役割と期待は大きく広がっており、そのため、薬系大学は、学生が「薬の専門家」としての自覚を促すようなカリキュラムを採用する事が要求される。GPA (Grade Point Average) が良いだけで、患者ケアが苦手な学生を卒業させるという矛盾がこれまでに生じている事は事実であり、こういった傾向は年々顕著

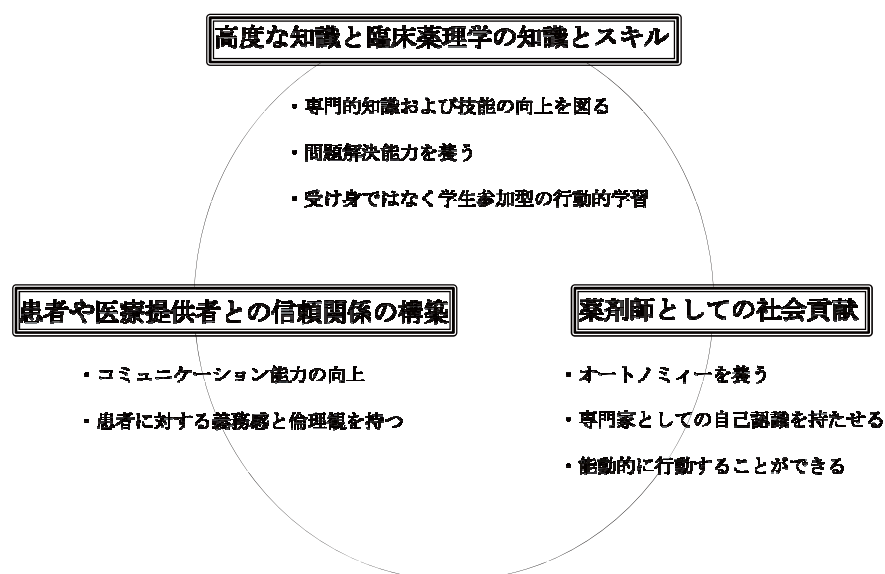


図 1. 求められる薬剤師像

* 神戸学院大学薬学部

** 金沢大学医薬保健研究域薬学系

である。このような事がないように、いろいろな角度から教育内容を検討し、医療人として質の高い薬剤師を育成すべく努力しなくてはならない。

全国の薬系大学では、2002年に提示された「薬学教育モデル・コアカリキュラム」を基に、ヒューマニズムや早期体験学習等、これまでにはない特色ある課題に取り組んでいる。特に、病院や薬局での実務実習に関しては大きな変革を遂げ、5ヶ月にもわたる長期実習を通じて薬剤師の役割を学ぶこととなる。また、臨床分野におけるPBL (Problem-Based Learning) やSGD (Small Group Discussion)などのグループ学習は、学生の主体性、能動的思考力やコミュニケーション能力の育成法として全国的に実施されている。このような教育改革は、臨床系分野に限った事ではない。最近の学生の学力低下は著しく、薬学生でありながら化学に関する知識に乏しい学生が入学している。この深刻な事態に対し、基礎薬系専門科目においても早急な教育改革が必要とされる。アメリカのE. Daleは、一般に認められている望ましい学習のための原則的な特徴を説き、図2に示すような「経験の円錐」

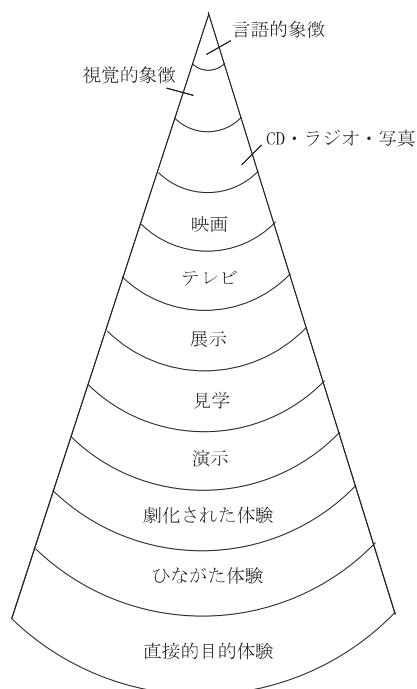


図2. Daleの円錐

で視聴覚的教育を提起している。円錐の上方向は、抽象的な事象、下方向は、具体的な事象を示しており、上程印象が浅く、下程よく覚えているというものである。すなわち人間は、見たり聞いたりするだけでは不十分で、それを実際に体験して初めて理解が深まるといのものであり、その逆も然りである。学生の理解は、受講しただけでは不十分で、実践して初めて身に付くものであろう。また、実践した結果を体系的に理解する事で、その効果は大きくなる。よりよい教育を目指し、本学部分子薬学部門では、2007年度から有機化学演習におけるPBLおよびSGDにおけるプレゼンテーションを3回生の演習実習に導入している。本稿では、その実習方法とそれによってもたらされる効果、および学生の評価について、述べる。

2. 実習計画と方法

有機化学に苦手意識を持つ学生は非常に多く、暗記のみに頼り試験に臨むといった傾向は毎年見られる。その根本的な原因は、概念・定義・ルールをきちんと理解しないで多岐にわたる有機化学の現象と向き合っていることにあると考えられる。そこで、2～3回生の分子薬学部門実習における演習課題は、有機化学の基礎的かつ重要な問題をセットしている。3回生273名を対象とした2008年度前期の分子薬学部門演習実習日程と項目を図3に示した。学生を3グループに分け、3項目を3週間にわたって行う。第1週目と2週目は実験実習、第3週目に演習を行い、最終日にそれらに関連する課題のプレゼンテーション

メチルオレンジの合成	火	合成
	水	緩衝液の性質
	木	SGD 課題配布
医薬品の合成	火	アセト アミ ノフェンの合成
	水	ジベンザルアセト ンの合成
	木	SGD
演習	火	有機化学演習
	水	SGD プレゼンテーション
	木	SGD プレゼンテーション

<有機化学演習>

- ・酸性度、塩基性度
- ・平衡反応式

< SGD プレゼンテーション課題>

- ・芳香族求電子置換反応
- ・求核置換反応
- ・求核付加反応
- ・ジアゾカップリング反応
- ・緩衝液の性質
- ・アルドール縮合と立体異性体

図3．2008 年度 3 回生前期実習日程と項目

ンを課した。

有機化学演習においては、教員主導型 PBL を行った。90 名の学生に対し、上記項目に関する導入講義を行いながら、本学オリジナルの問題を解答させた。進行手順は以下の通りである。

- ① 小テスト・アンケート による意識調査(10 分)
- ② 導入講義(3 時間)：学生間 SGD
- ③ 小テスト・アンケート による意識調査(10 分)

小テストは上記項目に関するもので、酸性度および塩基性度の強弱や平衡反応式の偏りを問うもので、一連性をもった内容となっている。当演習の有効性を検証するため、演習前と後に小テスト およびアンケート を行い、各演習項目における実質的な理解力の向上とそれらに対する学生の意識変化を調査した。また、導入講義中に行う 問題解答は、8 名 1 グループの学生間における SGD 後に、指名形式で行った。当演習には 4 ～ 5 名の教員を配置し、学生の理解不足をフォローする形で指導に当たった。当演習は、いわゆる受け身型の PBL であり、学生が主体性を持って取り組む場面はない。そのため、表面的な理解や興味しか得られず、学生たちの取り組む姿勢にも 偏り が見られる。

続いて、学生主導型 PBL として、SGD プレゼンテーションを行った。4 名 1 グループに対して上記項目に関する課題を 1 つ与え、その解答および考え方についてプレゼンテーションを実施させた。進行手順は以下の通りである。

- ① SGD 課題配布
- ② SGD: 学生が提示するポイント 提起およびストーリー 構築を教員が確認
- ③ プレゼンテーション: 15 分/グループ
- ④ 質疑応答
- ⑤ 相互評価: アンケート 形式

課題の配布から SGD まで 1 週間の猶予を与え、その間、学生が自由に時間を使いながら、情報収集を行う。さらに 1 週間後に、パワーポイントによるプレゼンテーションを行い、質疑応答および各グループの発表を相互評価した。評価は、課題の難易度、プレゼンの見やすさや理解度などについて行い、それに基づき優秀グループを選出の上、学生に結果を公開した。当演習は、ポイント提起、ストーリー構築や進行に至るまで、学生が主体となって PBL を行うため、能動的思考の構築に大変役立つものである。また、自分の意見を相手に正確に伝える、あるいは相手の求めている事を正確に理解する力や、協調性やコミュニケーション力を培うのに最適な内容と考える。調査深度や個々の理解度はグループによって差が生じるが、大きくポイントのずれたものや調査不足なグループに対しては教員がフォローし、教育効果が薄れてしまわないように配慮した。また、当演習の課題は、実習項目に関連するものであり、実習レポートの考察や復習に役立つものである。直前に行った有機化学演習の考え方をを用いて解答を導きだす課題も多いので、断片的となりがちな知識を包括的にとらえ活用していけるようになるというメリットもある。

3. 結果と考察

3-1. 教員主導型 PBL について

小テストの成績推移とアンケート結果を以下に示す(図 4、5)。

図 3 に示した有機化学演習の内容は、3 回生時点で既に授業で習っている上に、ごく基本的なものである事はいふまでもないが、演習前に行った小テスト結果は散々なものであった。これは、有機化学を論理的に考えるのではなく単に暗記している学生が多いという実態を裏付けるものであった。同時に、演習前に行ったアンケートにおいて、これらの項目を「あまり理解していない」と答えた学生は 70% 以上で、ほとんどの学生が理解不足である事を認識している。しかし意外にも、有機化学に興味を持っている学生は 60% 以上存しており、理解できるようになりたいという意欲と期待を抱いていることが伺い知れよう。導入講義では、本学オリジナルの問題を用いているため、代表的なものにとどまらず例外的な問題なども網羅しており、各項目における「原理と考え方」に重点をおいた指導を行った。その結果、演習後の小テストは、満点をとるものが過半数を超え、6 割以上の正解率をとるものが 90% 以上という結果であった。また同時に、興味や理解に関しても大きな飛躍を示し、95% の学生が当演習を意義あるものとして捉えた。事実、ほと

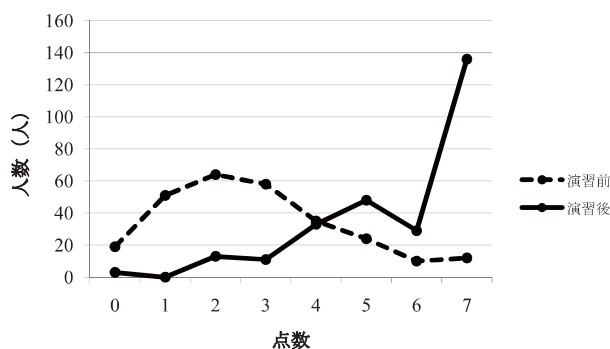


図4．小テスト 成績推移

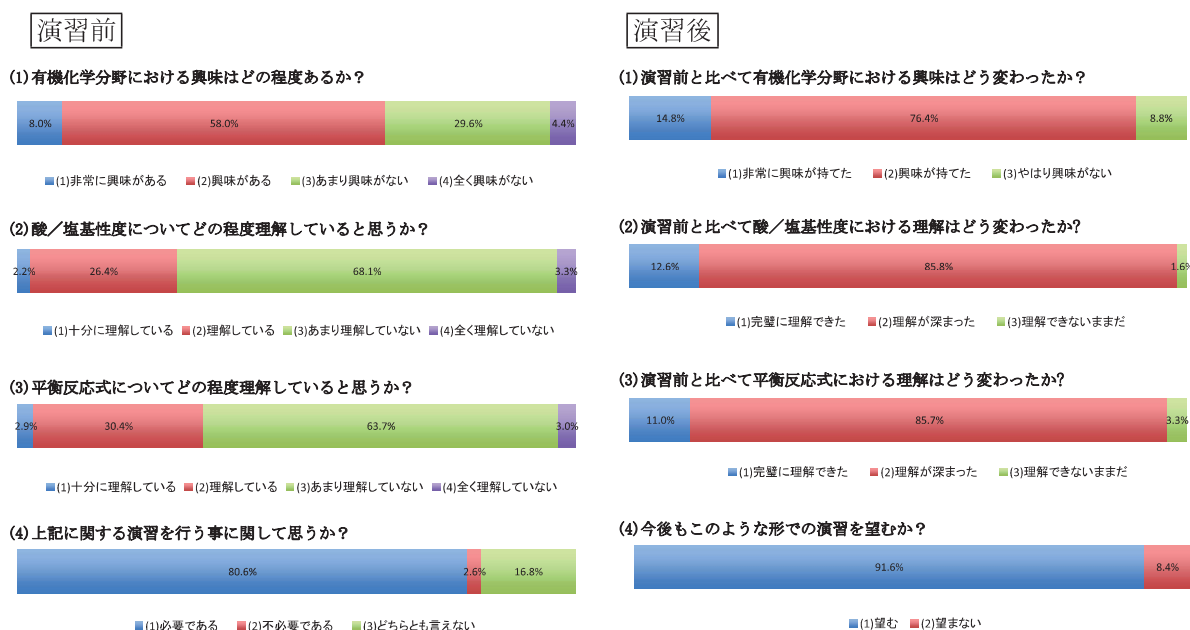


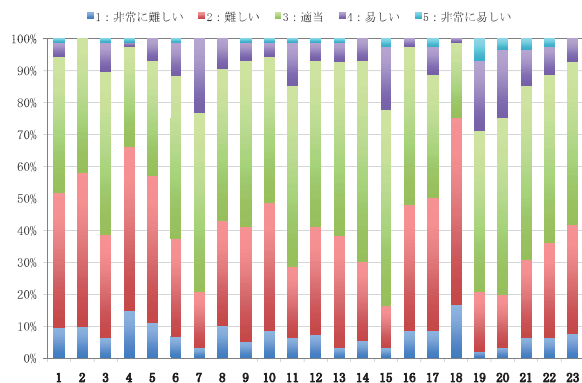
図5．演習前後における学生の意識変化

多くの学生が当演習の必要性を感じており、今回行った演習スタイルは、学生の意欲と理解を向上させるのに非常に有効であった。

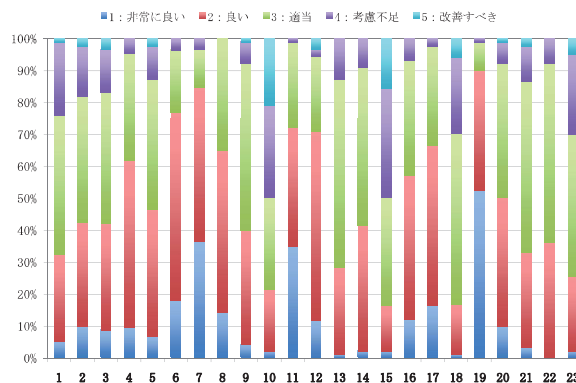
3-2. 学生主導型 PBL について

本来、SGDとは、1人の教員と少人数の学生からなり、目標と計画を持ち、相互の関わり合いと討議、フィードバックを主とし、集団力学による相乗的学習効果が期待される学習法である。教員との討議や質疑応答よりも、学習者同士の討議に重点をおくところが、この学習法の本質である。先述したように、学生の主体性や問題解決能力を養うのには有効な方法であるが、学生にとって苦手意識の強い有機化学分野にこの手法を取り入れる事によって、もたらされる学習効果は非常に大きいと言える。図6に示すのは、全3回生を3グループに分けたうちの1グループを対象に行った時のアンケート結果である。さらにそのうち、2班(4名)を1グループとし、全23グループがそれぞれの課題を発表、相互評価した。

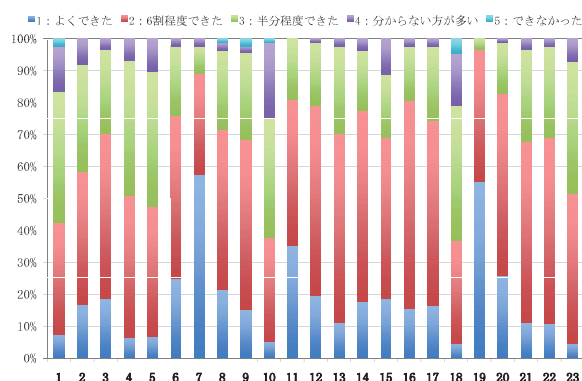
(1)発表者の課題の難易度



(2)プレゼンテーションの方法（展開・わかりやすさ・見やすさ等）



(3)プレゼン内容の理解度



(4)課題は自身にとって有意義であったか？

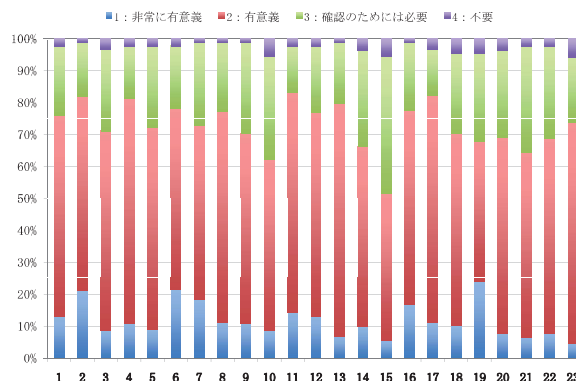


図6. プレゼンテーションにおける相互評価結果

課題の難易度からもわかるように、課題は実習や演習で学んだ事と関連していたという事もあって、学生にとっては親しみやすいものであっただろう。しかし、当演習の課題は、自分の基礎知識とそれらとを統括する事によって得られる一歩進んだ理解がなければ中途半端なものに終わってしまう。

課題の一例として、「ジベンザルアセトンの合成では、塩基によるカルボニル基の α 位水素の引き抜きがおこり、中間体エノラートアニオンを経由して反応が進行する。では、カルボン酸化合物、酢酸エチル、マロン酸ジエステル、酢酸アミドのエノラートアニオン生成における反応性、すなわち、 α 位水素の引き抜かれやすさについて比較しなさい。」がある。この課題に取り組むにあたり、(1)ジベンザルアセトン合成の反応機構、(2)各化合物の酸性度にポイントを置くべきであろう。どちらも既に実習や演習で学んだ事であり、これらを正しく理解し、かつ関連性に気づくグループは、プレゼン内容も要点をおさえた優れたものに仕上がっていた。そのようなグループはプレゼン能力に長けており、論理だった筋道を立てながら、自分たちの言いたい事を明確に伝えるコミュニケーション力を持ち合わせていた。プレゼンの方法が学生の理解度に直結するという事は、上記の結果からも明白である。しかし、正確な理解や知識だけが、いいプレゼンを生む訳ではない。学生個人の能力はさまざまで、自分がわかっている部分を必ずしも全員が理解している訳ではない。全員にわかりやすく伝えるにはどうすればよいか、すなわち相手のニーズに目を向け、その対応策を試行錯誤するという所に、重要性を感じ取ってほしい。

また、よりよいプレゼンには、チームワークも不可欠である。互いの意見を尊重しあい

ながら自由に発言・討論できる環境であれば、それぞれの能力が最大限に活かされ、最大の成果を得る事が可能であろう。一方、それぞれが自己主張し合ったり、互いを否定し合ったりするような関係では、チームとしての目的遂行は困難を極める。その結果、特定の人物の意見に偏ったプレゼン内容となり、間違いや新しい発見も得られないだろう。これは、チーム医療を敷く現場では致命的な問題である。自分の能力の限界を知り、必要に応じて他者に援助を求めることで、チームとしてよりレベルアップした知識を修得することができるのだ。このような切磋琢磨は、何もチーム内に限った事ではない。当演習で設けている質疑応答では、1班1問の質問を義務づけている。その内容は、単なる疑問だけにとどまらず、間違いを指摘するなどの対立意見も見られた。それに対し、的確に対応する者もいれば質問の意味さえつかめない者もいたが、課題に対し真剣に取り組み知識を深めただけあって、自信を持って自分の考えを述べ、質問者と討論する場面が数多く見られた。

実習レポートや教員主導型PBLだけでは、学生が自分の理解を再確認する機会がなく、せっかく得られた知識も時間とともに風化してしまう。今回のような実習スタイルは、学生の理解力向上は言うまでもなく、有機化学に対する興味とやる気を起こさせる上で、大変有効な手段であり、課題を有意義と捉える学生がほとんどであった。

4. まとめ

今回の実習を通して、学生の理解力向上はもとより、有機化学に対する興味と意欲的な取り組みが見られた。特に学生主導型PBLにおいては、さまざまな発表の工夫や活発な討論が見られ、論理的思考の向上、自意識や協調性の醸成に大変有効な結果を示した。

学生の理解不足や考え方は、教員目線では決して気づくことのない部分も多々あると思われる。そのため、当実習は、学生側のメリットだけではなく、我々教員の指導の仕方や授業法における対策などを発見する事にもつながった。もちろん、授業では、進行具合、時間や人数などの要因によって、学生全体の理解を底上げする事は不可能であるが、学生の目線にあわせた指導法というのは、どのようなものであるか？の一端が垣間見られると思われる。

受動型学習から能動型学習への切り替えを目指す チューター型演習の導入とその展開

浅田 麻琴^{*}, 宮崎 杏奈^{*}, 日吉 陽子^{*}, 神谷 浩平^{*}
日置 和人^{*}, 北條 恵子^{*}, 岡田 芳男^{*}, 川崎 紘一^{*}
北川徳治郎^{*}, 佐々木秀明^{*}, 谷 昇平^{*}, 津田 裕子^{*}
国嶋 崇隆^{**}, 横井 利夫^{*}

(2009 年 12 月 24 日受理)

1. はじめに

平成 18 年度から 6 年制薬学教育がスタートし、全国の薬系大学で「薬学教育モデル・コアカリキュラム」を基にした新カリキュラムによる新しい教育が始まった。近年、教えられた知識をそのまま記憶する受動型学習の学生が増える一方、薬剤師の職能には物事を自主的に考え判断出来ることが求められ、能動型学習の重要性は高い。このため、新しいカリキュラムではこれまでの講義中心の方略に対し、問題解決型学習として演習・SGD (Small Group Discussion) などの学習方法が積極的に取り入れられている。

講義型ではないグループ討論型学習によって、複数の学生が同じ目標に向かって討論し知識の授受及び共有を行い、一人で行う学習よりも多くのことを学ぶことが出来る。また、コミュニケーション能力の低下が最近問題となっているが、この学習方法はその改善に少しでも役立つものと考えられる。

本学分子薬学部門では平成 19 年度より 2・3 回生を対象に有機化学の理解を目指したプログラムを開始した。このプログラムでは PBL (Problem-Based Learning) の達成を掲げ、分子薬学部門教員による問題解決型の演習実習を実施している。今回、演習実施前後における知識及び意識の変化を検証すべくアンケート・小テストを実施したので、その分析結果について報告する。

2. 演習実施方法

対象は 2 回生全員とし、1 学年を 3 グループ (α , β , γ) に分け、各グループ約 80 名で「演習実習Ⅱ A」および「演習実習Ⅱ B」の授業時間を利用し演習を行う。項目については以下の通り行い、演習問題については分子薬学部門教員が独自に作成したものを扱い、3 グループの問題はそれぞれ異なったものを使用した。教員数は 1 グループ (80 名) に対し 4、

* 神戸学院大学薬学部

** 金沢大学医薬保健研究域薬学系

5名配置し、SGD時には積極的にスタッフが学生に声をかけ理解の向上を目指した。なお、演習期間については、各グループ5日間、1日につき3-4時間程度実施した。

前期3項目（器具の取扱・溶媒、混成軌道、ルイス構造・命名法）

後期2項目（形式電荷・共鳴構造式、置換基効果・共役酸／共役塩基）

前期（下記項目を3グループ実施）

		項 目	内 容
1W	火	実習	単位操作
	水		
	木	演習 1	器具の取扱い、溶媒
2W	火	実習	混合物の分離
	水		
	木	演習 2	結合の分極、混成軌道
3W	火	実習	蒸留（常圧蒸留、減圧蒸留）
	水		
	木	演習 3	ルイス構造式、命名法

後期（下記項目を3グループ実施）

		項 目	内 容
1W	火	実習	分子模型 I
	水		
	木	演習 4-1	電荷の偏りと反応性（形式電荷、共鳴構造式）
2W	火	実習	分子模型 II
	水		
	木	演習 4-2	置換基効果、共役酸・共役塩基
3W	火	実習	アセチルコリンの合成及びプレゼンテーション
	水		

図 1. 2008 年度実習演習スケジュール（分子薬学部門）

具体的な流れ

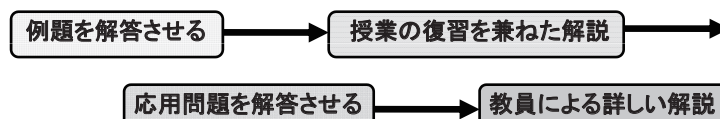
・演習前小テスト

授業で習っている範囲で現在どの程度理解しているかを自分自身で把握させる為、演習内容に則した問題を 3-5 問（記述式の問題も含む）解答させた。この小テストについては事前に告知することなく抜き打ちで行った。なお、この問題の解説は行わない。

・演習

1 回の演習時間を 3 ～ 4 時間とし、問題数は B4 表裏 1 枚程度とした。

演習の流れ



まずは例題（基本的な問題）を解答させ、授業の復習を兼ねた解説を行った。ここでは成績不振者が今更教員に聞き難い基礎的な部分から解説することで学力の底上げが期待でき、更に応用問題を解答させる前に知識レベルをある程度統一することが可能である。応用問題についてはやや難易度を上げ、少人数（8名程度）でディスカッションさせた。これにより、成績優秀者は自分の理解だけでなく相手に理解させる能力を発揮させることが可能である。話し合いがうまく出来ないグループに対してはスタッフが手助けをしてコミュニケーションの向上を図った。十分な解答時間を与えたのち、無作為に学生を指名し口頭若しくは筆記で解答させ、その後 Power Point で教員による詳細な解説を行った。この演習方法により、暗記する学習ではなく理論的に答えを導くことが出来ると考えられる。また、次の単元に繋がるような部分まで解説することで各々の演習の重要性を認識させる。

・演習後小テスト

演習前小テストと全く同じ問題を演習後にも解答させた。これにより、演習前と比べ自分自身でどの程度理解が深まったかを実感させる。

・期末演習テスト

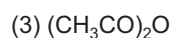
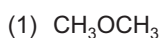
期末に演習で行った全項目を範囲とした「演習テスト」を学年単位で実施した。問題数は50問程度、試験時間は1時間とした。本試験は8割以上正答した者を合格者として、不合格者には追試を行った。追試の内容は本試験と同等の問題とし、6割以上正答した者を合格とした。この追試においても不合格となった者（4-6名程度）については別途指導用の問題を作成し、個別指導を行った。

問題及び解説の一例

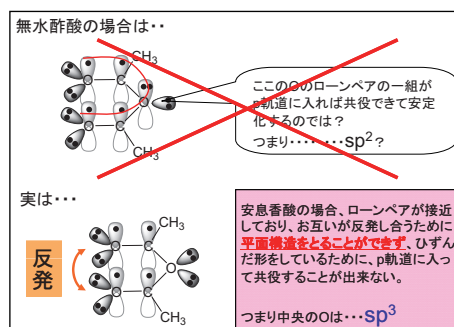
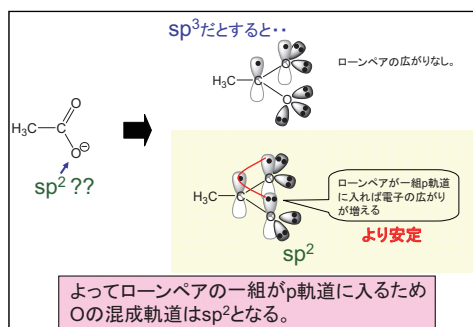
問題の一例

問題1

以下の物質について、原子の相対位置や結合角が分かるように構造式を図示（非共有電子対も記入）し、水素以外の原子の混成軌道の種類を示しなさい。



解説PowerPointの一例



演習用教材（基本操作）一例

掲載項目（動画での操作説明）

- ・ ひだろ紙の折り方
- ・ 再結晶
- ・ 熱しろ過
- ・ 吸引ろ過 など

観たい項目をクリックすると動画がスタートする

実際はここに詳しい動画が映し出される

更に注意すべきポイントを下に記載している

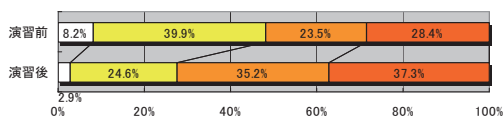
演習項目「器具の取扱い」で使用。合成実習における基本的操作を動画で確認できるため予習・復習にも用いられ高い評価を得ている。
(神戸学院大学薬学部HPIにup)

3. 演習テスト（小テスト及び期末テスト）の結果

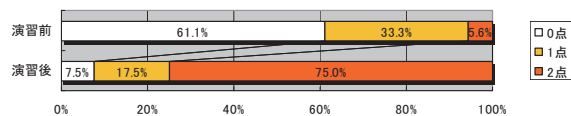
・小テストの結果

演習前、演習後に実施した小テストにおける点数の推移をグラフに示した。

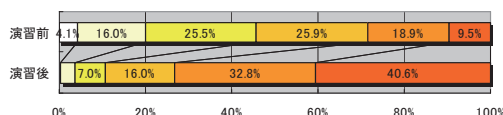
混成軌道(3点満点)



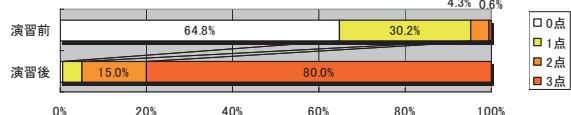
置換基効果(2点満点)



形式電荷(5点満点)



共役酸・共役塩基(3点満点)



共鳴構造式(2点満点)

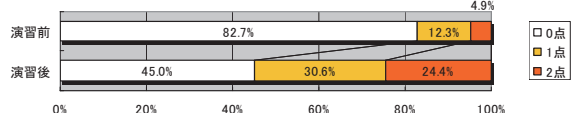


図2. 演習実施前後における小テストの結果

全ての項目において理解の向上が見られた。ただし共鳴構造式については、演習実施後電子の動かし方は理解が深まったようだが、未だ電荷や巻き矢印の記載漏れが見られ、完全解答に至る学生は少数であった。しかし、事前に小テストを行うことで学生は自分がどの分野を理解していないのか自覚することが可能となり、同じ問題を演習前と演習後に解答することで自分自身の理解が向上したことを肌で感じる事が出来、演習をより積極的に行えるようになったのではないかと考えられる。学生本人も教員側も演習実施前後における知識の変化を実感できる結果が得られた。

・ 期末演習テストの結果

3グループ(α 、 β 、 γ)の演習終了後、「演習テスト」を実施した。

問題数： 50問程度(100点満点)
形式： 定期テストと同様(試験時間1時間)
解答： 全てマーク式



8割正答を合格とし、不合格者には同程度の問題で追試を行った。

合格者 (カッコ内は合格率)	2007前期	183名/274名(66%)	後期	211名/271名(77%)
	2008前期	171名/243名(70%)	後期	170名/241名(70%)



6割正答を合格とし、不合格者は別途指導用の問題を作成し
個別指導を行った。(2007年度)

合格者 (カッコ内は合格率)	2007前期	87名/ 91名(95%)	後期	54名/ 60名(90%)
	2008前期	69名/ 72名(95%)	後期	67名/ 71名(94%)

当初、演習テストを実施することを嫌がった学生も見られたが、「演習テストを行うのは演習の理解を図るのに役立つか」とのアンケートでの問いに90%弱の学生が「役立つと思う」と答え、演習テストを実施することで学生は自主復習を積極的に行う傾向にあるため、学生自身も演習テストの重要性、必要性を感じていることが分かった。

また、追試不合格者の個別指導については、演習中にスタッフに積極的に声をかけられない学生や今更初歩的な質問を聞けないと考える学生が見受けられたが、このような学生にとっては、遠慮せずに聞くことができ、底上げに役立ったのではないかと考えられる。ただ、この個別指導はスタッフの大きな労力を必要とし、また限られた学生にのみ手厚く指導することとなる為若干の疑問が残る。

4. アンケートの実施

学生の理解向上、演習に対する意識について検証すべくアンケートを実施した。記名については自由としたが、提出は強制とした。

5. アンケートの結果

・演習の効果

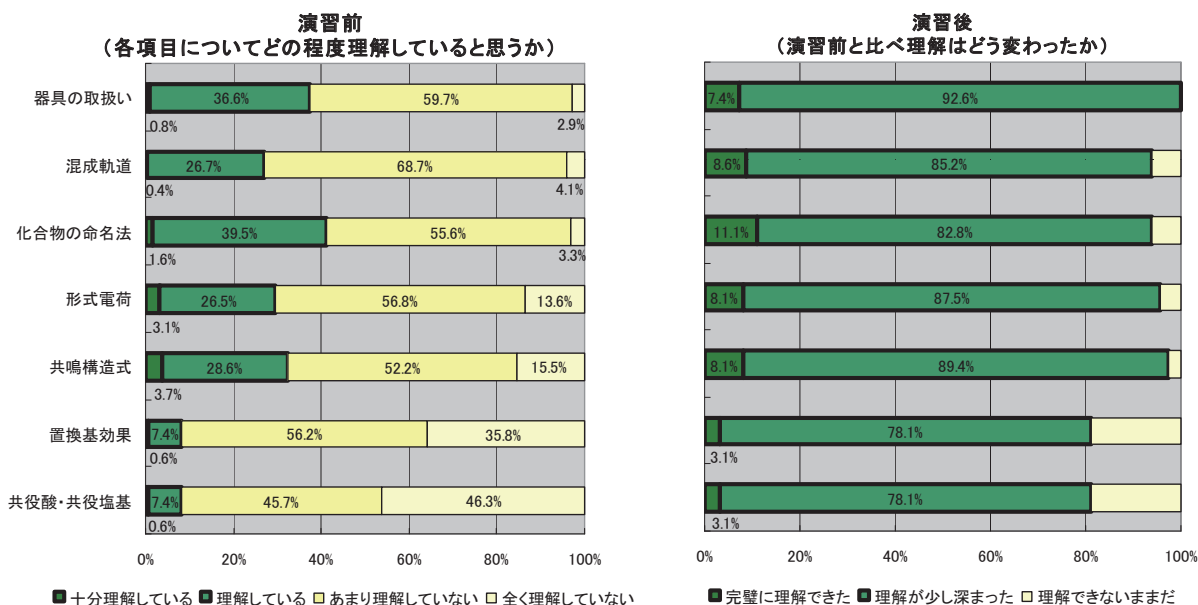


図3. 演習における理解度の自己評価

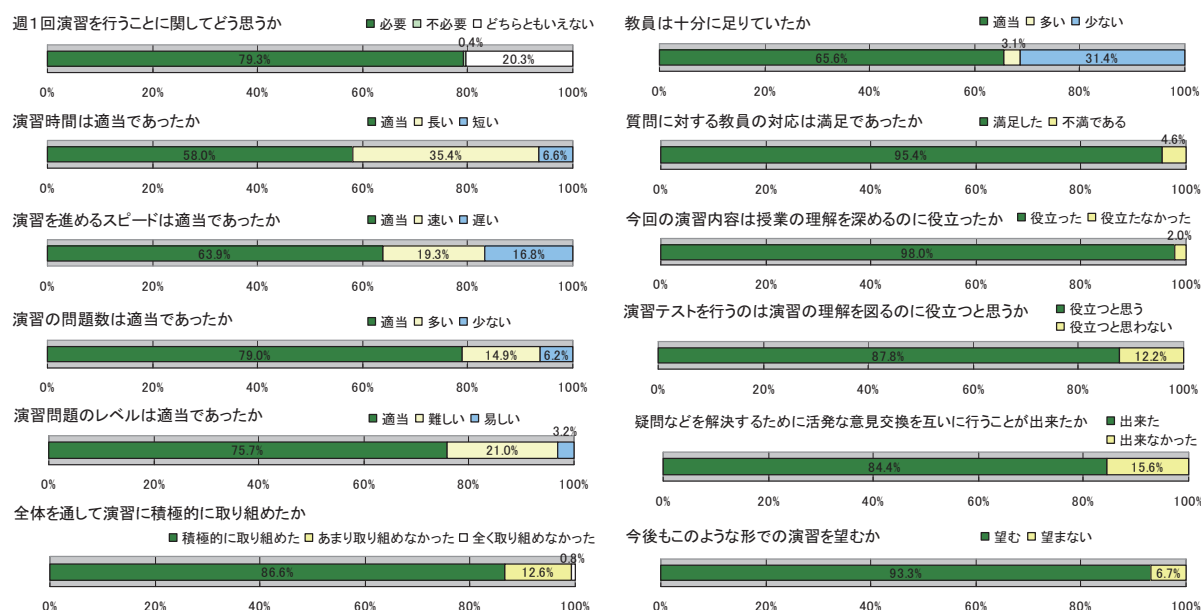


図4. 演習に対する評価

有機化学演習を行うことにより本分野への興味が深まり、演習を行うことを有意義であると感じる学生が多数であることがわかった。また、限られた授業時間内ではなかなか詳細に説明できない部分を演習で補うことにより、演習が授業の内容を理解する上で役に立ったと感じる学生も多数であった。一方で「教員数は十分に足りていたか」との問いに3割超の学生が「少ない」と答え、質問する意欲がありながら質問をするタイミングがなかなか得られなかった学生がいたこともわかり、少人数演習における今後の課題となった。

6. 考察

今回の演習内容は PBL 学習として十分と言える内容ではなかった。しかし、3 回生実習で実施している PBL に重点をおいたプレゼンテーションを円滑に行うためにも今回の基礎知識向上、コミュニケーション能力向上を目指した演習方法は有意義であったと考えられる。「有機化学は暗記の科目だと思っていたが、そうでないことがわかった」「授業でわからなかった細かいことがわかった」など、学生自身も理解の向上を認識できたようである。演習中、「自分自身が理解出来ていても、相手に理解させることは難しい」と伝えようと、近くに座る友人と積極的に教え合う姿を確認することも出来た。将来、薬剤師として患者にいかに分かり易く伝えるか、いかに患者の立場に立って物事を考えることができるかは非常に重要な能力であり、今回このような演習方法は学生のそのような意識を向上させる上でも非常に重要であったと考える。

今回の演習では残念ながら、質問をしたくてもスタッフが捕まらなかったという意見が得られ、アンケートでも 3 割強の学生が「少ない」と回答していることから、スタッフの割合を少しでも上げることができれば更に有意義なものとなるだろう。また、授業との関連性も現段階では時期にずれが生じており、いかに授業と並行して行えるかが今後の課題である。

PBL 学習は学習意欲を更に高める効果をもたらし、低学年で習得しておく必要がある。教員の解答を待つのではなく SGD で討論し合い、解答を導き、発表する今回の演習方法は、思考する能力に加えコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力を向上させる上でも非常に重要であり、今後更に 2 回生実習でもプレゼンテーションの機会を増やしていく必要があると考えられる。学力の低下が否定できない現状において、いかに低学力の学生の理解を向上させるかは大きな課題であり、このような演習の重要性は今後更に高まると考えられる。

薬学部初年次教育の一環としての演習実習Ⅰ

内海 美保, 前田 光子, 山岡由美子

(2010 年 1 月 16 日受理)

1. はじめに

大学全入時代を迎え、大学に入学してくる学生の質の変化が問題となってきた。米国でも 1990 年代に「リテンション率」(学業継続率)の維持向上に対する初年次教育の重要性が指摘され、学力・意欲・ニーズの多様性への対応が図られた。わが国でも「学士課程教育」の入り口としての重要性が注目され、2008 年度文部科学省「大学における教育内容等の改革状況について」では、初年次教育を導入している大学は調査対象 710 校のうち 71% となっている。

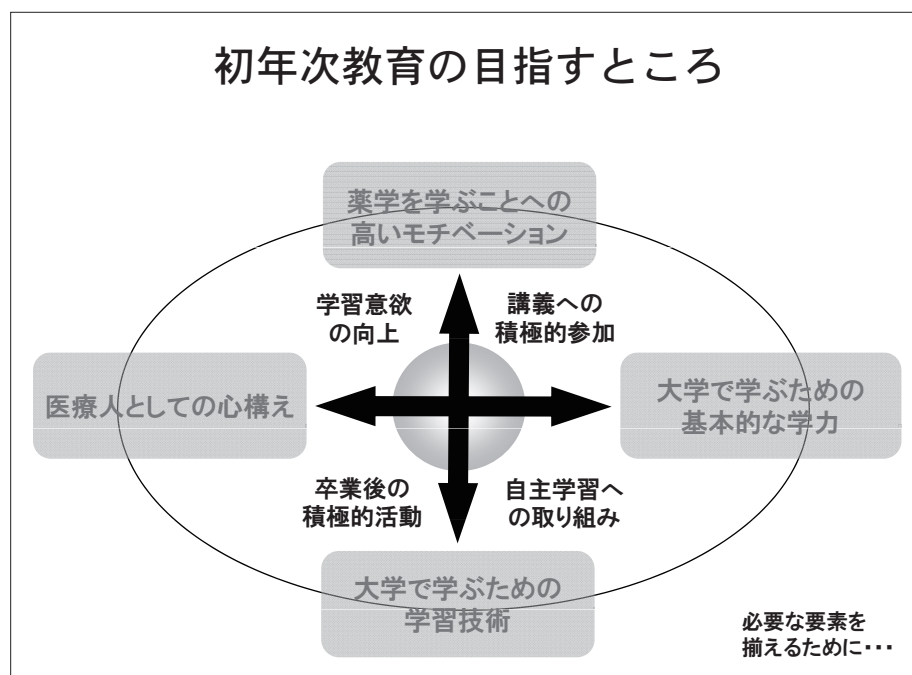
初年次教育は「新入生の高校から大学への円滑な移行、大学生活への適応と成功を促進するためにつくられた教育プログラムの総称」とされている。2008 年に大学教育学会が行ったワークショップでは、効果的な初年次教育の取り組みとして 8 つのカテゴリーがあげられている。一般的によく行われているものは、スタディスキル、スチューデントスキル、専門教育への導入、キャリアデザインなどである。

薬学部教育が 6 年制となったこと、薬科系大学が新設されて入学してくる学生の多様性が予想されていること、薬学部 2 年次生以上がポートアイランドに移転して 1 年次生のみが有瀬キャンパスに残されたことなどから、薬学部の初年次教育を 2006 年度より再構築し、実践してきたので、そのなかの演習実習Ⅰについて報告したい。

2. 薬学部の初年次教育のめざすところとカリキュラムの構成

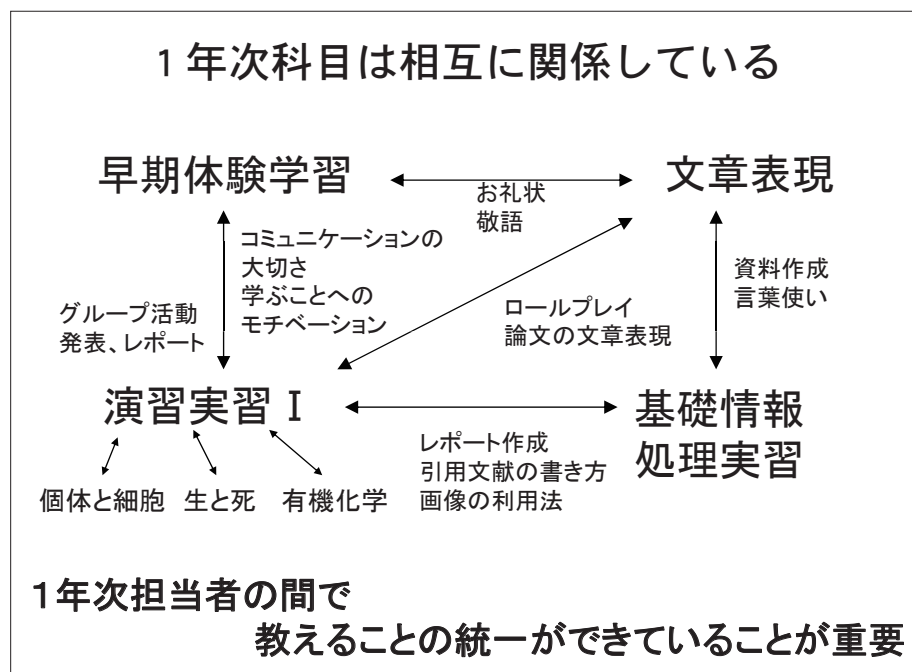
薬学部に入學してきた学生に対して行うべき初年次教育は、初年次教育の本来の目的である新入生の大学生活への円滑な移行であることは変わらない。大学で学ぶために必要な学習スキル(資料の探し方、図書館の使い方、レポートの書き方、発表のしかたなど)、大学生として必要なスキル(大学での履修のしかた、授業の受け方、試験の受け方など)パソコンスキル、文章表現法などが挙げられる。しかしそれだけでなく、6 年制の薬学教育では「医療人教育」を行うことが求められる。「医療人としての心構え」を初年次から徐々に身につけていくための教育も行わなければならない。図 1 に初年次教育の目指すところをまとめた。

図 1



そのために、薬学部1年次生には、薬学部専門科目として「早期体験学習」（2単位）、「演習実習ⅠA」（2単位）、「演習実習ⅠB」（2単位）、「薬学への招待」（2単位）が、共通教育科目として「文章表現Ⅰ」（2単位）、「文章表現Ⅱ」（2単位）、「基礎情報処理実習Ⅰ」（1単位）、「基礎情報処理実習Ⅱ」（1単位）が開講されている。このうち、「早期体験学習」では、オリエンテーション週で大学生として必要なスキル（スチューデントスキル）について学ぶとともに、薬学生として学習に対するモチベーションを高めるために卒業生の活躍する現場などを体験する科目である。「薬学への招待」は講義科目であるが、薬の専門家として必要な基本姿勢を身につけるために、医療・社会における薬学の役割・薬剤師の使命を知ること为目标としている。これら2つの科目は、学びへの意欲を育み、“将来の自分”について考えるための科目である。文章表現と基礎情報処理実習は共通教育科目ではあるが、薬学部教員と担当者がともに教育内容を検討し、薬剤師教育あるいは薬学教育に必要な内容・教材を導入している。文章表現の教育目標は、患者接遇と他の医療スタッフとの相互理解を適切に行うことのできるコミュニケーションの基礎となる日本語力の育成であり、ロールプレイや疑義照会など現場に対応した教材も取り入れている。基礎情報処理実習の目標は、ネットワーク利用におけるモラルとマナーを修得し、コミュニケーション能力・表現力を向上させることであり、個人情報尊重や化学構造式の作成など薬学固有の内容も盛り込んでいる。これらの科目と連携をとりながら行っているのが演習実習である。科目間の連携について図2に示す。

図 2



3. 演習実習 I の教育内容

演習実習の一般目標は「薬学部における 6 年間の学習を実りあるものとするために、薬学部で学ぶ心構えと基本的な技術を身につける」ことである。そのために、「小グループ討論やディベートなどの演習」を通じて、医療人として考えて欲しいこと、大学で守らねばならないルール、自ら学ぶ姿勢、周りの人々への思いやりなどを学び、「基本的な実験や体験」を通じて、実験技術の修得、科学的に考える力の養成、的確なレポートの方法、プレゼンテーションなどを学ぶという 2 つの大きな柱を立てている。1 年次生を 3 クラスに分け、火曜日、水曜日、木曜日のいずれかの曜日の 4,5 限目に実施している。1 つのクラスはさらに 12 の小グループに分けられ、テーマによっては 6 グループが同一テーマを扱うようにローテーションを組んでいる。2008 年度までは基本的に 6 グループあたり 1 教員が担当した。2008 年度の演習項目と内容を表 1 にまとめる。到達目標は表 2 にまとめる。また、それぞれの項目で身につくことを期待しているスキルなどを図 3 にまとめる。

表 1. 演習実習 I の項目と内容

前後期	週	タイトル	演習内容
前 期	第 1 週	図書館と情報収集	図書館ツアー・レポートを書くときの情報収集のしかた実際に 800 字程度のレポートを作成
	第 2 週	植物細胞の観察	顕微鏡の使い方・ニンニクの根端分裂組織の体細胞分裂を観察
	第 3 週	風邪薬の調査	市販の風邪薬を用いて、局方や添付文書を使って一般名、化学式、保存法、薬効、副作用などを調査
	第 4 週	風邪薬の選択	自分達の調べた風邪薬の中から症例に合った風邪薬を選択するグループ討論・来局者対応のロールプレイ
	第 5 週	動物細胞の観察	顕微鏡で鶏肉の軟骨組織、硬骨組織、及び筋組織を観察
	第 6 週	薬局での DI の調査	薬局における患者さんからの質問の症例について調査
	第 7 週	薬局の DI 症例への対応	前週に調べた症例について患者対応を小グループ討論・来局者対応のロールプレイ
	第 8 週	薬草園見学	薬草園にある生薬及びその原植物について調査・薬草園で植物の観察
	第 9 週	不自由体験	キャンパス内を車椅子で移動する体験・問題点や改良点についてグループ討論
後 期	第 1 週	脳死と臓器移植調査	脳死や臓器移植について各自で調査
	第 2 週	臓器移植に対する賛否	母親の臓器移植に賛成か反対かグループ討論・賛成反対にわかれてディベート
	第 3 週	DNA の抽出	タマネギおよび鶏レバーから DNA を抽出・観察
	第 4 週	薬剤師の禁煙活動	兵庫県薬剤師会より講師を招き、薬剤師の禁煙活動について講演・その後グループ討論・禁煙指導のロールプレイ
	第 5 週	分子モデルの扱い	CPK 型分子モデルで有機化合物を作成するための基本的な扱い方の練習
	第 6 週	医薬品の分子モデル作成	CPK 型分子モデルを使ってグループで医薬品分子を作成・作成したモデルについてグループで発表
	第 7 週	誕生に関する問題の調査	誕生に関する倫理的問題をグループごとに調査・発表用資料を作成
	第 8 週	出生前診断に対する賛否	前回調査のグループ発表・遺伝的問題をもつ子供が生まれる可能性がある場合の出生前診断の可否のグループ討論
	第 9 週	薬害についての調査	代表的な薬害についてその社会的背景等を調査してグループごとに発表
	第 10 週	薬害被害者の講演	薬害被害者の方の講演・私たちに何ができるかについてグループ討論

表 2. 演習実習の到達目標

演習実習 I A 到達目標	
A1	図書館を利用できる
A2	レポートの書き方の留意点を説明できる
A3	資料としてインターネットを利用するときの留意点を説明できる
A4	顕微鏡で植物細胞を観察できる
A5	核分裂・細胞質分裂について説明できる
A6	薬とは何かを概説できる
A7	身近な医薬品について薬局方などを用いて調べることができる
A8	顕微鏡で動物細胞を観察できる
A9	軟骨組織・硬骨組織・筋組織・神経細胞・小腸上皮組織の構造の特徴と働きについて簡単に説明できる
A10	医療と薬剤師のかかわりについて考えを述べる
A11	代表的な薬用植物のひとつについて形態を観察する
A12	代表的な薬用植物のひとつについて学名・薬用部位・薬効・含有される薬効成分について説明できる
A13	不自由体験を通して患者の気持ちについて討議する
A14	保健・福祉の重要性について考えを述べる
A15	患者の気持ちに配慮する
演習実習 I B 到達目標	
B1	死にかかわる倫理的問題の概略と問題点を説明できる
B2	人の誕生、成長、加齢、死の意味を考察し、討議する
B3	遺伝と DNA について概説できる
B4	軌道の混成と分子の構造について、モデルを用いて説明できる
B5	身近な医薬品の分子モデルを作ることにより、医薬品の分子式と分子構造の関係を理解し、薬学における有機化学の必要性について概説できる
B6	誕生にかかわる倫理的問題の概略と問題点を説明できる
B7	人の誕生、成長、加齢、死の意味を考察し、討議する
B8	薬害について具体例を上げ、その背景を概説できる

図3 演習項目と身につくことを期待するスキル

	スタディスキル							医療人教育					教科に関する関心
	資料の探し方	レポート作成	グループ活動	プレゼンテーション	ディベート	ロールプレイ	基礎技術	生命の尊さ	社会のニーズ	コミュニケーション力	モチベーション	PBL	
薬局見学			○	○					○		○		
図書館とレポート作成	○	○											
植物細胞		○					○						○
風邪薬	○		○	○		○			○	○	○	○	○
動物細胞		○					○						○
薬剤師の仕事	○		○	○		○			○	○	○	○	○
薬草園	○	○											○
不自由体験			○	○				○		○			
救命救急			○				○	○	○		○		○
脳死と移植	○		○		○			○		○		○	○
DNA の抽出		○					○						○
分子モデル	○	○	○	○							○		○
禁煙活動			○	○		○			○	○	○		
出生前診断	○		○	○				○		○		○	○
薬害	○		○	○				○	○		○		○

4. 演習実習 I の活動例

演習実習ではグループ活動を中心としたプログラムが比較的多い。その実施方法について例を挙げて説明する。

「風邪薬について調べよう」（前期第3週・第4週）

1. 1週目に、ひとりずつ異なる市販の風邪薬の説明書（添付文書）を受け取り、それぞれの風邪薬に含まれている成分について調査する。調査項目は、一般名、英名、IUPAC 名、組成式、構造式、性状、貯法、適応、重大な副作用などである。また、説明書にある注意事項がどの成分が含まれているために記載されているかも考える。
2. 2週目には、それぞれの調べた市販の風邪薬についてグループ内で発表する。
3. その後、各グループに割り当てられた症例に対して最も適切な風邪薬はどれかについて討論する。症例はたとえば「症例 男子大学生 F さん（19 歳） F さんは虫歯のため現在歯科医院へ通院中です。昨日より風邪っぽく頭痛がする上に、歯の痛みが強いとのことで、これらの症状を緩和するために薬を求めて薬局に来ました。」というようなもので、全部で6例ある。グループの意見をまとめて代表者が発表する。
4. この患者さんへの対応を代表者が薬剤師になったつもりでロールプレイを行う。患者役は教員である。

調査はパソコン室で行い、厚生労働省の第15改正薬局方や医薬品医療機器総合機構の医薬品情報を中心に利用する。学生は調査票を用いて必要な情報を記入していく。

小グループ討論では一般に各グループにチューターをつけるが、ここでは教員が複数のグループを巡回し、議論がうまく行かない場合には介入をする形式をとっている。無理に形式にこだわらなくても、グループ討論は活発に進み、グループの結論を出すことができる。発表原稿はA4の用紙にサインペンなどでまとめ、実物投影機を使用してプレゼンテーションを行う。この形式であればパソコン室を使う必要がなく短時間で発表原稿をまとめることができ、また、一般の教室でも発表会は可能である。

小グループ討論と発表に関しては、自己評価表を用いて評価を行う。

ロールプレイは、4年次になればOSCEが行われることも伝えつつ、1年次ではできる範囲でよいとして、コミュニケーション力や正しい情報の伝達が重要であることの理解を求めている。

実習後の学生のアンケートでは「医薬品の情報を理解できるようにするためにまずは薬についてしっかり理解しないといけないと思う。そのためには日頃の授業をちゃんと聞き基礎を固める必要がある。また、薬について理解するためには本などを読んで理解する方法もあるが、薬に触れながら専門知識を勉強できるといいと思う。この演習で再認識させられたようにコミュニケーション能力も大事だと思う。患者さんと話をし、他の症状も理解していないと最適な薬は渡せないと思うのでこれも学ばないといけないと思いました。」というように、薬剤師になることや薬学を学ぶことへのモチベーションが上がっていることが認められた。

5. 演習実習Ⅰの効果

毎回の演習実習の直後に .Campus を使って授業評価アンケートを実施している。その中で、「到達目標の達成度を自己評価してください」という問に対する2008年度の学生の回答を図4及び5にまとめる。達成目標によって多少のばらつきはあるものの、70%以上の達成度を回答した学生が8割を超える目標がほとんどである。達成度の低い目標は「薬とは何かを概説できる」「軟骨組織・硬骨組織・筋組織・神経細胞・小腸上皮組織の構造の特徴と働きについて簡単に説明できる」「代表的な薬用植物のひとつについて学名・薬用部位・薬効・含有される薬効成分について説明できる」などであり、知識を要求するものについては「難しかった」という印象を与えていると思われる。

演習実習Ⅰは初年次教育の一部として行っているため、到達目標以外にも学習のスキルを身につけることや医療人としての心構えを身につけることを目標としている。入学当初のレポート作成では、引用文献をきちんと記載できない学生が多いが、年間を通して何度かレポートを書いているうちに、信頼できる文献を見分けて、引用文献として記載することができるようになる。また、最初はレポートの書式を整えることができないが、Wordを使用して写真や化学式をまじえたレポート作成ができるようになる。グループ活動を通じて、互いの意見を尊重したり、グループとしての意見をまとめ、決められた時間内に発

図 4 演習実習 I A の到達目標の達成度

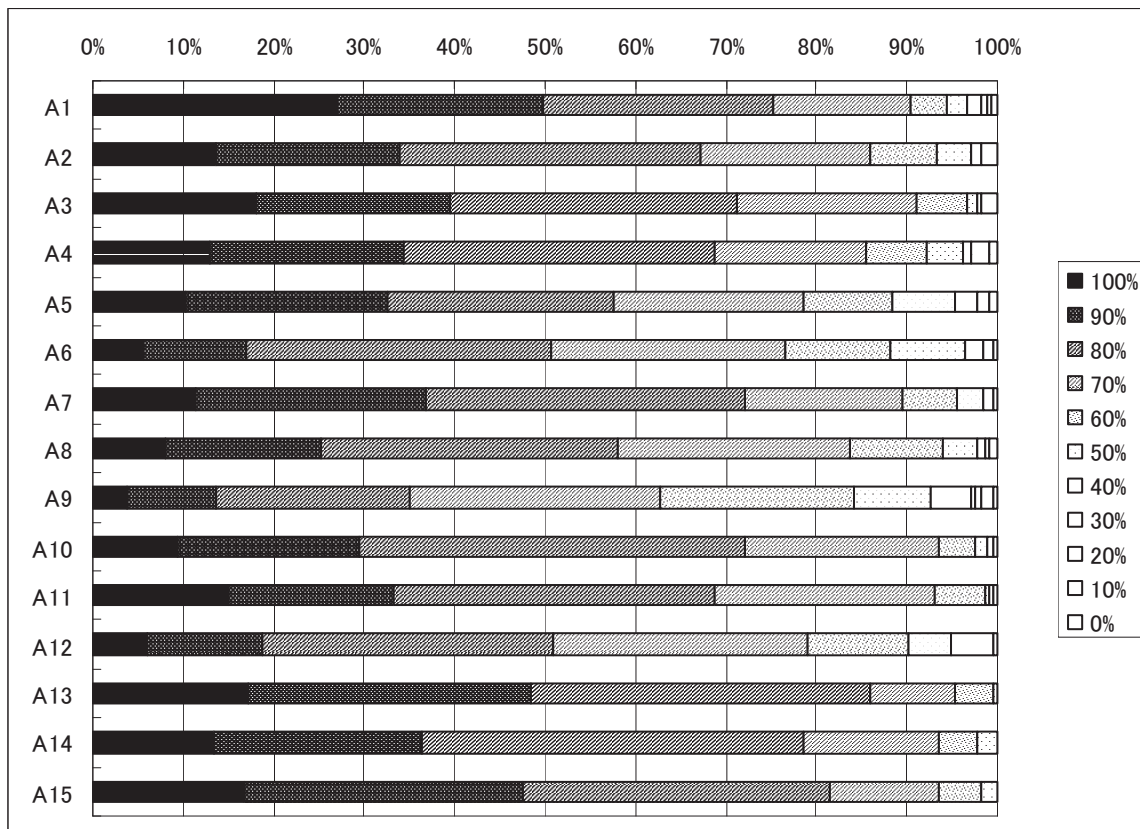
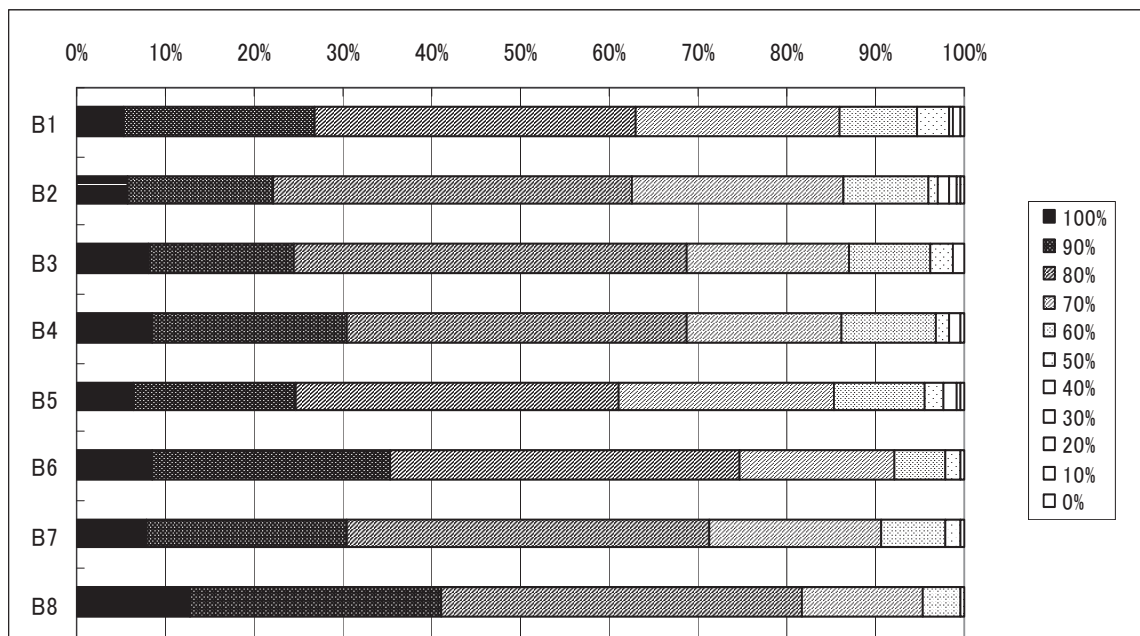


図 5 演習実習 I B の到達目標の達成度



表したりできるようになる。このような能力は、1年間を通して活動をしていること、共通教育と連携をとって協力しながら実施していることなどの影響が大きいと思われる。上級学年の先生方にも「プレゼンテーションやグループ活動ができる」と評価を頂いている。学習スキルの評価については、改めて議論したいと考えている。

医療人教育としての観点から見れば、前期には薬剤師の役割に関する項目を、後期には

「生」や「死」などに関する項目を取り入れているが、薬剤師になることの自覚や命の大切さや医療人としての心構えが身についたという記述を、実習後の自由記述の感想文にはほとんどの学生が記載しており、その成果は上がっていると考えられる。

6. 演習実習Ⅰの今後の課題

現在の形式の演習実習Ⅰを行うようになって4年を経た。当初課題であった初年次教育と医療人教育の両者を兼ね備えた演習実習という目標は概ね達成されていると考える。標準的な学習スキルの訓練や高校生から大学生への転換に必要な内容はすべて盛り込まれている。また、医療人GPなどで行われている初年次向け医療人教育にほぼ匹敵するだけの内容も含んでいる。その中で最大の課題は、それらの目標に本当に学生が到達しているかという評価をどのようにするかという点である。

今年度からはアンケート形式の学習評価からポートフォリオによる自己省察の方式に切り替えて、学生の達成レベルを評価することを試みとして行っている。今後はその分析の中からよりよい1年次生向け演習実習のプログラムを構築していければと考えている。

参考文献

- (1) 山田礼子・杉谷祐美子(2008)『初年次教育の「今」を考える－2001年調査と2007年調査の比較を手がかりに－』, 大学教育学会誌, 第30巻, 第2号, P83-87
- (2) 小林静子・江原吉博(2009)『薬学生のためのヒューマニティ・コミュニケーション学習, 南江堂
- (3) 文部科学省(2009年3月31日発表)『大学における教育内容等の改革状況について』,
[http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/21/03/1259150.htm]

教育開発センターの活動報告

教育開発センターには、本学における学士課程教育の構築・推進を目的とする学士課程教育部会と、教育の質の向上を目的とする FD 部会がある。それぞれの部会における 2009 年度の活動を以下に要約する。

< 学士課程教育部会 >

学士課程教育部会の 2009 年度の活動は、① DP、CP、AP の策定、②入学前教育、初年次教育の推進、③ GPA 制度の検討、の 3 項目に特に重点を置いた。

① DP、CP、AP の策定

各学部において議論を重ねていただいた結果、全学部が DP の策定を終えた。全学共通の DP も策定した。いくつかの学部では CP、AP の策定も終わっており、最終的には全学部で今年度中に策定を完了する予定となっている。なお、3 つのポリシーは来年度以降も継続して改訂を重ねていく予定である。

② 入学前教育、初年次教育の推進

部会にて継続的に検討を行っている。2010 年度は今までどおり各学部で実施する。全学共通での実施について今後さらに検討を続ける。

③ GPA 制度の検討

本学薬学部や他大学での導入・実施状況について情報収集を行った。2010 年度も情報収集と調査を継続し、実施に向けてできることから取り組んでいく予定である。

< FD 部会 >

2009 年度の FD 部会の活動は、基本的には従来の FD・SD 委員会の活動を継続する形で行った。

2009 年の活動の一覧は、教育開発センターが主となって取り組んだ活動と、各学部・機構において取り組んでいただいた活動に分けて、次ページ以降に掲載している。この一覧には記入していないが、前期・後期を通じて授業公開を実施した。残念ながら、2009 年度は授業公開による参観の成果報告はない(法科大学院を除く)が、来年度には期待したい。

なお、2 つの部会とは別に、教育開発センターとして本学の教育改革の活動などを学内外に周知する広報活動をおこなった。3 つの方策（① Web の立ち上げ、②ニュースレターの発行、③教育開発センタージャーナルの発行）を実施することができた。2010 年度は、それぞれの内容の充実を図りたい。

以上が教育開発センターの 2009 年度の活動概要である。2010 年度は、さらなる発展を目指して取り組みたい。

教育開発センター主催FDイベント

	行事	実施日・場所	参加者	内 容
4月	教育開発センター 開設			KAC 1号館3階に新設
	前期授業改善アンケート実施	2009年6月29日(月)～ 7月25日(土)	全学部、学際教育機構、共通 教育機構	対象科目数 1,511科目、実施科目数 1,361科目 実施率 90.1%
	FDCニューズレター No.1 発行	2009年7月1日(水)		所長からのご挨拶ほか
7月	FDセミナー	2009年7月3日(金) KAC 第11大会議室	学長ほか教員14名(うち非常 勤講師1名)、職員6名	「学生のためのシラバスづくり ～一貫したDP、CP、APの構築と授業改善～」 講師：佐藤浩章(愛媛大学・教育企画室副室長)
	新任教職員とFD部会委員との懇談会	2009年7月27日(月) KPC クルーズカフェ	新任教職員6名、FD部会委員 9名、事務担当2名	
8月	FDワークショップ	2009年8月31日(月)	学長ほか教員40名、 事務担当5名	「3つのポリシーの開発と一貫性構築手法」 講師：小林直人(愛媛大学・教育企画室長) ファシリテーター：城間祥子(愛媛大学・教育企 画室)
11月	FDCニューズレター No.2 発行	2009年11月2日(月)		FDワークショップの報告ほか
12月	FDミニワークショップ	KPC 2009年12月1日(火) A号館大会議室 KAC 2009年12月2日(水) 第3会議室	KPC：教員8名 (うち非常勤講師3名)、 職員3名 KAC：教員20名 (うち非常勤講師1名)、 職員4名	「わかりやすいシラバスづくり ～シラバスを通して良い授業をデザインする～」 講師：小林直人(愛媛大学・教育企画室長)
	学生とFD部会委員との懇談会	2009年12月7日(月) KAC 142E教室ほか	学生20名、FD部会委員12名、 事務担当2名	テーマ：「神戸学院の教育！ここ、どうにかなら へんの！」
1月	後期授業改善アンケート実施	2009年12月10日(木)～ 2010年1月21日(木)	全学部、学際教育機構、共通 教育機構	対象科目数 1,535科目、 実施科目数 1,328科目、 実施率 86.5%
	教育開発センターHP立ち上げ			
3月	FDCニューズレター No.3 発行	2010年3月発行		2009年度のまとめ
	教育開発センタージャーナル創刊号発行	2010年3月26日発行		

学部等主催FDイベント、FD研修出張など

	行 事	実施日・場所	参加者	内 容
5 月	留学生との懇談会 <経営学部>	2009 年 5 月 15 日 (金)	留学生 15 名、教員 6 名	
	新入生との懇談会 <法科大学院>	2009 年 5 月 12 日 (火)	学生 22 名、教員 11 名、 職員ほか 15 名	
	出張 「全国私立大学FD連携フォーラム」	2009 年 5 月 16 日 (土) 明治大学駿河台キャンパス	(法) 加藤雅之、和仁かや	テーマ：「日本における教育改革の方向性」
6 月	FD 講演会 <総合リハビリテーション学部>	2009 年 6 月 16 日 (火)	教員 7 名、学生 42 名	「健康産業スポーツ分野の現状 -健康運動実践指導者、健康運動指導士のしごと-」 講師：太田悠貴 (SPORTS INTELLIGENCE)
	学生との懇談会 <総合リハビリテーション学部>	2009 年 6 月 26 日 (金)	学生 10 名、教員 3 名	
	学生との懇談会 <薬学部>	2009 年 6 月 26 日 (金)	学生 9 名、教員 1 名	
7 月	出張 「薬剤師のためのワークショップ in 近畿」	2009 年 7 月 4 日 ～ 5 日 (土～日) 和歌山県薬剤師会館	(薬) 内海 美保	厚生労働省による認定実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップ
	FD 講演会 <人文学部>	2009 年 7 月 15 日 (水)	教員 19 名	「喫煙、飲酒、薬物の問題－乱用、依存、中毒－」 講師：湖海正尋 (兵庫医療大学)
	FD 講演会 <栄養学部>	2009 年 7 月 15 日 (水)	教員ほか 21 名	「栄養学部受験生の増加を図る研究会」 講師：日高 茜、南 直樹 (進研アド)
	出張 「薬剤師のためのワークショップ in 近畿」	2009 年 7 月 19 日 ～ 20 日 (日～月) 神戸学院大学	(薬) 中本 加寿夫	6 年制実務実習のための検討、SBOs の作成方法などのワークショップ

	行 事	実施日・場所	参加者	内 容
7 月	FD 講演会 ＜総合リハビリテーション学部＞ 学生との懇談会 ＜人文学部＞	2009 年 7 月 21 日（火）	教員 8 名、学生約 130 名	「ソーシャルワークの知識と技能の現場への活用」 講師：北山 晴菜（神戸徳州会病院） 公文 杏（育和会記念病院）
8 月	出張 「日本臨床検査教育学会学術大会」 出張 「大学体育指導者中央研修会」	2009 年 8 月 19 日 ～ 21 日（水～金） 東京医科歯科大学 2009 年 8 月 21 日 ～ 23 日（金～日） 山口大学吉田キャンパスほか	（栄）山西 浩、合田 清、 藤岡由夫、山下 勉、 松田広一、尼子克己 （学際）西脇 満	臨床検査技師養成にかかる教員養成及び収集 テーマ：「大学体育における FD 活動の進め方」
9 月	FD 講演会 ＜経営学部＞ 学生との懇談会 ＜法学部＞	2009 年 9 月 16 日（水）	教員 22 名、職員ほか 6 名	「アカデミックハラスメントってなんだろう」 講師：周藤由美子 （ウィメンズカウンセリング京都）
10 月	FD 意見交換会 ＜法学部＞ FD 講演会 ＜人文学部＞ 学生との懇談会 ＜法学部＞	2009 年 10 月 21 日（水） 2009 年 10 月 27 日（火） 2009 年 10 月 28 日（水）	学生 12 名、教員 5 名 教員 26 名 教員 19 名	KAC において 「若者たちが社会に出て行くための高校・大学教育の果たす役割」 講師：易 寿也（大阪府立松原高等学校校長）
11 月	出張 「兵庫教育大学 教育・社会調査研究センター 国際シンポジウム」	2009 年 11 月 17 日（火） 2009 年 11 月 22 日（日） 神戸国際会議場	学生 8 名、教員 5 名 （人）水谷 勇	KPC において テーマ：「データアーカイブと学術研究・政策推進・事業利用のための国際協力」

	行 事	実施日・場所	参加者	内 容
12 月	FD 講演会 <総合リハビリテーション学部>	2009 年 12 月 26 日 (土)	教員 15 名、学外大学教員 5 名	「藤田保健衛生大学での OSCE ～その実際と教育効果～」 講師：河野 光伸 (藤田保健衛生大学)
1 月	出張 「物理系薬学の教育・研究を展望するシンポジウム」	2010 年 1 月 8 日 (金) 日本薬学会館	(薬) 山岡由美子、市川秀喜 平野裕之	物理系科目担当者の教育・研究の改善のため
	FD 講演会 <人文学部>	2010 年 1 月 20 日 (水)	教員 14 名、職員 2 名	「初年次導入教育『知のナヴィゲータ』を用いた授業実践について」 講師：中澤 務 (関西大学)
3 月	出張 「FD のための情報技術講習会」	2010 年 3 月 9 日 ～ 11 日 (火～木) 大阪経済大学	(人) 水谷 勇	

※この活動報告は、2010 年 2 月 10 日時点で報告書・出張伺が提出されているものを列記した。これ以外の活動については後日発行するニューズレターで報告する予定である。

神戸学院大学FD研修会
2009. 7. 3

**学生のためのシラバスづくり
――貫いたDP,CP,APの構築と授業改善――**

愛媛大学教育・学生支援機構 教育企画室
佐藤 浩章
Hiroaki Sato

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

1

発表内容

I. DP・CP・APの策定と一貫性構築の意義
II. DPの策定
III. CPの策定
IV. APの見直し
V. カリキュラム・マップの作成

松山城
道後温泉本館

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

I. DP・CP・APの策定と一貫性構築の意義

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

3

1. 愛媛大学のFD

・求められる「三つの方針」

2008年12月に出された中央教育審議会答申では、国際通用性を備えた学士課程教育の構築のために「明確な『三つの方針』に貫かれた教学経営」を求めている。つまり、大学の個性・特色は「各機関ごとの学位授与の方針、教育課程編成・実施の方針、入学者受け入れの方針」(ディプロマ・ポリシー: DP、カリキュラム・ポリシー: CP、アドミッション・ポリシー: APに対応)に反映されるものとし、この三つの方針の共通理解の下に教職員が日常の実践に携わり、PDCAサイクルを確立することが重要としている。

また、大学評価・学位授与機構の機関別認証評価において使用されている大学評価基準(平成20年度実施分)でも、同様の方針の策定と公表が求められている。

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

4

1. 愛媛大学のFD

・カリキュラム(再)開発の困難さ

政策答申や大学評価基準を待つまでもなく、大学関係者であれば誰も、日本の大学のカリキュラムがいかに体系性を欠いたものであるかを知っているだろう。しかしながら授業と異なり、カリキュラムは組織と連動するものであり、その改革は容易ではない。しかも新規のカリキュラム開発ではなく、現存するカリキュラムの再開発となれば、困難の度合いは増す。

・カリキュラム＝政治

ある科目が存在するということは、そこに人が介在しているということである。科目と科目の共同体であるカリキュラムは、人と人との共同体でもある。

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

5

1. 愛媛大学のFD

愛媛大学におけるFDの定義

「教育・学習効果を最大限に高めることを目指した」

① 授業・教授法の改善(ミクロ・レベル)
② カリキュラムの改善(ミドル・レベル)
③ 組織の整備・改革(マクロ・レベル) への組織的な取組」

(愛媛大学教育・学生支援会議決定 2007)

・本セミナーの目的

学士課程の体系化の取組はミドル・レベルのFDである。本取組を政策や認証評価への対応としてだけでなく、教員がカリキュラム(再)開発手法を学ぶFDの機会として位置づけ、それを効果的に実施する手法を紹介したい。

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

6

2. 教育コーディネーター研修

・ 教育コーディネーター研修会

2006年度は「単位の実質化とカリキュラムの体系化」をテーマに1回、2007年度は「学士課程の体系化～DP・CP・APの策定と一貫性構築～」をテーマに教育コーディネーター研修会(全5回。6月、8月、10月、11月、1月実施。2008年度は「学士課程の体系化～カリキュラム・マップとティーチング・ポートフォリオ開発」をテーマに、8月、11月、1月実施。2009年度は「学士課程の体系化～カリキュラム・アセスメントと単位制度の実質化」をテーマに、5月、7月、11月、1月実施予定。主催教育企画室。

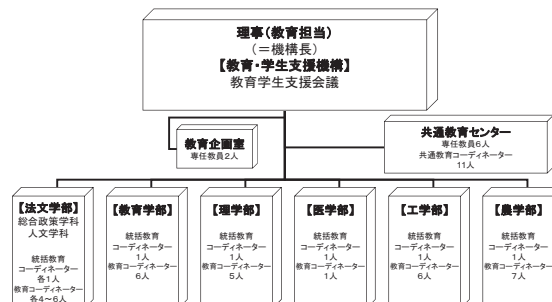
・ 教育コーディネーターとは？

2006年度に誕生した、学部・学科の教育責任者として教育方針の立案、カリキュラムの編成、教育内容・教授法の改善、教育効果の検証などを担う「教育重点型教員」である。学科や教育コースごとに最低一人が配置され、現在65人(2009.6)がその任に当たっている。当該学部長の推薦に基づき、役員会の承認を経て、学長が任命。1期2年、2期を原則としている。研修会においても、学部・学科の方針の策定、全学の方針とのすり合わせを行っている。

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

7

2. 教育コーディネーター研修



EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

8

2. 教育コーディネーター研修

◆2007年度第1回教育コーディネーター研修(6月7日)13:30～16:00

- ・ 講演「これからの学士課程教育に求められるもの」(小松学長)
- ・ 説明「本研修の目的と今後の課題について」(柳澤教育・学生支援機構長)
- ・ 事例発表「教育コースの再編と特別コースの新設」(法文学部総合政策学科 湯浅教授、人文学部 清水教授、農学部 泉学部長)
- ・ 総合討論



EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

9

2. 教育コーディネーター研修

◆2007年度第2回教育コーディネーター研修(8月6日)13:30～17:00

- ・ 外部有識者による事例紹介「観点別教育目標から考えるカリキュラム・ポリシーの構造」(沖 立命館大学教授)
- ・ ワークショップ「DPの策定シミュレーション」(教育企画室)
- ・ 課題提示「DPの策定について」(柳澤教育・学生支援機構長)



EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

10

2. 教育コーディネーター研修

◆2007年度第3回教育コーディネーター研修(10月4日)13:30～16:40

- ・ 説明「全学のディプロマ・ポリシー(DP)(案)について」(柳澤教育・学生支援機構長)
- ・ 報告「DP作成進捗状況について」(各学部統括教育コーディネーター等)

- ・ ワークショップ「カリキュラム・チェックリストの作成シミュレーション」(教育企画室)
- ・ 課題提示「カリキュラム・チェックリストの作成について」(柳澤教育・学生支援機構長)



EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

11

2. 教育コーディネーター研修

◆2007年度第4回教育コーディネーター研修(11月8日)13:30～16:45

- ・ 報告(DP作成)(各学部統括教育コーディネーター等)
- ・ 検討「カリキュラム・チェックリスト作成に係る問題点、疑問点について」(教育企画室)
- ・ 課題提示「APの見直しについて」(柳澤教育・学生支援機構長)



EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

12

2. 教育コーディネーター研修

◆2007年度第5回教育コーディネーター研修(20年1月31日)13:30～17:00

- ・ 学長挨拶(小松学長)
- ・ 各学部等最終報告(DP、CCL、AP)(各学部等担当者)
- ・ 各学部へ検討課題の提案(DPに合致しない授業科目の検討、カリキュラム・マップの作成など次年度の課題)(柳澤教育・学生支援機構長)



EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

13

II. DPの策定

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

14

1. 教育企画室からの依頼

DPの定義

- ・ 中央教育審議会の定義 ※1
 - － 卒業認定・学位授与に関する基本的な方針
- ・ 山口大学
 - GP(Graduation Policy)の定義 ※2
 - － 「大学が教育活動の成果(Educational Outcomes)として学生に保証する最低限の基本的な資質(Minimum Requirement)」を箇条書きで記述したもの。

※1 我が国の高等教育の将来像(答申)2005年1月

※2 沖裕貴・田中均 2006「山口大学におけるGraduation Policyとアドミッション・ポリシー策定の基本的な考え方について」大学教育3、39-55.

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

15

1. 教育企画室からの依頼

①DPを5領域に設定することを求める

他大学(山口大学、立命館大学)の先行事例を参考に、各学部・学科等の卒業時の到達目標を「知識・理解」「思考・判断」「興味・関心」「態度」「技能・表現」の5領域に整理して文章化することを求めた。

②全学DPの提示

各学部のDPが大学としての統一を欠くものにならないように、学部での作業前に全学DPを提示。全学DPはキーワードを羅列する形式で設定され、学部のDPを縛りすぎない程度のもとした。

③DP作成ワークショップ

教育コーディネーターが各学部で作業しやすいように、研修会では学部DPを作成するワークショップを実施し、出来上がったDPに対して学部間でフィードバックを行った。実際の学部でのDP設定作業には3～5ヶ月の日数を要した。

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

16

1. 教育企画室からの依頼

DPの策定上の留意点

- ・ 具体的に、達成したことを挙証できる目標を記述すること
- ・ 抽象的な言葉を用いず、行動目標で記述すること
- ・ 教育目標分類学に従って、観点別に行動目標を記述すること
- ・ 多くの学生の現実の進路(就職先)や将来像を意識して記述すること
- ・ 学生を主語に、「○○できる」という形式
- ・ 原則として、一つの文章に一つの動詞を使う
- ・ 条件(制約・制限)、基準(数字は有効)を示すとよい。

※参考 沖裕貴・田中均 2006「山口大学におけるGraduation Policyとアドミッション・ポリシー策定の基本的な考え方について」大学教育3、39-55.

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

17

1. 教育企画室からの依頼

- ・ 各学部・学科等の卒業時の到達目標を、以下の5つの領域に整理して文章化する。

知識・理解	}	認知的領域	{	達成目標
思考・判断				向上目標
関心・意欲	}	情意的領域	{	達成・向上目標
態度				
技能・表現	}	精神運動的領域	{	達成目標

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

18

到達目標に使う具体的な動詞(1)

■知識領域

列記する／列挙する／述べる／具体的に述べる
説明する／分類する／比較する
例を挙げる／類別する／関係づける
解釈する／予測する／選択する／同定する
弁別する／推論する／公式化する
一般化する／使用する／応用する
適用する／演繹する／結論する／批判する
評価する

到達目標に使う具体的な動詞(2)

■技能領域

感じる／始める／模倣する／熟練する
工夫する／実施する／行う／創造する
操作する／動かす／手術する／触れる
触診する／調べる／準備する／測定する

■態度領域

行う／尋ねる／助ける／コミュニケーションする
寄与する／協調する／示す／見せる
表現する／始める／相互にやりとりする
系統立てる／参加する／反応する／答える
配慮する

1. 教育企画室からの依頼

平成19年9月19日 教育・学生支援会議
全学のディプロマ・ポリシー(DP)(案)

全学のDPが、各学部等のDP作成における方向性の提示となることも意識しつつ、複数のキーワードを包括した形の文章として示す。

＜自ら必要な知識や技術を学んでいく力＞

・社会の中で一人の人間として生き、自らの個性や適性に相応して自らの役割を果たしていくために必要な教養、知識と能力を身につける。

(キーワード)

個の確立、自主学習意欲、継続力(関心・意欲・態度)、専門的知識、専門的技術、情報収集力(知識・理解、技能)

1. 教育企画室からの依頼

＜議論し、企画をまとめ、提案する力＞

・自らのもつ知識や技術を活用しながら他者と議論し、企画をまとめあげ、提案を行うことができる。

(キーワード)

課題発見・解決力、応用展開力、総合的思考力、科学的思考力(思考・判断)、論理的表現力、語学力、リーダーシップ力、コミュニケーション力(技能・表現)

＜協働し、実践していく力＞

・立案した企画について、目的達成を目指し、家庭・地域・社会における協働を通じ、実践していくことができる。

(キーワード)

実践的行動力、〇〇への貢献、使命感、責任感(態度)、協調性、リーダーシップ力、コミュニケーション力(技能・表現)

2. 学部・学科等でのDP策定作業の実際

法文学部のDP

(知識・理解)

1. 社会科学または人文科学の包括的な知識を習得している。

(思考・判断)

2. 社会科学または人文科学の特定の学問領域において的確な考察及び判断ができる。

(関心・意欲)

3. 社会科学または人文科学の知を地域における実践力へと高めることができる。

(態度)

4. 生きた文化や社会の担い手としての自覚を持ち、責任を果たすことができる。

(技能・表現)

5. 社会で活躍できる確かなコミュニケーション能力を身につけている。

2. 学部・学科等でのDP策定作業の実際

人文学科のDP

(知識・理解)

1. 豊かな人間性と社会性を支える広い教養を身につけている。
2. 人文諸学の学問内容及び方法を理解している。

(思考・判断)

3. 自ら設定した課題について、人間文化・地域文化・歴史文化・言語文化のいずれかの学問領域の研究手法を用いて、考察することができる。

(関心・意欲)

4. 人文学の知を実践の力へと高めることができる。
5. 社会における自分の役割を自覚することができる。

(態度)

6. 人文学の知をもって地域社会のニーズに応えることができる。
7. 生きた文化や生きた社会を創ることに寄与できる。

(技能・表現)

8. 他者の声に耳を傾け、自分の考えを口頭表現や文章表現によつて的確に伝えることができる。

神戸学院大学様のDP

- ・法学部
- ・経済学部
- ・経営学部
- ・栄養学部
- ・薬学部
- ・人文学部
- ・総合リハ学部 理学専攻
- ・総合リハ学部 作業専攻
- ・総合リハ学部 社会リハ専攻

III. カリキュラム・ポリシー(CP)の策定

1. 教育企画室からの依頼

①カリキュラムチェックリスト(CCL)の作成を求める
CPIは、文章化すると大量になるので、DPと整合性のあるカリキュラムを図示することで対応。この作業にはCCLを使用。CCLは、「列」に学科等のDPで設定された到達目標を、「行」に当該学科等で開講されている授業科目の到達目標を配置したものであり、両者がクロスするセルで整合性を確認できる。各授業科目の到達目標が学部DPに強く貢献している場合は◎がつき、全く貢献していない場合は空欄となる。

②CCL作成シミュレーション
学部で実際に開講されている科目を使ってシミュレーションを実施(PC使用)。

③学部でのCCL作成支援
学部でのCCL入力作業には、全教員の関与が求められるが、実際は、到達目標が適切に記述されていないシラバスが多く、チェックが困難な学部もあった。よって教員に対するシラバスの書き方に関するFD講習会を教育企画室に依頼した学部が3学部あった(全6学部中)。

1. 教育企画室からの依頼

- ・ CP(カリキュラム・ポリシー)
 - それ自体が文章化されるものではなく、DPと整合性のある教育カリキュラムが構築されることで達成されていると判断されるもの。
- ・ CCL(カリキュラム・チェックリスト)
 - 現在の学科等のDPとその教育カリキュラムに存在する各授業の到達目標との整合性を確認し、CPが達成できているかを判断するためのツール。

英語圏で一般的なシラバスにおける目標の表現

After taking this chapter, you should be able to :

- Explain the difference between communication and communications
- Discuss the strengths and weakness of various communication models
- Explain why communication breaks down and why it succeeds

Baden Eunson 2006 *Communicating in the 21st century*, Johon Wiley & Sons Australia, Ltd. p.1

日本の大学でよく見るシラバスにおける目標の表現

資料をご参照ください。

〇〇学部
〇〇〇〇〇 殿

平成〇〇年〇〇月〇〇日

共通教育センター長

シラバスの修正について(依頼)

共通教育の授業担当について、ご協力をいただきありがとうございます。さて、学生にとってよりわかりやすいシラバスを作成するため、共通教育のシラバスに關し、共通教育センターにてシラバスの点検作業を行っております。その結果、貴教の下記授業科目のシラバスについて、該当の事項に關して加筆・修正をお願いすることとなりました。シラバスはよりよい授業への第一歩となる文書です。よろしくご協力をお願いいたします。

記

授業科目名〔 〇〇〇〇 〕

☐ (主教科目のみ) 授業題目を記入してください。

☐ 授業題目・キーワードに英語表記をお願いします。

☐ 授業の内容を、15回の授業内容がわかるように記入をお願いします。

進捗によって内容が変わる場合は、何回かに分けてご記入いただくか、「下記の内容を15回の授業の間に進捗します」という記述をお願いします。なお、学期制によりもともと15回ない授業に關してはこの限りではありません。

☐ 学則では出席は成績評価の項目とされていないことにご留意ください。

☐ オフィスアワー(必ず研究室におられる時間帯)の記入をお願いします。

なお、オフィスアワーは後で変更することが可能です。

■ その他

・「授業の目的・到達目標」は、学生が受講の結果として到達できる水準を述べてあることが必要です。学生が、「自分にもできそう」と思えるような分かりやすい表現で述べてください。目標に沿った行為動詞を用いてください。

詳細な内容に關する問い合わせ先
共通教育センター

31

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

到達目標の策定上の留意点

- 具体的に、達成したことを挙証できる目標を記述すること
- 抽象的な言葉を用いず、行動目標で記述すること
- 教育目標分類学に従って、観点別に行動目標を記述すること
- ディプロマ・ポリシーを意識して記述すること
- 学生を主語に、「〇〇できる」という形式
- 原則として、一つの文章に一つの動詞を使う
- 条件(制約・制限)、基準(数字は有効)を示すとよい。

※参考 沖裕貴・田中均 2006 「山口大学におけるグラデュエーション・ポリシーとアドミッション・ポリシー策定の基本的な考え方について」 大学教育3、39-55.

32

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

目標に関する練習問題

次の3つの目標の問題点を指摘し、書き直しをしてください。正解は一つではありません。

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

(1) ロシア語で日常会話を楽しむことができる。

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

(2) 家庭料理の基礎をマスターさせる。

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

(3) 小学校教科「体育」を担当するために必要な事柄について理解するとともに、それを教えるための基礎技能を身につける。

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

神戸学院大学様のシラバス

- ・行動人類学Ⅰ
- ・現代社会基礎演習

2. 学部・学科等でのCP策定作業の実際

[illegible]

2. 学部・学科等でのCP策定作業の実際

- ・シラバスの書き方に対する反省を構成員に促すことができた。
- ・シラバスの目的と目標の設定の仕方が、明確になった。
- ・シラバスの内容をDPの項目に即したものとなるように改訂した。
- ・教育の成果を挙証する仕組みが理解された。
- ・各自のシラバスの目標がDPのどれに該当するものか、◎○△を記入するにあたってレベル判断に迷うものがあった。

2. 学部・学科等でのCP策定作業の実際

- CCL作成にあたって、上欄に並べられたDPの各項目にマークしていく場合、いずれかの科目がマークされていれば、CPとしてはDPをカバーすると考えてよいのか。
- いずれかの科目といっても、その場合は必修科目でなければならないのでは？

IV. アドミッション・ポリシー(AP)の見直し

1. 教育企画室からの依頼

- ①学部APのチェック
教育企画室が既に作成・公表されている学部のAPをチェックしたところ、①DPの内容と混在している、またDPを超えた内容となっている、②入学試験の内容と対応していない、③「関心・意欲」「態度」の観点に偏りすぎている、といった課題が明らかになった。
- ②学部AP見直しを求める
- ③APチェックリストの提供
DP、CPを踏まえた上で、上記3点について留意してAPを見直すように依頼した。その際、APと入試制度が対応できているかをチェックするリストも作成し、提供した。

2. 学部・学科等でのAP策定作業の実際

人文学科のAP

(知識・理解)

1. 高等学校で学習する国語、外国語、地理、歴史、公民、数学、理科などについて、高等学校卒業相当の知識を有している。

(思考・判断)

2. 物事を多面的に考察し、自分の考えをまとめることができる。

(関心・意欲・態度)

3. 言語・文化・文学・歴史・人間、思想、地域、社会などに興味関心を持ち、身につけた知識を地域社会及び国際社会に役立てたいと考えている。

(技能・表現)

4. 所与の問題について、自分の考えを日本語でわかりやすく表現できる。

2. 学部・学科等でのAP策定作業の実際

農学部アドミッション・ポリシー チェックリスト(Ⅱ)

農学部教育コーディネーター会議 平成20年 1月28日

		前期日程	後期日程	推薦ⅠA	推薦ⅠB	AO(地域マシナント)	推薦Ⅱ	AO(水産)
		ゼミ ター	教科 ター	面接	小論文	面接	ゼミ ター	面接
	1. 高等学校で学習した主要教科科目について、教科書レベルの基礎的な知識を有している。	◎	○	◎		○	△	△
	2. 次のいずれかに該当する。							
(知識・理解)	A. 高等学校で学習した主要教科科目について、教科書レベルの基礎的な知識を有している。	○	◎	○	△		○	
	B. 農業・生物資源または工業、商学などに関する基礎的な専門知識・技術を有している。					○	△	△
(思考・判断)	ある事象に対して多面的に考察し、自分の考えをまとめることができる。		△		○	△	△	○
(技能・表現)	自分の考えを、日本語で他者からわかりやすく文書表現することができる。		△		○	△	△	○
(関心・意欲・態度)	地域社会や国際社会に対する資料・資源・環境に関する様々な問題に関心を持ち、身につけた知識をこれらの解決に役立てたいと考えている。			○	◎	◎	◎	◎

課 題

①どの教育組織単位でDPの設定を行うか？

同じ「学部」という名称を使用していても、学部によってその位置づけが異なる。例えば一学科しか持たない農学部と独立性の強い複数学科を抱える工学部では、「学部」の意味するものが違う。実質的なDPを設定できる組織はどこのかを関係者は認知しておかねばならない。

②到達目標の表現方法をどうするか？

今回は5領域に分類したが、3領域という選択肢もある。教職員が分類しやすく、学生にも理解しやすい分類方法を採用しなければならない。

③到達目標に対する評価をどの程度まで厳密に行うか？

DPやAPにあまりにも多くの到達目標を設定すると、それらを評価する手間がかかる。しかしながら、評価可能なものだけを記述するとDPやAPで大学の個性・特色を表現するのは困難になる。両者のバランスをとるのが難しいが、DPやAPは一般的なものに、個性・特色はCPで表現するというのが妥当であろう。

V. カリキュラム・マップの作成

1. カリキュラム・マップの開発

(1)カリキュラム・マップとは？

- ・カリキュラムにおける授業科目間の系統性・関係性を図示化したフローチャートやダイアグラムのこと。
- ・図示化は、情緒面、注意面、教示面、支援面、記憶面で学習者の内容理解を高める(関2007)。
- ・コンセプト・マップ(概念地図法)と呼ばれている学習指導法(岸2000)をカリキュラムに応用したもの。コンセプト・マップは、初等・中等教育において、学習者の知識状態の確認のために使用されており、高等教育においては、工学分野を中心にカリキュラムを表現する手法として使われている(佐藤1996)。またシラバスを図示化する手法として使われている例もある(グリゲナ2004、Nilson2007)。
- ・FD教材としてのメリット:電子メディアでも紙媒体でも表現できる、一枚で全体を俯瞰できる、背景の異なる複数メンバーでの共有がしやすい、記憶に残りやすい。
- ・FD教材としてのデメリット:COLと併用しなければ、厳密な体系性・関連性を理解することができない。

1. カリキュラム・マップの開発

(2)2008年度教育コーディネーター研修会のテーマ

「カリキュラムの体系化と授業改善
～カリキュラムマップの作成とティーチング・ポートフォリオ開発～」

- ◆第1回研修(6月5日)13:30～16:00
- ・説明「今年度のテーマと研修会の進め方について」(教育・学生支援機構長)
- ・ワークショップ「カリキュラムマップの作成シミュレーション」(教育企画室)
- ◆第2回研修(8月6日)15:00～17:30
- ・課題提示「カリキュラムマップの作成について」(教育・学生支援機構長)
- ◆第3回研修(11月10日)13:30～16:00
- ・報告「カリキュラムマップの作成進捗状況」(各学部統括教育コーディネーター)
- ◆第4回研修(翌年1月29日)13:30～17:00
- ・学長挨拶
- ・各学部等最終報告「カリキュラムマップの作成」(各学部統括教育コーディネーター)

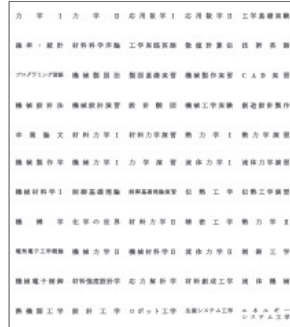
※カリキュラム・マップ作成に関係しない議題は割愛

1. カリキュラム・マップの開発

(3) 研修の流れ

①カリキュラム・マップの説明と作成シミュレーション(6月)

- ・カリキュラム・マップの先行事例紹介。学問分野による多様性を尊重することを強調。
- ・学部・学科に分かれて、作成シミュレーションのグループワーク。
- ・授業科目シールを配布し付箋に張り付けて、模造紙上に時間軸で並べ手書きで関係図示。
- ・ポスター発表による相互批評



授業科目シール

49

1. カリキュラム・マップの開発



理学部数学コース



法文学部総合政策学科

学問分野の多様性を表現する多様な簡易マップの完成

50

1. カリキュラム・マップの開発

②各学部・学科でカリキュラム・マップ作成(6月～1月) 簡易マップを基に議論

③研修会でカリキュラム・マップのモデルパターンの提示(11月)



基礎・応用から総合力

基礎から応用へ

細分化

51

1. カリキュラム・マップの開発

④研修会にて作成進捗状況の報告とコメント付与(11月)

- 「全体の構造や流れがわかりやすいか」
- 「一目で授業科目同士の関係がわかるか」
- 「興味深く見てもらえ、記憶に留まりやすいか」
- 「学生にとって、自らの学習内容の把握に役立つか」
- 上記視点から教育企画室がコメントし、意見交換

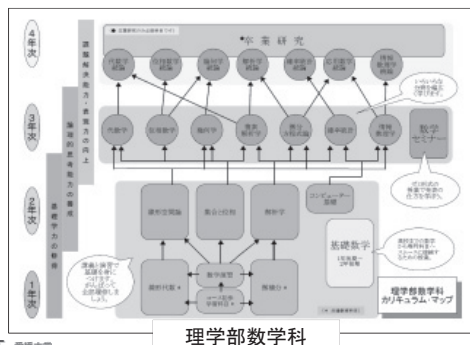
コメント例【法文学部総合政策学科司法コース】

- 1) 全体としてはB案のほうが理解しやすいままとった案となっています。コア科目を中央に配置することでその重要性が強調されています。
- 2) 両案とも科目同士の関連は不明確です。何か工夫がほしいところです。例えば、基礎法科目群と刑事法科目群など、科目群同士の関連性を示したり、基礎→応用→発展についても何らかの工夫でその連続性を示すことができればよりわかりやすいと思います。また、B案コア科目の下の必修科目の位置づけが明確ではありません。
- 3) B案では、学習が拡散していくような印象を受けます。年次が進行するにつれて、学習内容が統合・総合していくイメージの方が学習効果は高まるように思います。

52

2. カリキュラム・マップの実際

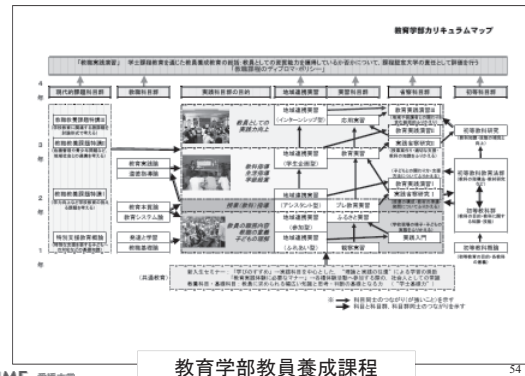
⑤研修会において最終発表(1月)



理学部数学科

53

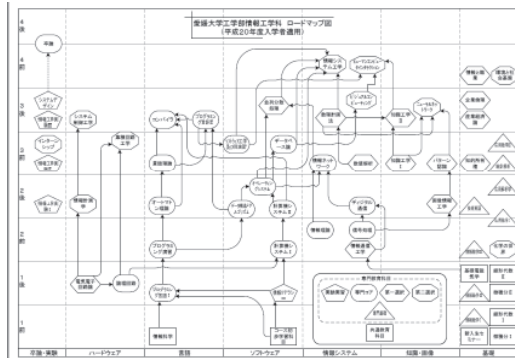
2. カリキュラム・マップの実際



教育学部教員養成課程

54

2. カリキュラム・マップの実際



EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

工学部情報工学科

55

2. カリキュラム・マップの実際



EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

法文学部総合政策学科企業システムコース

56

まとめ・課題・今後の予定

(1) まとめ

- ・教育コーディネーターを対象とする、年間4回の研修を通して、約8ヶ月で全学科・コースのカリキュラム・マップの作成を完了した。翌年度以降、ホームページで公開を依頼。
- ・モデル提示、シミュレーション、学科・コースでの作業、中間報告・コメント付与と意見交換、最終報告という手順での研修が成功した。
- ・教育コーディネーターがカリキュラムについて学ぶ良い機会となった。「初めて自分の学部でこれだけの科目が開講されていることを知った」(参加者)

(2) 課題

- ①学問分野毎の体系化の差異をどう考えるか？
理・工学部のマップについては直線型、その他のマップについては螺旋型・同心円型が多かったけれども、それは学問分野による差異なのか、体系化の程度の差異なのか。体系化されていないカリキュラムをマップとして表現することは困難。

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

57

まとめ・課題・今後の予定

(2) 課題(続き)

- ②マップの効果的な表現方法をどうやって抽出していくか？
学問分野によって、マップの表現方法は多様であるとしても、閲覧者、とりわけ学習者にとって理解しやすい表現方法はある。効果的なマップの雛型を抽出していく必要あり。
- ③FD教材としてのマップの有効性はあるか？
教員が集団として取り組むことで、教員の言動や組織にどのような変化が生じたのか。
- ④学生に対してマップをどう活用していくか？
学生に対して、どの時期に、どのような媒体で提示すると、学習に効果的なのかについて検証必要。学習成果の検証等において有効に活用できないか。

(3) 今後の予定

- ・翌年度のエデュケーションコーディネーター研修のテーマ(年4回開催予定)「学士課程教育の体系化～カリキュラム・アセスメントと単位制度の実質化」
- ・これにより教育課程のPDCAサイクルはCheck段階に入り、現状分析から再開発のステージに進む。

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

58

3. 今後の予定

ご清聴ありがとうございました。
ご質問・ご意見は下記までお願いします。

sato@iec.ehime-u.ac.jp

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

59

神戸学院大学 F D 研修会
2009. 8. 31.

ディプロマ・ポリシーから カリキュラム・ポリシーへ ～学生のための一貫性構築～

愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室長
小林 直人
Naoto KOBAYASHI

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

1

内 容

- I. DP・CP・APの
策定と一貫性構築の意義
- II. カリキュラムチェック
リスト (CCL) の作成
- III. カリキュラム・マップ
(CM) の作成
- IV. その次に来るもの
その先にあるもの




EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

I. DP・CP・APの策定と一貫性構築の意義

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

3

1. 愛媛大学の F D

・ 求められる『三つの方針』

中央教育審議会答申（2008年12月）では、国際通用性を備えた学士課程教育の構築のために「明確な『三つの方針』に貫かれた教学経営」を求めている。つまり、大学の個性・特色は「各機関ごとの学位授与の方針、教育課程編成・実施の方針、入学者受け入れの方針」（ディプロマ・ポリシー：DP、カリキュラム・ポリシー：CP、アドミッション・ポリシー：AP）に反映されるものとし、この三つの方針の共通理解の下に教職員が日常の実践に携わり、PDCAサイクルを確立することが重要、としている。

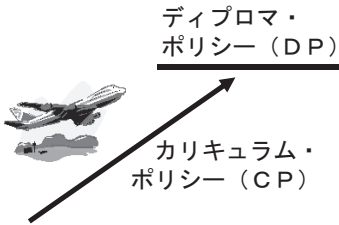
大学評価・学位授与機構（NIAD）の機関別認証評価において使用されている大学評価基準（平成20年度実施分）でも、同様の方針の策定と公表が求められている。

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

4

1. 愛媛大学の F D

・ 求められる『三つの方針』



ディプロマ・ポリシー (DP)

カリキュラム・ポリシー (CP)

アドミッション・ポリシー (AP)

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

5

1. 愛媛大学の F D

愛媛大学における F D の定義

「教育・学習効果を最大限に高めることを目指した

- ① 授業・教授法の改善（ミクロ・レベル）
- ② カリキュラムの改善（ミドル・レベル）
- ③ 組織の整備・改革（マクロ・レベル）

への組織的な取組」

（愛媛大学教育・学生支援会議決定 2007）

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

6

1. 愛媛大学のFD

愛媛大学におけるFDの定義

「教育・学習効果を最大限に高めることを目指した

- ① 授業・教授法の改善（ミクロ・レベル）
- ② カリキュラムの改善（ミドル・レベル）
- ③ 組織の整備・改革（マクロ・レベル）

への組織的な取組」

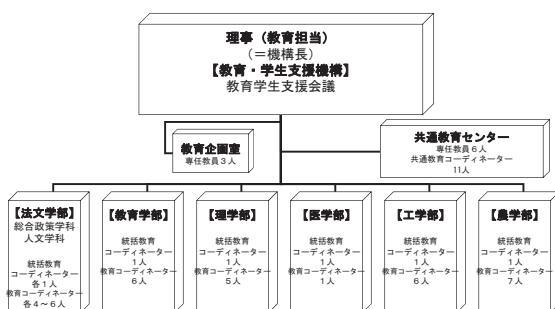
（愛媛大学教育・学生支援会議決定 2007）

2. 教育コーディネーター研修

愛媛大学の「教育コーディネーター」とは？

各学部/学科の教育責任者として教育方針の立案、カリキュラムの編成、教育内容・教授法の改善、教育効果の検証などを担う「教育重点型教員」である。2006年度に誕生し、学科や教育コースごとに最低1人が配置され、現在65人（2009.6.）がその任に当たっている。当該学部長の推薦に基づき、役員会の承認を経て、学長が任命する。1期2年2期の任期が原則。研修会において、学部・学科の方針の策定、全学の方針とのすり合わせを行っている。

2. 教育コーディネーター研修



2. 教育コーディネーター研修

教育コーディネーター研修 2007&2008 DPとCP（CCL&CM）の策定



Ⅱ. カリキュラム・チェック・リストの作成

1. カリキュラム・ポリシー

- ・ CP（カリキュラム・ポリシー）
 - それ自体が文章化されるものではなく、DPと整合性のある教育カリキュラムが構築されることで達成されていると判断されるもの。
- ・ CCL（カリキュラム・チェック・リスト）
 - 現在の学科等のDPとその教育カリキュラムに存在する各授業の到達目標との整合性を確認し、CPが達成できているかを判断するためのツール。

2. CCL作成作業の実際

[illegible]

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

13

- ・ シラバスの書き方に対する反省を構成員に促すことができた。
- ・ シラバスの目的と目標の設定の仕方が、明確になった。
- ・ シラバスの内容をDPの項目に即したものとなるように改訂した。
- ・ 教育の成果を挙証する仕組みが理解された。
- ・ 各自のシラバスの目標がDPのどれに該当するものか、◎○△を記入するにあたってレベル判断に迷うものがあつた。

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

14

3. CCL作成作業の課題

①シラバスの到達目標とDP・CCLが対応可能か？

個々の科目のＣＣＬ作成のためには、シラバスの到達目標が明確である必要がある。さらに、シラバスの到達目標とＤＰの表現方法（例えば「５領域」の分類）が一致していることが望ましい。

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

15

シラバスの到達目標の留意点

- ・ 具体的に、達成したことを検証できる目標を記述する。
- ・ 抽象的な言葉を用いず、行動目標で記述する。
- ・ 教育目標分類学に従って、観点別に行動目標を記述する。
- ・ ディプロマ・ポリシーを意識して記述する。
- ・ 学生を主語に、「〇〇できる」という形式に。
- ・ 原則として、一つの文章に一つの動詞を使う。
- ・ 条件(制約・制限)、基準(数字は有効)を示すとよい。

※参考 沖裕貴・田中均 2006 「山口大学におけるグラデュエーション・ポリシーとアドミッション・ポリシー策定の基本的な考え方について」 大学教育3、39-55.

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

16

3. CCL作成作業の課題

②DPの到達目標の表現方法をどうするか？

愛媛大学では5領域に分類したが、3領域という選択肢もある。教職員が分類しやすく、学生にも理解しやすい分類方法を採用する。

③到達目標に対する評価をどの程度まで厳密に行うか？

ＤＰにあまりにも多くの到達目標を設定すると、それら
を評価する手間がかかる。しかしながら、評価可能なもの
だけを記述すると大学の個性・特色を表現するのは困難に
なる。両者のバランスをとるのが難しいが、ＤＰやＡＰは
一般的なものに、個性・特色はＣＰで表現するというのが
妥当であろう。

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

17

DP策定上の留意点

DPの定義

- ・ 中央教育審議会の定義（※１）
 - 卒業認定・学位授与に関する基本的な方針
- ・ 山口大学 G P（グラデュエーション・ポリシー）の定義（※２）
 - 「大学が教育活動の成果として学生に保証する最低限の基本的な資質」を簡条書きで記述したもの。

※1 我が国の高等教育の将来像（答申）2005年1月

※2 沖裕貴・田中均 2006 「山口大学におけるグラデュエーション・ポリシーとアドミッション・ポリシー策定の基本的な考え方について」 大学教育3、39-55.

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

18

DP策定上の留意点

DPの策定上の留意点

- ・ 具体的に、達成したことを検証できる目標を記述する。
- ・ 抽象的な言葉を用いず、行動目標で記述する。
- ・ 教育目標分類学に従って、観点別に行動目標を記述する。
- ・ 多くの学生の現実の進路（就職先）や将来像を意識して記述する。
- ・ 学生を主語に、「〇〇できる」という形式に統一する。
- ・ 原則として、一つの文章に一つの動詞を使う。
- ・ 条件（制約・制限）、基準（数字は有効）を示すとよい。

※参考 沖裕貴・田中均 2006 「山口大学におけるグラデュエーション・ポリシーとアドミッション・ポリシー策定の基本的な考え方について」 大学教育 3、39-55.

DP策定上の留意点

- ・ 各学部・学科等の卒業時の到達目標を、以下の5つの領域に整理して文章化する。
- 知識・理解 } 認知的領域 { 達成目標
 - 思考・判断 } 向上目標
 - 関心・意欲 } 情意的領域の達成・向上目標
 - 態度
 - 技能・表現 } 精神運動的領域の達成目標

到達目標に使う具体的な動詞（1）

■知識領域

列記する／列挙する／述べる／具体的に述べる
説明する／分類する／比較する
例を挙げる／類別する／関係づける
解釈する／予測する／選択する／同定する
弁別する／推論する／公式化する
一般化する／使用する／応用する
適用する／演繹する／結論する／批判する
評価する

到達目標に使う具体的な動詞（2）

■技能領域

感じる／始める／模倣する／熟練する
工夫する／実施する／行う／創造する
操作する／動かす／手術する／触れる
触診する／調べる／準備する／測定する

■態度領域

行う／尋ねる／助ける／コミュニケーションする
寄与する／協調する／示す／見せる
表現する／始める／相互にやりとりする
系統立てる／参加する／反応する／答える
配慮する

DP策定上の留意点

平成19年9月19日 教育・学生支援会議（案）

全学のディプロマ・ポリシー（DP）

全学のDPが、各学部等のDP作成における方向性の提示となることも意識しつつ、複数のキーワードを包括した形の文章として示す。

<自ら必要な知識や技術を学んでいく力>

・ 社会の中で一人の人間として生き、自らの個性や適性に相応して自らの役割を果たしていくために必要な教養、知識と能力を身につける。

（キーワード）

個の確立、自主学習意欲、継続力（関心・意欲、態度）、専門的知識、専門的技術、情報収集力（知識・理解、技能）

DP策定上の留意点

<議論し、企画をまとめ、提案する力>

・ 自らのもつ知識や技術を活用しながら他者と議論し、企画をまとめあげ、提案を行うことができる。

（キーワード）

課題発見・解決力、応用展開力、総合的思考力、科学的思考力（思考・判断）、論理的表現力、語学力、リーダーシップ力、コミュニケーション力（技能・表現）

<協働し、実践していく力>

・ 立案した企画について、目的達成を目指し、家庭・地域・社会における協働を通じ、実践していくことができる。

（キーワード）

実践的行動力、〇〇への貢献、使命感、責任感（態度）、協調性、リーダーシップ力、コミュニケーション力（技能・表現）

II. カリキュラム・チェック・リストの作成



内 容

I. DP・CP・APの
策定と一貫性構築の意義

II. カリキュラムチェック
リスト（CCL）の作成

III. カリキュラム・マップ
（CM）の作成

IV. その次に来るもの
その先にあるもの



III. カリキュラム・マップ（CM）の作成

1. カリキュラム・マップの開発

カリキュラム・マップとは？

- ・カリキュラムにおける授業科目間の系統性・関係性を図示化したフローチャートやダイアグラムのこと。
- ・図示化は、情緒面、注意面、教示面、支援面、記憶面で学習者の内容理解を高める（関2007）。
- ・コンセプト・マップ（概念地図法）と呼ばれている学習指導法（岸 2000）をカリキュラムに応用したもの。コンセプト・マップは、初等中等教育において、学習者の知識状態の確認をするために使用されており、高等教育においては、工学分野を中心にカリキュラムを表現する手法として使われている（佐藤 1996）。また、シラバスを図示化する手法として使われている例もある（グリゲナ 2004、Nilson 2007）。

1. カリキュラム・マップの開発

カリキュラム・マップとは？

- ・FD教材としてのメリット：
 - 電子メディアでも紙媒体でも表現できる
 - 一枚で全体を俯瞰できる
 - 背景の異なる複数メンバーでの共有がしやすい
 - 記憶に残りやすい
- ・FD教材としてのデメリット：
 - CCLと併用しなければ、
 - 厳密な体系性・関連性を理解することができない。

1. カリキュラム・マップの開発

カリキュラム・マップ
の作成

授業科目シールを付箋
に張り付けて、模造紙
上に（時間軸で並べ）
手書きで関係を図示

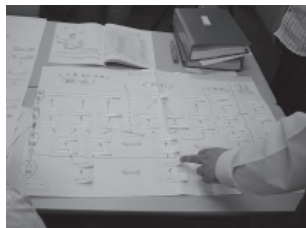


ポスター発表による相
互批評とさらなる改善



授業科目シール

1. カリキュラム・マップの開発



理学部数学コース

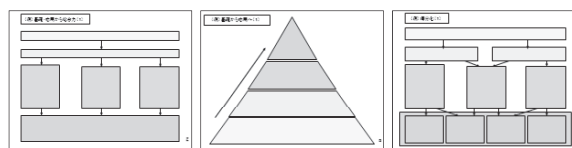


法学部総合政策学科

学問分野の多様性を表現する多様な簡易マップの完成

1. カリキュラム・マップの開発

カリキュラム・マップのモデルパターン



基礎・応用⇒総合力

基礎から応用へ

細分化

1. カリキュラム・マップの開発

カリキュラム・マップのモデルパターン



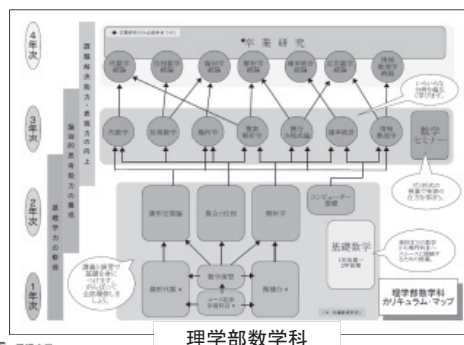
基礎・応用⇒総合力

基礎から応用へ

細分化

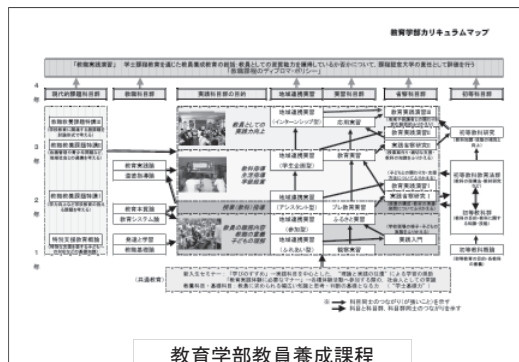
「全体の構造や流れがわかりやすいか」
「一目で授業科目同士の関係がわかるか」
「興味深く見てもらえ、記憶に留まりやすいか」
「学生にとって、自らの学習内容の把握に役立つか」

2. カリキュラム・マップの実際



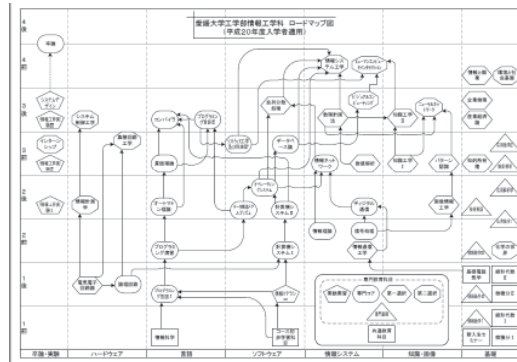
理学部数学科

2. カリキュラム・マップの実際



教育学部教員養成課程

2. カリキュラム・マップの実際



工学部情報工学科

2. カリキュラム・マップの実際



法文学部総合政策学科企業システムコース

Ⅲ. カリキュラム・マップ (CM) の作成



内 容

I. DP・CP・APの
策定と一貫性構築の意義

II. カリキュラムチェック
リスト (CCL) の作成

III. カリキュラム・マップ
(CM) の作成

IV. その次に来るもの
その先にあるもの



IV. その次に来るもの、その先にあるもの

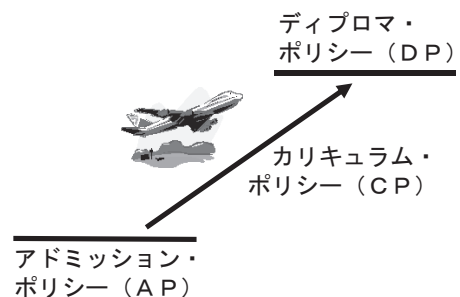
ワークショップを終えてから

(1) AP・CP・DPと個々の科目の一貫性

- ・表現形式の統一?
- ・シラバスの見直し、DPの見直し、
⇒CCLの改訂
- ・APの改訂 入試方法の見直し
CMの改訂 新しい科目やカリキュラム
DPの改訂 養成する人材像の見直し

ワークショップを終えてから

・求められる『三つの方針』



次のステップに向けて

(2) 誰のためのAP・CP・DPか？
誰のためのFDか？

次のステップに向けて

(2) 誰のためのAP・CP・DPか？
誰のためのFDか？

学生のため

次のステップに向けて

(2) 誰のためのAP・CP・DPか？
誰のためのFDか？

学生のため



教職員のため

次のステップに向けて

(2) 誰のためのAP・CP・DPか？
誰のためのFDか？

学生のため

←受験生のため



教職員のため

←就職先のため

次のステップに向けて

(2) 誰のためのAP・CP・DPか？
誰のためのFDか？

学生のため

←受験生のため



教職員のため

←就職先のため

お わ り に

ご清聴ありがとうございました。
ご質問・ご意見は下記までお願いします。

naoto@m.ehime-u.ac.jp

愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室長
愛媛大学 医学部 総合医学教育センター長
小林直人



わかりやすいシラバスづくり

シラバスを通して良い授業をデザインする

愛媛大学教育・学生支援機構 教育企画室長
小林 直人

1

内 容

1. シラバスとは何か
2. シラバスの項目例
3. 授業科目名・キーワードの書き方
4. 目的の書き方
5. 目標の書き方
6. 授業概要・スケジュールの書き方
7. 評価に関わる情報の書き方
8. 履修条件の書き方
9. 受講のルールの書き方
10. 学習上の助言の書き方
11. 教材に関わる情報の書き方
12. オフィスアワー・連絡先の書き方



参考文献一覧

2

内 容

1. シラバスとは何か
2. シラバスの項目例
3. 授業科目名・キーワードの書き方
4. 目的の書き方
5. 目標の書き方
6. 授業概要・スケジュールの書き方
7. 評価に関わる情報の書き方
8. 履修条件の書き方
9. 受講のルールの書き方
10. 学習上の助言の書き方
11. 教材に関わる情報の書き方
12. オフィスアワー・連絡先の書き方



参考文献一覧

3

1. シラバスとは何か？

(1) 定 義

「教師が、コースの初めに学生に配布する授業計画のことです。そこには、各回の授業のテーマや、そのために予習しておくべきことがら、課題、評価の方法と基準などを盛り込みます。」

(池田ら2001:p.59)



4

1. シラバスとは何か？

(2) シラバスの役割

- ① 授業選択ガイドとして
- ② 契約書として
- ③ 学習効果を高める文書として
- ④ 教員と学生の人間関係づくりのツールとして
- ⑤ 授業の雰囲気伝える文書として
- ⑥ 授業全体をデザインする文書として
- ⑦ カリキュラム全体に一貫性をもたせる資料として



5



シラバスは学びの地図



6

2. シラバスの項目例

- | | |
|-----------------|------------------|
| 1) 愛媛大学 | ・受講条件 |
| ・授業題目 | ・受講のルール |
| ・授業のキーワード | ・教科書 |
| ・授業の目的 | ・参考書 |
| ・授業の到達目標 | ・教科書・参考書に関する補足情報 |
| ・授業概要 | ・オフィスアワー |
| ・授業スケジュール | ・連絡先 |
| ・授業時間外学習にかかわる情報 | ・参照ホームページ |
| ・成績評価方法 | ・その他 |

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

2. シラバスの項目例

- | | |
|-------------|---------------------------|
| 2) 金沢大学 | ・テキスト・教材・参考書等 |
| ・授業科目名(英文名) | ・その他履修上の注意事項や学習上の助言 |
| ・キーワード | ・オフィスアワー等(学生からの質問への対応方法等) |
| ・授業の主題 | ・受講者調整の方法 |
| ・授業の目標 | |
| ・学生の学習目標 | |
| ・授業の概要 | |
| ・評価の方法 | |
| ・評価の割合 | |

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

3. 授業科目名・キーワードの書き方

- 1) 授業科目名
- ・学部、学科等のカリキュラム・ポリシーに沿うように
 - ・一般教育(共通教育)の場合は、多様な学生を想定し、わかりやすいタイトルの工夫を
例 「基礎生化学」→「生活の中の生化学」
「骨学入門」→「ヒトの骨『百物語』」
 - ・留学生対応や海外大学との単位互換のために英文併記を求められることがある

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

3. 授業科目名・キーワードの書き方

- 2) キーワード
- ・学生が授業を概観できるように、授業で扱う主なトピックを抜き出す
 - ・授業終了後には、そのキーワードについて説明できるようになっていることが望ましい
 - ・留学生対応や海外大学との単位互換のために英文併記を求められることがある

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

4. 目的の書き方

- ・ 目的 = この授業の存在意義(Purpose)
- ・ 学生からの「なぜこれを学ばなければならないの?」という問いへの答え
- ・ 「～するために」を入れるとよい

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

4. 目的の書き方

- ・ 学生を主語にする
× 「〇〇について説明する。概説する。」
教員が主語の文。概要説明になっている。
- 「××するために、〇〇について理解し、△△を的確に判断できるようになる。」
学生が主語の文。

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

4. 目的の書き方

- 総括的な動詞を用いて表現する

授業の目的に使用する動詞

修得する 身につける 理解する 創造する
位置づける 価値を認める 知る 認識する など

(日本医学教育学会2006)



5. 目標の書き方

- 目標＝授業終了段階で、学生にできるようになってほしい事柄(Goal)を「〇〇できる」のように動詞を使って表現
- 授業の目的を具体化したもの
(数個から10数個)
- 学生を主語にする



5. 目標の書き方

- 観察可能な行動で記述する
- 知識・態度・技能の三領域に分けるとよい

×「印象派絵画について感受性を高め、作品の価値を理解しながら、じっくりと味わう」

態度と知識が混在。抽象度が高い。

○「印象派絵画の芸術的価値について、1990年までの通説と、それ以降の通説の違いを踏まえて、説明することができる。」



5. 目標の書き方

授業の目標に使用する動詞(知識領域)

列記(挙)する 述べる 推論する 記述する 説明する
分類する 比較する 対比する 類別する 弁(識)別する
関係づける 予測する 具体的に述べる 結論する
同(特)定する 公式化する 一般化する 指摘する
選択する 使用する 応用する 適用する など

(日本医学教育学会2006)



5. 目標の書き方

授業の目標に使用する動詞(態度領域)

協調する 配慮する 参加する コミュニケートする 討議する
尋ねる 示す 見せる 助ける 感じる 行う 相談する
寄与する 反応する 応える など



(日本医学教育学会2006)



5. 目標の書き方

授業の目標に使用する動詞(技能領域)

測定する 実施する 模倣する 熟練する 工夫する
触れる 行う 調べる 操作する 挿入する 準備する
手術する 視診する 聴診する 触診する 打診する など

(日本医学教育学会2006)



5. 目標の書き方

- 一つの文章に一つの目標
複数の目標があると達成度測定が困難
- 評価される条件を明示する
例 「電卓を使って」「辞書を見ながら」
- 評価される基準を明示する
例 「具体例を3つ以上説明できる」
「1分以内に完成させることができる」
- 現実的かつ、チャレンジングなレベルに設定する(ジャンプすれば届く距離)

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

5. 目標の書き方



目標は、そのまま成績評価項目になる。
適切な目標は、学生の自学自習を促す。

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

目標に関する練習問題

事例に記載された目標の問題点を指摘し、書き直しをしてみてください。正解は一つではありません。

(1) ハプスブルグ家所蔵の美術を鑑賞する。

★問題点

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

(1) ハプスブルグ家所蔵の美術を鑑賞する。

★問題点

- これはそもそも「目標」ではなく「目的」なのでは？
- 何のために鑑賞するのかが伝わるように書くべき。

★書き直し

「美術を鑑賞する」ために具体的に何が必要なのかを考え、それを「目標」とする必要がある。

歴史(美術史? 政治史?)
美術鑑賞の基本的視点?

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

(2) ロシア語で日常会話を楽しむことができる。

★問題点

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

(2) ロシア語で日常会話を楽しむことができる。

★問題点

- ・「日常会話」が曖昧。
- ・「楽しむ」は測定が困難。楽しむ以前に、できるようになっていなければならない行動があるはず。
- ・この文章も「目的」の「目的」になってしまっている。

★書き直し

初対面の相手と、ロシア語で、挨拶と自己紹介(3分間)をすることができる。

(3) 家庭料理の基礎をマスターさせる。

★問題点

(3) 家庭料理の基礎をマスターさせる。

★問題点

- ・「マスターする」があいまい。
- ・「基礎」も不明確。
- ・教員が主語になっている。

★書き直し

日本の一般家庭で作られている料理の中から任意の3品4人前を、何も見ないで、60分以内に作ることができる。

(4) 小学校教科「体育」を担当するために必要な事柄について理解するとともに、それを教えるための基礎技能を身につける。

★問題点

(4) 小学校教科「体育」を担当するために必要な事柄について理解するとともに、それを教えるための基礎技能を身につける。

★問題点

- ・動詞が二種類入っている。
- ・「必要な事柄」「理解」「基礎技能」が曖昧。

★書き直し

- ・小学校教科「体育」で扱うスポーツの中から任意の3種について、その歴史・ルールについて説明ができる。
- ・授業で扱うニュースポーツのうち、1つについて、完全な初心者にもルール指導ができる。

事例 H先生

「この講義では、コミュニケーションとしての行動を考える。まず、私たちの身近な日常の行動をふりかえり、例えば、人が対面して会話しているときの距離や姿勢、接触の仕方や身振り、仕草と行ったものを取りあげ、そこにどのようなコミュニケーションが成立しているかを考える。また、様々な分野から提出されているコミュニケーション理論を紹介するとともに概説する。最後に、チンパンジーの言語能力を検討することによって、ヒトのことばによるコミュニケーションの基盤を探る。」

事例 H先生

「この講義では、コミュニケーションとしての行動を考える。まず、私たちの身近な日常の行動をふりかえり、例えば、人が対面して会話しているときの距離や姿勢、接触の仕方や身振り、仕草と行ったものを取りあげ、そこにどのようなコミュニケーションが成立しているかを考える。また、様々な分野から提出されているコミュニケーション理論を紹介するとともに概説する。最後に、チンパンジーの言語能力を検討することによって、ヒトのことばによるコミュニケーションの基盤を探る。」



事例 Y先生

「『有機化合物の性質と反応Ⅰ』』に引き続き、有機化学の基礎知識を習得するために、次の到達目標を掲げる。
①代表的な芳香族化合物を列挙し、その物性と反応性を説明できる。(知識)...⑬含窒素化合物の塩基性を説明できる。(知識)」



事例 Y先生

「『有機化合物の性質と反応Ⅰ』』に引き続き、有機化学の基礎知識を習得するために、次の到達目標を掲げる。
①代表的な芳香族化合物を列挙し、その物性と反応性を説明できる。(知識)...⑬含窒素化合物の塩基性を説明できる。(知識)」

⇒「目的」は？

なぜ「有機化学の基礎知識を習得する」のかが学生には自明でしょうか？ DPとの関連は？



目的・目標に関する個人ワーク

ご自身のシラバスの目的・目標を見直してみてください。

6. 授業概要・スケジュールの書き方

- 目的・目標と対応させる。
- 授業概要は、授業で扱う内容を大まかに記述する。
- 授業スケジュールは、無理のない進度で
＝詰め込み過ぎない
(数回で区切りをつけてユニット制とする、複数回テストを設定することで内容をこまめに確認する、予備日を設ける)
- わかりやすい「流れ」を考え、要素を選択・配列する



6. 授業概要・スケジュールの書き方

学習順序の原理

簡單	→	複雜		
既知	→	未知		
個別	→	一般		
具體的	→	抽象的		
結論	→	理由		
過去	→	現在	→	未來
全體	→	詳細	→	全體

(內用2005-p.78)

(内田2005:p.78)



6. 授業概要・スケジュールの書き方

- 授業時間外の学習課題等を提示する。
- 授業時間外での学習を促す工夫
 - ①教科書の予習(例:章を提示)を課す
 - ②毎回授業の冒頭でテストを行う
 - ③授業のフィードバックを課す
 - ④ボーナス課題を出す
 - ⑤グループで取り組む課題を出す
 - ⑥試験の例題や過去問を公表する

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

6. 授業概要・スケジュールの書き方

- 毎回具体的に計画が立てられない場合は下記のように書く。
- 例「第2～5回 学生が選んだテーマでグループディスカッション」
- シラバスを変更する際は、学生に変更の理由を説明する。新たなシラバスを配布する。ただし原則はシラバスどおりに進めることが望ましい。

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

7. 評価に関わる情報の書き方

- テストやレポートの内容, 提出期限, 時期を明記することで, 学生の計画的な学習を促す。
- 基準, 配分割合(例 テスト60%、レポート20%、毎回のコメントシート20%)を明記する。
- 目的・目標と対応させる(原則全て網羅, 間引きしない)。
- 成績評価基準は測定可能なものにする。
- 学習と全く関係のないものを評価対象としない。

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

8. 履修条件の書き方

- 学生のニーズと授業内容とのミスマッチを防ぐため、事前に履修が必要な科目や能力を記載する。

「高校で学習する日本史の知識を必要とする」
「●年次に英語Ⅰを履修していることが望ましい」

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

9. 受講のルールの書き方

- 資料配布方法, 課題提出のルール
例「資料の予備は保管しません。出席者同士でコピーをすること」
「当日欠席により課題提出ができない場合は、事前に受け付けます」
- 受講のマナー
例「授業中の飲食は禁止」
- 教員の常識≠学生の常識。お互いが不愉快な思いをしないために具体的に記載する。

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

10. 学習上の助言の書き方

- 効果的な学習上の助言

例

「〇〇新聞の△△欄は、授業に関係の深い記事が掲載されるので、目を通しておくとよいでしょう。」

「市内の〇〇センターには関連する最新情報が掲示されています。」

「図書館のスタディ・ヘルプ・デスクでは、本授業に関する質問を受け付けています。気軽に利用して下さい。」

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

11. 教材に関する情報の書き方

- 教科書を使用するかどうか、する場合は、書名、著者、出版社、出版年、価格に関する正確な情報を記入する。絶版等入手困難になっていないかどうかを確認する。
- 授業中に直接使用しない場合は、どのように使うかを明示する。明示できない場合は、参考書扱いとする。
- 一般教育(共通教育)の場合、本情報は、学問への誘い、自学自習のガイドという意味があるので丁寧に記述する。
- ホームページや研究会等の情報提供も有効。

12. オフィスアワー・連絡先の書き方

- 具体的な時間の指定を
×「いつでも構わない」 ○「水曜日12時～14時」
- 授業が重なっている学生がいることを配慮して、休み時間を含めた時間帯にするのが望ましい。
- 電話番号、メールアドレス、研究室の場所を記載する。
- 学生にとって研究室訪問は勇気のいること。研究室への訪問を課題とするのも良いアイデア。



シラバスから授業は始まっています。
学習を促すツールとして活用を。

参考文献

- 池田輝政・戸田山和久・近田政博・中井俊樹(2000)『成長するティップス先生』(玉川大学出版会)
- 内田実(2005)『実践インストラクショナルデザイン』(電機大出版局)
- 愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室(2007)『FDハンドブック第1巻 もっと!! 授業を良くするために』
- 鈴木克明(2002)『教材設計マニュアル』(北大路書房)
- 徳島大学大学教育委員会(2002)『FD推進ハンドブック』
- 日本医学教育学会(2006)『第33回医学教育者のためのワークショップ(富士研WS)配布資料』
- 北海道大学高等教育機能開発総合センター(2000)「北海道大学FDマニュアル」『高等教育ジャーナル』第7号
- Grunert, Judith (1997) *The Course Syllabus*. Bolton, MA: Anker Publishing Company